
夜明けの晨星

嘉月 幸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜明けの晨星

【NZコード】

N1097Y

【作者名】

嘉月 幸

【あらすじ】

星詠み それは星の動きや輝きを読み、人や世界の事象を占い予測する術。

「あたしは貴方達が『星詠みの巫女』って呼ぶ存在よ」

ある夜、フォニカ女神殿に忍び込んだ魁に少女・星華はそう微笑んだ。『星詠みの巫女誘拐』。星を奉る聖なる地、聖都ナヴィガトリアで盗賊団の首領を務める魁にその罪状が突きつけられると同時に、魁の元に欲しくもなかつた厄介事がやつてきた。 3年 4年
ぐらい前に某所に投稿したものです。

序章 夜一夜 終わり無き夜に

見上げた夜空には、天満星が瞬いていた。

闇が覆い尽くす世界の中で月とともに輝く、世闇に生きる人々を導く光　　毎の空とはまったく違う光景が天上一面に広がっていた。その点々と散らばる星達の間を、一筋の光が走り抜ける。

「流星、か……」

流れていったその星の軌跡を目で追い、青年　　魁はぱつりと呴いた。

流れ星。人々の間では、流れ星が消えるまでに二回願い事を唱えると願いが叶うというけれども、彼にとってその星はそれほど良い意味を成さない。

（嫌な事がないといいけど）

星詠み　　天上に瞬く星を見、その動きや輝きから人、そして世界の事象を占う術。

その結果はあくまでも占いであり、これから起ころうとする可能性の一部にしか過ぎない。しかし、理論的には証明できない確率でそれらの予測が的中することも確かなのである。

その星詠みにおいて、普段そう目にする事のない流れ星は不吉な出来事の現れだといわれているからだ。

もう一度夜空を見上げ、時間を確認する。先程確認したときよりも、北天の星が数度進んでいる。この季節の星の位置からして、そろそろ深夜の十二時を回るころだらう。

時間だ。

そう内心呟いた瞬間、ガラスの割れる大きな音と共に、眼下に広がる神殿の内部が一気に騒がしくなった。その後、見慣れた鎧を着けた兵士たちが神殿の中庭に散らばっていく。

その姿を目に收め、魁は口角を吊り上げる。そして、闇の中へと身を翻した。

白色の石を基調に作られた神殿のその区画は、外の騒ぎとはまつて変わって不気味なほど静まり返っていた。音自体は遠くで聞こえているものの、それすらも別世界で発せられているかのようだつた。魁は赤い絨毯の敷かれた廊下の角から少しだけ顔を出し、その先の様子を覗き見る。

あたりに人影は無かつた。ましてや、人気の欠片すらもない。

それを確認した魁は素早く物陰から移動し、その扉の前に立つた。周囲の壁や床と同じ石で作られた、宝物庫の入り口を守る重厚な扉。

宝物庫　それが今夜の、魁の目的の場所だつた。

ただし、宝物庫といつても金銀財宝がこの扉の先に眠っているわけではない。金目の物が保管されている別の宝物庫には既に魁の仲間が向かつていた。囮として。

懐から鍵束を取り出し、その内の特殊な形をした一本を選び取る。魁はその鍵を、鍵穴に挿し込んだ。しかし、魁が挿したのは扉の中央に開いた穴ではなく、扉の上方　扉の影になつて見えなくなつている、壁に空いた小さな穴であつた。

力チリ、と何かが回る手応えを感じ、魁は別の鍵を今度は扉の根元の床へと差し込んだ。

上の鍵と同じく、開錠された感覚を確かめ、最後に使つた二つの鍵をピタリと合わせて扉の鍵穴へと差し込む。

自然と、アイスブルーの魁の目が細められる。

意を決し錠を回すと、一際大きく感じられる小さな振動がその手に伝わつた。

音を立てぬように慎重にその扉を押す。

(開錠、完了)

特定の鍵を用い、更にそれらを定められた順に鍵穴に通さなくては決して開かない扉。もし、間違えたりすれば、その扉の開錠は不可能となってしまう。それだけの仕掛けを施すだけの価値を持ったものがこの先にあるのだ。

自然と高鳴る心臓を抑え、魁は部屋の中へ足を踏み入れた。途端、焼けた本と酷い黴の臭いが彼を襲う。しばらくの間誰一人としてこの部屋に入つていなかつたのか、埃が目に見えて分かるほど白く積もつてゐる。あまり長居したい場所ではない。

部屋の状態に思わず顔を歪めながらも、魁は足を進める。部屋中には一面の本棚と、床に無造作に積み上げられた本の山。

一見すれば書庫のようにも見え、自分達盜賊が狙うには不釣合いな物。

だが、それらはもしかすれば宝石なんかよりも遙かに価値のあるものたちばかりだった。

この宝物庫の存在は、フォニカ力神殿の者でも極一部の者しか知らない。通常立ち入り厳禁とされているこの部屋の存在を、神殿を取り纏める長老達が最重要機密として取り扱い、外部に一切が知られることのないように隠蔽しているのだ。故に、一般の兵にこの場所が預けられる事はない。ここが大切な場所であるという事を、悟られないようにするためである。立ち入り禁止の理由など、老朽化が原因とでも言つておけば十二分に通用する。

魁がここまで容易に侵入できたのは、そういう事情のおかげでもあつた。

だが、未だ兵に見つかっていないとはいえ、悠長なことはしていられない。

魁は本の一山に積もつた埃を荒々しく払い、本を手に取つた。闇に慣れた夜目を駆使し、ぱらぱらと中身にざつと目を通しては、その中の意に適つた目ぼしいものを乱暴にザックへと放り込んでいく。（見つけてやる。師匠せんせいが見つけようとしたアレの、手がかり）

ただひたすらに、大切なものを取りこぼさないように、魁は黙々と作業を続けた。忙しく走らせる田は、瞬きもしないほどに真剣さを帶びていた。

だからこそ、魁は気付くことが出来なかつた。

小刻みなりズムで近づいてくる、その軽やかな足音に。

バタンッ

と、突然響いた扉の閉まる大きな音に、魁は反射的に振り向いた。手に持つていた本を放り投げると同時に、腰のベルトにかけたナイフに手を伸ばし、それを視線の高さで構える。

(つ！ 見つかった……！)

湧き上がる焦燥。一足飛びに敵との距離を縮めようと、両足に力を込める。

だが、魁がその場から動くことはなかった。

彼の視線の先　そこにいたのは、魁の予想に反し鎧を着込んだ兵士ではなく、ビロードを纏っていた。屈強な兵士どころか、暗がりにいても判るほど華奢な体付きをしているのが分かる。

扉を押さえるようにピタリと背を貼り付けている人影。雲間を抜けて、吹き抜けるような天井近くにある窓から差し込んできた月明かりが、その姿を浮かび上がらせる。

頭からすっぽりと被った濃紺のローブのせいで顔は見えないが、暗がりでも判るほど華奢な体付き。フードの隙間から漏れる、星屑のような長いブロンドの髪。

「女……？」

「た、助けて！」

「 つ！？」

怪訝そうに眉を寄せた魁が、呟くのと同時。ローブを被った少女がタックル紛いの勢いで魁に飛びついた。

突拍子もないその行動に、魁は回避行動を取ることすらも出来ず、されるがままに少女のか細い腕が彼の体に回される。その慣れない柔らかな感覚に一瞬肩を飛び上がらせるが、ハッと我に返り慌てて女の体を引き離す。

「なんなんだお前」

「ちょっとへまやつて追われてるのつ。お願ひします。どうか助け

「てくだ……」

助けて下さい。そう言おうとした少女の言葉を、荒々しい足音が遮った。

その音にハツと気付き、魁が身を潜めようとするが、遅い。

次の瞬間には、大きな音を立てて扉が開け放たれていた。

そこに現れる、鈍い光を放つ簡素な鎧を着た一人の神殿兵。何か相当な運動をしたのか、無様にも息が上がっている。

素早く、少女が魁の背に隠れる。その兵の表情が、彼女を見つけて微かに緩み、

「見つけ……」

直後、彼の視線が魁を捕らえ、固まつた。

「なななっ！ なんで盗賊が」

「慌てるな！ お前は他の者を呼んで来い！」

おろおろとうろたえる兵士とは対照的に、その後ろから入ってきたもう一人が冷静に命じた。それに従つて、気弱そうな神殿兵は姿を消す。

チッと、表情には出さず、魁は内心で悪態をついた。

見つかつた以上、のんびりはしていられない。

だが、正面には入り口を塞ぐ兵士。おまけに、何故だか知らないが正体不明の少女にジャケットの裾を、皺が出来るほどにぎゅっと掴まれている。双方から逃げるのは、容易ではない。

ちらり、と魁は横目で少女の姿を見遣る。兵士の様子から察するに、差し詰め、魁達の騒動に紛れて神殿の宝を狙おうとした同業者、というところか。

「いい度胸だな、
影の星シャドウ・スター 首領 魁」

真っ直ぐに魁を見据えて、兵士がその手に持つている鉄槍を構える。洗練された動き。

「だから？」

だが、向けられた槍の矛先を全く脅威ともせず、魁は鼻で嘲笑うかのように言い返した。

兵士が、じりっと半歩前に出る。

「こゝでお前を捕らえる！」

気迫の言葉と共に、兵士が真正面から魁に向かつて走り出した。

重そうな鎧を着込んでいる割に、その動きは素早い。

魁が鞘からナイフを引き抜き、兵士の懷に潜り込もうと、駆け出す。

が、

「こ、来ないで　　つ！！」

そんな叫び声と共に、走り出そうとした魁の頬を何かが物凄い勢いで掠めていった。

魁がそれを目で追うよりもやや早く、ドゴオ、とそんな間抜けな擬音がぴったりの音を立てて、十数センチはありそうな分厚い本が、兵士の頭にクリーンヒットしていた。

ふらり、と仰向けに倒れこんでいく兵士。魁の目の前では、それを見た、今しがた強烈な一撃で大の兵士を畳倒させた当の少女が、両手を腰に当てて何故だか誇らしげにふんぞり返っている。

少女のその見事な投げっふりに、魁は半ば口を開いたまま呆然と立ち尽くしていた。しかし、そんな魁の鼻先に、突如勢いよく振り返った少女の人差し指が突きつけられた。

「あーつもつ何やつてんのよー。早く逃げなさいよ、あたしを連れて！」

開口一番。その口から出てきた言葉は、最初のしおらしさなど欠片もなかつた。

またもや唐突なその一言に、不機嫌さを隠そつともせずに魁が目を細める。

「……お前を連れて　　？」

「そうよ、あたしを連れて逃げるの！　か弱い乙女がどこぞの厳つくて汗臭い兵士どもに追いかけられてんのよ。普通男なら乙女を連れて颯爽と逃げるもんでしょう！」

威勢のよい、高らかなソプラノ。だが、魁はその言葉に異を唱え

ずにはいられなかつた。

「誰がか弱い乙女だつて……？」

「あたしが」

「……悪い。もう一回

「だからあたしが」

「すまない。どこをどう見たらか弱い乙女に見えるのか俺には理解不能だ」

「あああああ！ もうっ！ 早くしてよ！ 捕まっちゃうでしょ！」

彼女の言葉が示すとおり、急速に近づいてくる大量の人気を魁は感じ取っていた。

仲間もいなこの状況、兵に囲まれればどうなるのかは想像に難くなかった。

「ねえちょっと！ あんたなんとか言いなさ……！」

「喚くな、五月蠅い」

溜息一つ。頭痛のしだした頭を振つて、魁は少女の体を軽々と肩に担いだ。

ひやあ、と上がつた短い悲鳴を無視して、無言で、手に持つていた袋を少女に押し付ける。

それと同時に、数え切れないほどの大量の兵士が部屋に雪崩れ込んで来る。

取り囮まれるよりも早く、魁は床を蹴り、本棚へと足を掛けた。そこから間髪おかず、天井からぶら下がった古いシャンデリアに飛び乗り、更に上へ跳躍。魁の視線の先　目指す場所には、この宝物庫唯一のガラス戸。

「ま

待て、と、眼下から投げ掛けられた一言を聞くよりも早く、魁は月明かり差し込む天窓へと身体を投げ出した。

* * *

身の凍るような冷気が漂う神殿の外、担いでいた少女を砂地の上に下ろし、魁は盛大な溜息を吐き出した。

「つたく……お前のせいでお色々計画が台無じじゃないか」

「あらそり？ それはごめんなさい」

全く悪びれる様子のない少女に、魁の中に殺意に近いものが湧いてくる。この女のせいで魁は敵に見つかり、満足に目的を達成することもできなかつた。下手をすれば捕まつっていた可能性もある。しかも、何故その諸悪の根源を助けなくてはいけないのか。

「顔も見せずにどうこうつもりなんだ。それに神殿に忍び込むならもっと用心して入れ。お前のような技量で神殿の宝を狙うなど、俺の目から見ても自殺行為に等しい」

「忍び込む？ あたしは忍び込んだわけじゃないわよ。それに宝なんか興味ないしね」

「……？」

言葉の意味が解らず、魁は怪訝そうに眉根に皺を寄せる。

「あたしは神殿あたしから抜け出してきたの」

少女が細い指先をフードにかけ、ゆっくりと下ろしていく。月明かりに照らされて、その顔が夜でもほつきりと見え 魁は息を呑んだ。

砂漠に生きる者にしては珍しい、透き通るような白い肌。さらりと流れ落ちる、腰よりも長いブロンドのポニーテール。

星空の下、月光を浴びるその姿は、まるで月の女神のように神々しく

「あたしは星華・セイリオス。貴方達が『星詠みの巫女』って呼ぶ存在よ」

浮かべた笑みは、導く星のよつとに強く輝いていた。

第一章 キノスラ

灼熱の太陽が、砂で覆われた大地を容赦なく照らしていた。その強い光が砂で灰ばんだ石壁を白く照らし、熱せられた地面からはゆらゆらと陽炎が立ち昇っている。

砂漠の昼は、暑さとの戦いだ。

なあかつ今日は街の外で砂嵐が起こっているせいか、本来ならば涼しさをもたらす風すらも、吹く度に砂が肌に張り付いて気持ちが悪い。

いくらオアシスの周りに出来た街といつても、大自然の摂理には敵わないという事を実感させられる。

その熱気の立ち込める砂漠の街・ナヴィガトリアを、猫の毛のように跳ねた金髪を揺らして、魁は黙々と歩き続けていた。

「ねえねえ」

その広い背に、鈴を転がしたような声が投げ掛けられる。魁の背後には日の強い砂漠というのにショートパンツとキャミソールしか身に着けていない少女と、薫色の髪をした背の低い少年がちまちまと歩いて付いている。声は、その一人の片方 少女のものだ。

しかし、彼は応えようとも歩みを止めようとしない。

「ねえってばあ」

もう一度、少女の声が投げ掛けられるが魁の反応は変わらず。さすがに痺れを切らしたのか、その声の持ち主はとうとう声を張り上げた。

「ちょっと聞いてるのー?」

「聞いてない」

聞こえている、という事を如実に示しながらも魁は言葉でそれを否定する。

その態度が癪に障ったのか少女が大声を上げて抗議しようとし、彼女を必死になだめる少年。

そんな様子が視界の端に映るが、魁は背後でのやり取りを当然の如く無視し、大通りの一角に設けられている、二階建ての建物の古びた扉を押し開けた。

瞬間、風のように押し寄せる、立ち込める熱気と騒ぎ声。そして強烈な酒の臭い。

魁がその酒場に足を一步踏み入れると同時に、彼に向かつて幾つもの罵声にも似た声が挨拶代わりに投げられた。

「よお魁！」

「珍しいな！ 今日は女連れかあつ？」

大ジヨツキで水のように酒を飲みながら、魁をからかうように声を上げる中年男どもや柄の悪そうな大柄の男達。その中には魁の同業者や、表では口にも出来ないような仕事を手にかけている者もある。貧民街にあるこの酒場は、そういうた者達が集まる場所だった。対し、魁はまるでそれらが他人事のように、徹底的な無視を決め込んでいた。

だが、

「神殿に忍び込んだんだって！？」

「人相書きが出てたぜ！ お前もいい加減首が危ねんじゃねえのか！？」

その一言にピクリ、と魁の右頬が引き攣った。

反射的とも思える反応の速さで、魁は氣だるげに進めていた足を止め、その声の飛んできた方向をゆっくりと見遣る。金色の髪によつて作られた影から覗く、釣り目気味のアイスブルーの瞳。

彼の氷の刃を思わせる視線が、問題の一言を発した男を貫いた瞬間。愉快そうに酒を飲んでいた男の笑顔が時を止めたかのように固まつた。

途端、酒場が不気味なほど静まり返る。

先程とはがらりと雰囲気の変わった、風のない水面を思わせるような静寂に包まれた店内を抜け、魁はカウンター席へと付いた。その左隣に髪の長い少女、更にその隣に少年が腰を下ろす。

「……いつもの。強めで」

「あいよ！」

ぶつきらぼうな魁の注文に、カウンターに立っていた大柄な男店主が威勢良く返事をする。その明るい声に、不穏な空気に支配されていた酒場は徐々にいつもどおりの騒がしさを取り戻していく。

数秒後、いつも好んで飲むカクテルが手際よく作られ魁の前に置かれた。グラスの縁に添えられた、幾筋もの切込みを入れたライム。この男は、見た目に似合わないお洒落心でこういった飾りをつけることが多いのだ。

それを感情の任せるままに、魁は一気に呷った。グラスから急激に減っていく黄色い液体を見て、先程までの怒りはどこへ行つたのか隣にいる少女が興味深そうに目を丸くする。

「なーにそれ？　お酒？」

「おうつ。嬢ちゃんも飲むか？」

「飲むー」

そう輝かんばかりの笑顔を見せられ、店主もそれに釣られて笑みを浮かべる。

(少し弱くしてやれよ)

そんな店主に向かつて、魁はグラスを傾けながら目配せする。すると、素早くその意図を読み取つた店主が、返事代わりに片目を瞑つて見せる。魁が好んで呑む酒は美味ではあるのだが、薄めても尚かなり度が高いのが難点なのだ。特に、女が飲むにはきつい代物だった。

店主が魁と同じ力クテルを少女に、無数の気泡が立つ炭酸水を少年にそれぞれ手渡す。

「あいよ、嬢ちゃん。^{じつき}斎はこっちな

「ありがと」

「ういッス！　ありがとうッス！」

斎と呼ばれた鳶色髪の少年と、例の少女がそれぞれ礼をし、口をつけた。どうやら、少女はそれがお気に召したらしく、気分上々に

斎と話し込み始める。これでしばらくはやつやつとした時間が過じせそうだ。

「」の場所に来るまでの道のりを思い出し、グラスに田を落とした魁の口からは自然と溜息が漏れた。

その様子を見、店主が呆れ顔になる。

「で、魁。 昨夜、やらかしたんだって？」

「どうだつていいだろ」

つい数分前にされたものと同じ質問をされ、魁はぶつきらぼうに言い口を閉ざした。だが、店内に群がっている男達に対するものと違い、店主への態度は角が取れたものだつた。

田の前の大柄な男性 この酒場を営む初老のマスターは、魁を幼少の頃より知る数少ない人物の一人であるのだ。昔から親も同然に世話になり、特に、魁が盜賊業を始めてからはその数も増えた。だが、そうは言つても、触れて欲しくないことだつてある。

「おっちゃんには関係ないだろ」

突き放すような魁の物言いに、店主 通称『おっちゃん』の眉根に皺が寄る。

「そつは言つけどなあ、宝を盗んだだけじゃなくて、その……『キノスラ』を連れ出したんだら？」

「連れ出したんじやなくて、抜け出したの」

渋々応えようとした魁が口を開くよりも早く、不機嫌そうな声がその質問に異を唱えた。視線の先には、やつぱりといづべきか、例の少女。

「魁……」の子は……？」

店主の訝しげな視線が、魁の隣に座る細身の少女に向かられる。それは『誰か』を尋ねるものではなく、事の真偽を確かめるものだつた。

頭痛のしそうな頭を押さえ、彼にだけ分かるように魁は小さく頷いてみせる。

「まさかとは思つてたが、やつぱり……か」

「こり、と。豪快な、それでいてどこか爽やかさを感じさせる笑顔を浮かべ、店主は少女に握手を求める手を差し出した。

「夏埜だ。よろしくな。皆こはおつちゃんって呼ばれてる」

「よろしく。あたしはせい……ふがつ！」

おつちゃんこと、夏埜にならつて名乗るひとした少女の口を、横から伸びてきた魁の手が押さえつけた。突然息が出来なくなり、少女が暴れる。その顔が苦しさを訴えるようになつて、魁はようやく手を放した。

「な、何すんのよー！」

「余計な事言うな。自分がどういう立場か分かってるのか」

「魁のいけずう。いいじやない別に、それぐらー」

「良くない。周囲のやつらに知られたら面倒だ」

自分を面倒扱いされたことに對してか、少女の顔が一瞬にして怒気に染まつた。

手にあつた酒を豪快に飲み干し、田舎じらを立てて、店主の前にドンッとグラスを置く。

「おつちゃん、もう一杯頂戴！　あ、今度は高いやつにしどいてね！　勿論お代は魁の方で」

「ちよつ……！　お前勝手に、それを誰の金だと想つて……おつちゃんも意氣揚々と作り始めるな」

あくまでも声を静めたまま、魁は少女を諫めるが、彼女はその声を気にする素振りすらも見せない。

「お前、誰のおかげでこうしていられると思つているんだ」

「魁様のおかげです。感謝します」

その棒読みの台詞に、今まで散々我慢してきた魁の中で何かが音を立てて切れた。

(この、女は……！)

一瞬、相手が女という事すらも忘れて殴り飛ばしたい衝動に駆られるが、何とか理性で押さえる。きっと相手が野郎だつたら確實にその首筋にナイフを押し当てる。いる。

「こちらは散々迷惑をこうむって、首すら危うくなっているのにこうして自由を堪能させているというのに

自分のせいで俺がどれだけ苦労してるとか分かっているのか。

斎が魁の異変を察知して、少女を宥め一人の仲裁に入ろうとする。が、それも次の瞬間には徒労に終わった。

（いい加減にしろ　－）

「星華っ！」

その魁の鋭い一言に、店中からガタンッと椅子が動く音が聞こえ、直後再び店内が静まり返った。

しまつたと、自分が口にした名の重大さに気が付いたときには、もう遅い。酒場中の視線が隣に座る少女に集まっていた。

「ほえ？」

静まり返った店内で、皆の視線の先にいる少女　星華・セイリオス。第五十六代星詠みの巫女の名を継ぐ少女だけは、事態が呑み込めずにただグラスを傾けていた。

星の動きや輝きを見、未来を占う星詠み。その占星術を専門的に扱う者達を『詠人』と呼ぶ。

その詠人たちの頂点に立ち、フォニカ神殿において星に舞と祈りを捧げる役目を授かつた者　それが『星詠みの巫女』である。

星詠みの巫女は原則的に、自分の命運を司る『宿星』が、星回りも中心である北極星であるものが選ばれる。人の世における星回りの中心　不動の星として人々の道標となる象徴的存在。故に、星詠みの巫女となつた者には、代々キノスラの名が授与されている。その役を十年ほど前に継いだ第五十六代目星詠みの巫女。それが、今魁の隣にいる星華・セイリオスだ。

星詠みの巫女は、その重要性から本来ならば星詠みに関する一切を管理する宗教組織・星枢軸フォニース　その本部であるフォニカ神殿について、その最奥で護られている。年に一度、三日間かけて星を讃える星夜祭で、夜空の下その姿を見ることは出来るのだが、実際にそ

の姿が見られるのは権力や富をもつた一部の者たちだけであり、一般的の者たちはせいぜい遠くからその姿を米粒程度に見ることしか叶わない。

ましてここにいる者たちの殆どが、財や名誉を失つたり裏の仕事に手を出したりしている、いずれにしても表では生きられない者たちだつた。星詠みの巫女など、雲の上のそのまた上、遥か高いところにいる存在。

その存在が、突然スラム街のど真ん中にある酒場に現れたとなつては、大変な騒ぎになることは目に見えていた。だからこそ、魁は彼女の存在を公にすることを避けたかつたのだが……

「マジで星詠みの巫女？」

「本物の星華・セイリオス！？」

酒に酔つた男達がわらわらと星華に群がつてくる。邪魔だ、五月蠅い、暑苦しい、あつち行け。魁が星華の隣で不機嫌そうな顔をしているのにも関わらず、先までの怯え具合はどこへ行つたのか男達に気にした様子は見られない。

「なな、ちょっと踊り見せてくれよ！」

やがて、群がる男の内の一人がそんなことを言い出す。

ちらり、と気になつて様子を伺えば、

「んー？ どうしようかなあー？ ……高く付くよ~？」

「何でも奢つてやるよ！ 頂だって見たいんだからさ。巫女様の宇宙一の舞をよ！」

「なあっ！」と、声を張り上げて男が酒場中の奴らに同意を求める、それに大きく頷く酒飲み達。

「んじやあ、星華・セイリオス、一曲じつきまーすー！」

と、まんざらでもない様子の星華。

酒場の一角に作られた小さなステージに向かつていくその小さな背中を見、

(身の程知らずが)

その胸中の弦きは、星華と酒場の者双方に向けられたものだ。

あれのどこが可愛いと思うのか、魁には不思議で仕方がない。

まあ、可愛くないこともないとは思う。といつよりも、容姿を言えば確實に平凡の域を出るだろつ。

小さな動きにもあわせて揺れる、流れゆるよつたブロンドの髪。ほんの少しの光にも艶めくその髪には、一つの癖もない。

瞳は澄んだ奥深さを併せ持つた天色。光の角度によつては時々神秘的な翠色が覗く。

日焼けしていない白い肌に、華奢ではあるが程よく肉の付いた体つき。巫女として舞を嗜むためか、その体には無駄というものが感じられない。

ポニー・テールに括られたその髪が、活発な印象を与える。世の女性がさぞ羨ましがるだろう容姿を持った少女。それを目の前にして、ここにいる連中が目を奪われないわけがない。

ただし、性格を除けば、だ。

……かくいう魁も、その姿を初めて見た瞬間は呼吸を忘れてしまつたのだが。

カラリ、と魁はグラスの中の氷を回す。

「で、お前は何だつてあの子を連れて來たんだ？」

「連れて來たんじやない。あいつが無理矢理付いて來たんだ」

魁はそう言って、昨夜の事の顛末を説明する。

神殿に忍び込んで、隠された宝物庫を狙つてきたこと。途中、あの女の邪魔を喰らつて計画が失敗に終わったこと。そして、その後囮役として別行動を取つていた仲間達と合流し、魁は先に聞きだしておいた星華のことを話したのだつた。

神殿の奥に閉じ籠つている　本人談では閉じ込められている

生活に嫌気が指し、自由を求めて盗賊団の騒ぎに乗じて上手く抜け出してきたらしい。だが見張りの兵たちに見つかって危うく捕まりそうになつてしまい、そこで隠れようと咄嗟に入った部屋で魁と鉢合わせ。そして現在に至る。

成り行き上、魁は星華を連れてきてしまい、星華は結果として抜

け出すことに成功した。しかし、だからといって星華を望みどおりに自由の身にするわけにはいかなかつた。

星詠みの巫女は、人々にとつて道標となる大切な存在。その役目を背負う彼女がいなくなつとなれば、民の間に動搖が走るのは必至だつた。

仲間と話し合い、当人には悪いが星詠みの巫女を神殿に早急に帰すべきだという意見に帰結した。

魁たちとて神殿を全面的に敵に回したいわけではない。相手は世界中に根の葉を広げる星枢軸、対しここちは一介の盗賊。直ぐにでも星華を送り返したかつたが、フォニカ神殿に堂々と返しにいくわけにも行かないのが現状だつた。

魁を首領とする盗賊団 影の星 は、以前から神殿と何かと敵対することが多い、事ある度に衝突を繰り返してきた。

それどころか、今回の一件で『星詠みの巫女誘拐』などという罪状を突きつけられ、下手に神殿関係者の前に姿を現すことも出来ない状況だつた。

この酒場に入ったときの「人相書き」や「そろそろ終わり」とはそういうた意味だつた。

最良の方法は、星詠みの巫女である星華本人が自ら帰つてくれることなのだが、それは到底期待できなかつた。なにせ、彼女は捕まる危険を冒してまで神殿を抜け出してきたのだ。わざわざ戻るわけがない。

結果、魁は星華・セイリオスを一時的ではあるが盗賊団に身を置く形で保護することに決めたのだ。

神殿の最奥で護られてきた少女だ。街の治安 特にスラムの危険性など知らないはずだ。理由はどうあれ星華がこちら側にいる以上、何があつてはそれこそ本当に魁達の命が危うい。

そう覚悟は決めたものの、これがもうちょっと大人しい女だつたら、どれだけ望んだことだらうか。

「誰が好き好んであんな厄介な女抱え込むかよ……」

はあ、と無意識のうちに深く長い溜息を吐いてしまつ魁。その視線は長いブロンドを靡かせた少女の背に注がれていた。

「あんな……星枢軸の奴」

どこか嫌悪感を滲ませた一言と共に、スッ、と細められる田。その今までどおりか違つ魁に夏埒と斎から出てくる言葉が消え失せる。

しかしそれも一瞬のことと、そうだと夏埒が唐突に思い出したように呟いた。

「アメフリが呼んでたぞ」

夏埒の口から出て来たその名に、魁はグラスを傾ける手をピタリと止めた。

「アメフリが？」

「そのままだと用事が忘れられそうだから会つたら言つてくれ、だとよ」

そう言われ、彼の視線がどんどん明後日の方に向いていく。その様子を察した夏埒と斎の視線が魁に痛いほど突き刺される。そして、グラスを口につけたまま、一言。

「……忘れてた」

跋が悪そうに呟いた魁に、おい、と夏埒が低く呻く。

「お前それでも 影の星 の首領かよ」

首領だからなんなど言い返したいところだが、仕事の約束を忘れたことを突かれては言える言葉もない。

再び疲れたような溜息一つ吐き出し、魁は残った酒を飲み干してすっと立ち上がった。

そこには先程まで見えていた、崩れた表情はない。あるのは敵を見据えるのと同じ瞳をした、仕事の顔。

「斎、行くぞ」

「了解ツス！」

数枚の安い硬貨を酒代としてカウンターの上に置き、踵を返す。

その背を、夏埒が呼び止めた。無言で振り向いた魁に、夏埒が小さ

なステージの上に立つ少女を親指で差す。

「あの子は？」

「……放つておけよ」

夏埒の視線の先を目だけを動かして一瞥し、魁は小声で吐き捨てた。

そんな魁に、夏埒は信じられないものを見るような視線を向けた。その理由は、星詠みの巫女に対する信仰心の強さだろう。

宗教として信仰される星、そして星詠みに対する人々の信仰心には開きがある。

星詠みを単なる『占い』の一言で片付けてしまう人もいれば、『予言』であるとして星詠みが全てである、といった感じで病的なほど強い信仰心を持ち星詠みに依存する人もいる。それは、祈りによつて星の光を守り、全天の枢軸を支えるとされる星詠みの巫女に対しても同じであつた。

信仰心の薄い魁には理解できないが、そういうた信仰心の多くは予言にも匹敵する星詠みの過去と巫女の功績に裏づけされているとされる。

顕著な例としては、過去に星詠みによつて大火災を小規模に抑える事が出来たり、水害や日照りをピタリと予測。また、全天の星の輝きが翳つてしまい、同時に大規模な疫病が蔓延した事が上げられる。その際には、巫女が星に祈りと舞を捧げた途端星が光を取り戻し、疫病も治まつていつたなど、星詠みを単なる占いとしてだけは扱えない面もある。

そんな事例もあつてか、巫女は人々の導き手として崇められ、星詠みと、星詠みの巫女に対する信仰心は強い。

ナヴィガトリアは、古来よりそういうた信仰心の強い者達が集まる場所もある。故に夏埒は、熱心な信者溢れる街の真ん中に星詠みの巫女を連れ出し、更に一人で放置していいのか、という事を懸念しているのだ。下手したらパニックになりかねないだろう。

しかし、それも真っ当で善良な民に限つてのこと。それぞれの事

情で星枢軸に恨み辛みをもつ奴が多いこのスラムでは関係のないことだ。それは先程の男達の様子からも分かる。

「だがなあ……」

それでも尚納得のいかなさそつな夏埒に、魁は渋々応える。

「帰りには迎えに来る」

そう言って、魁は再び酒場の戸をぐぐつた。

* * *

星を奉る聖なる地 聖都ナヴィガトリア。熱砂の砂漠の中に鎮座するこの街、ナヴィガトリアは、星詠みを司る星枢軸によつて統治されている。

街の中央に巨大なフォニカ力神殿が据えられ、そこから放射線状に黄道十一宮に合わせて十一分割されている。ちょうど真北に双児宮^{ツインズ}が、死を司るとされる人馬宮^{サジタリウス}が真南に位置付けられ、魁が住むスラム街は北東の巨蟹宮^{キャンサー}にある。

その内の一つであり、金牛宮^{タウロス}に住む情報屋 それが畢^{あめふり}である。

魁が住むスラム街のある北東の巨蟹宮より歩くこと十数分。炎天下を歩き一宮となりの金牛宮に辿り着いた魁は、その一角にある細い路地へと足を向けた。薄暗いその先に、決して広いとはいえない細い階段が見える。

魁は慣れた足取りでその階段を下りていった。地下に潜る深さに比例するように、そこに潜んでいた冷氣 いや、寒気を感じさせるような薄気味悪い空気が這い上がつてくる。その先には、真っ黒に染められた重厚な金属の扉。

看板も灯りもないそこが、店の入り口だ。

「……相変わらず陰気だな」

扉を開け、光が差し込まずに闇色で覆われた室内をぐるりと見回す。同時に、

「陰気で悪かつたね」

どこからともなく響いてきた不思議な声色と共に、部屋の中に炎が灯った。その光に照らされて店の奥に人の輪郭が浮かび上がる。最初に目に付いたのは砂漠の暑さに似合わない闇と同化した色のローブだった。それから、それと同じ色の髪。鬱蒼と伸びた前髪に覆われて目元はよく見えないが、纏う霧囲気は不気味さを欠片も感じさせない。

その艶のある黒髪に炎の光を反射させながら魁達を出迎えた情報屋・畢の口元には、言葉とは裏腹に笑みが浮かんでいた。

「いらっしゃい、魁。斎君もよく来たね」

「お久しぶりッス！」

手近にあつたソファに座つた畢の向かいに、魁と斎も腰を下ろす。「依頼通り、持ってきたぞ」

「うんうん、約束通りね。でも随分と来るのが遅かつたんじゃないかい？ その様子だと、また僕の存在は忘れてたみたいだね。……魁？」

そう畢はわざとらしいほどくつきりとした笑みを作り、魁を見据える。その視線から逃れるように、魁は酒場でと同じく明後日の方向を向いた。

魁が畢のことを忘れ、仕事をすっぽかしたのはこれが初めてではない。印象が強い割になかなか記憶に残りづらい。それが、魁が思うところのこの情報屋の特徴であった。

「忘れても仕方がないだろ。お前、影が薄いんだから」

「闇に潜んで生きる情報屋が、影が濃くてどうするんだい？」

そう言って畢が面白そうにくつくつと喉の奥で笑う。

いつも通り掴み所のない畢に頭を抱えつつ、魁は片手に持つていたものを無造作にテーブルの上に置いた。

「とりあえず、例のやつだ」

テーブルの上に置かれたもの　　それは一冊の古い本だった。表紙がめくれて砂が付き、紙も十分に黄ばんでいて見た目にもかなりの年代物と分かる。昨夜神殿から複数盗んできたものの本の一つだ

つた。

「……これだけ？」

「これだけ、だ。他にもいくつかあつたが、唯一読めそうなのがこれだけだった」

今回この情報屋に頼まれたことは、魁が神殿に忍び込んだ際に何か情報を手に入れてくること。畢も魁と同じくしてあの隠された宝物庫にあつた様々な書物　そこに記された日の下にはない情報を欲していたのだ。

畢は本をその手に取り、まずは外側から、と様々な角度から本の状態を観察する。

「ナヴィガトリアの歴史書、みたいだな」

「……魁は中身見たの？」

その問いに、魁は静かに首を横に振る。

「いや、流し読みした程度だ。古くてあちこち破れている上に、旧語で書かれててそう簡単に読めそうにないからな」

旧語というのは、今は使われていない旧世界語　地域語のことだった。昔は世界中それぞれの地域によって異なる言語が使われていたのだが、数百年前に今の現代語への前面向的な統合が行われた。ある言語を基軸にし、多言語を吸収して作られたのが現代語である。この地域で使われていた言語は今の言葉に全く要素が受け継がれていないわけではないので魁も一応は読めるのだが、解読にはそれなりの労力と時間を要する。

ぱらぱらと畢が魁の言葉を確かめるようにページをめくる。

言葉に反さず、中身もところどころ破れ、めくられる度に宙に埃が舞う。とても読める状態とはいえないなかつた。

一度中身にざつと目を通した畢が、再び最初のページから目を通していく。

長引きやうなその様子に、魁は読み終わるのを待つことなく話を進めた。

「で、そつひで何か情報は？」

その言葉に、畢は本から目を放さずに答える。

「特に何も進展なし、だよ。相変わらず、あの遺跡は星枢軸の守りが堅すぎる」

いつもどおりの言葉。故に半ば予想は付いていたのだが、それでも残念な言葉に魁は落胆の色を隠せなかつた。小さく「そつか」とだけ呟く。

「……遺跡つて『星の旧跡』のこととスカ?」

と、それまで何も発していなかつた斎が首を傾げて魁を見た。斎はまだ幼いために仕事を学ぶために魁についてくることは多いが、仕事の話には基本一切口を挟んでこない。そんな斎がこの場で自ら発言することは珍しかつた。

「ん、ああ……蜃氣樓の遺跡 星の旧跡の事だが……」

蜃氣樓の遺跡 別名『星の旧跡』。聖都ナヴィガトリアより東の砂漠に位置する、枯れたオアシスの畔に建つ千年以上前に滅びたとされる都の遺跡だ。周囲の蜃氣樓地帯と呼ばれる砂漠の中、それらに護られるよつとして聳え立つてゐることからその名で呼ばれてゐる。

過去に星に関する重要なことがあつたとかなんとかで星の旧跡とも呼ばれ、それ故に神殿が直轄管理している場所だ。しかし、いくらくらい重要な場所といえどその厳重さは度を逸していた。

なにしろ、ここにいる畢ですら情報を断片的にしか掴むことができないので。魁から見ても、畢は稀にない情報網の持ち主だ。その彼が現在掴めている情報は警備兵たちの交代時間や外側から見た遺跡のおおよその造りのみ。

その中がどのようになつてゐるのか、その場所で何があつたのか。欲しい情報は、神殿に隠されていたあの宝物庫の物のようになつた。だから。

神殿側にはそうしてでも護りたい何がある。そのために、魁は畢に情報収集を依頼していた。

「それがどうした」

「い、いや、別に……ただ、魁兄ずっとその遺跡について調べてるみたいッスから……」

どこか突き放すような魁の言葉に、斎が戸惑いを隠すようにハハと笑う。しかし、それは魁の鋭い呼び声によつて直ぐに途絶えた。「斎、余計な詮索をするな。これはお前が首を突っ込んでいい話じゃない」

「ご、ごめんなさいッス……」

「魁も厳しいねえ」

頃垂れる斎を見て、畢が苦笑混じりに呆れる。

「……当たり前だ」

そう視線を厳しくした魁に、畢はふーん、と取り分け興味もなさそうに相槌を打ち、音を立てて本を閉じた。

「読めそうか？」

「……情報としては役に立たなさそんなんだけどね……魁。これ貰つていいかい？」

畢の意外な申し出に、魁は少しだけ目を丸くする。

「別に構わないが、どうかしたのか？」

「……個人的にちょお一つと調べたいことあるんだよね」

見えない双眸が底光りする。畢がそう言った瞬間、魁は僅かだがそんな錯覚すらも覚えた。

「さて、それじゃ俺たちはお暇させていただ……」

「ちょっと待ちなよ」

どこか慌しく立ち上がった魁の服の裾を、身を乗り出してきた畢ががしつと掴んだ。

「代金、お忘れじやないかな？」

「その本でいいだろ？？」

「僕は言つたよね……？『情報としては役に立たなさそ』って

そう、わざとらしいほどくつきりとした笑みを口元に刻んで。置かれた机に半分身を乗せるよつにして、詰め寄ってきた畢に対し、魁は無意識の内に半歩体を引いて睨み返す。

だが、酒場の男達を黙らせたその凍てついた瞳にも畢が怯むことはなかつた。

星の旧跡に関する情報を常に収集してもらひ。代わりに、畢の依頼を常に無償で引き受ける。それが互いの仕事の代金であり契約だつた。

畢の仕事は『結果に関わらず情報を収集すること』であり、魁の仕事は『畢の依頼を達成すること』である。

だが、持ってきたものが情報にならないといふことは、今回の依頼に反する。ならばこちらが依頼したことに対しても相応の代金を払うのが常道というものだ。

だから、魁は畢に何か追及される前に、とつと退散したかつたのだ。

「盜賊団 影の星 首領 今まで全くと言つていいほど女性に興味を示さなかつたあの魁が女を手元に置いている。しかもそれが星詠みの巫女。今スラムの連中がこれ以上欲しがつては情報はないんだよ。話してもらおうかなあ、何があつたのか魁がどうしちやつたのか」

目を見ることはできないが、見ることができるとしたら畢の目はさぞ爛々と輝いていることだろう。噂話好きも、情報屋としての性分か。

「さあ、吐いてくれるよね？」

その追及の魔の手から逃れる術は、今の魁には備わつていなかつた。

* * *

「あの、馬鹿……」

酒場を出るなり、開口一番魁は呆れ顔で呟いた。

畢の所を出た魁は先に斎を盜賊団のアジトに戻らせ、真っ直ぐに夏埒の酒場へと向かつた。あの、神殿の奥で護られてきた星詠みの

巫女を迎えるために。

だがいざ酒場に着いてみれば当の本人の姿はなく、訊ねた夏埒から返ってきた言葉は「先に帰った」の一言。

下手に外を歩かせるのも危険だと思い、それならばまだ夏埒のいる酒場のほうが安全だと判断して置いて来たというのに。

面倒なことになった、と魁は今日何度目になるかも分からぬ小さな溜息を吐き出した。

予想していなかつたわけではない。むしろ彼女の性格からしてこうなる確率は高いと踏んでいたし、この事態になることを望んでいたのも事実だ。しかし、心のどこかで予想を裏切られることを願っていたのも事実だ。

沈んで行きそうになる思考を中断させて、魁は強く地を蹴った。たつた一蹴り。しかし、それだけで魁の体は軽々と宙に舞い上がり、そのまま慣れた動作で酒場の一階の屋根に上がり、続けて二階の屋根 建物の屋上へと登る。

一階建ての酒場の上からは全てを見られるわけではないが、それでも粗野な光に照らされた夜の町が一望できる。

ナヴィガトリアの中でも、スラム街は無駄に入り組んだ構造をしている。人探しであれば地上を歩き回るよりも、高い場所から探したほうが断然早い。

魁は不明瞭な足元に臆することなく、並ぶ石造りの町並みの上を渡つていった。

ダンシ、と鈍い衝撃が星華の頬を打つた。冷たく硬質な感触。その感覚を感じ、星華は自分が壁に叩きつけられたのだと理解した。

「くあ……」

無骨な手で壁に押さえつけられている頭を動かして、背後には三人の男達を睨みつける。だがその反抗的な瞳も、今は奴らを興奮させる材料としかならなかつた。

あまりにも遅い魁を待ちくたびれて酒場を出た星華を待ち受けて

いたのは、昼よりも治安の悪くなつたスラム街だつた。

星華とて巫女として自身を守るための護身術は習得している。神殿に呼ばれた各地で名を馳せる様々な武術の達人を師とし体得した力は、粗野な喧嘩をする「じろつきの一人や三人程度なら勝てるほどだ。

だが、その認識が心の隙を招いたのか、いつの間にか忍び寄つてきた三人の悪党どもにあっさりと捕まり、今こうして路地の最奥で人生最大ともいえるピンチを迎えていた。

（力、が……）

強い酒ではないが、先ほど酒場で普段は飲まない酒を飲んだせいだろう。どこか頭がぼうっとし、四肢に力を込めようとしても思い通りにならない状態だつた。

いつもであればこんなことにならないのに。内心そう毒づく星華は、今はそこらへんにいる小娘となんら変わらなかつた。

急速に冷えていく空気が、大きく晒した星華の肌を刺す。日はとうの小一時間も前に沈んでいた。

「巫女様よお、あんまり暴れないで下さこよ。いつちだつてお痛しだくないんですから」

男が下卑た笑みを浮かべる。

その男の緊張が緩んだ一瞬の隙を狙い、星華はまだ自由を奪われていらない左足を振り上げた。がつ、と鈍い音を立てて、星華の蹴りが男の脇腹に鮮やかに決まる。だが、

「きやあっ！」

ポニー・テールを強引に引っ張られ、星華の口から甲高い悲鳴が迸つた。

「……調子にのってんじゃねえぞ」

生暖かい息がかかる距離から発せられた男の声に、背筋が粟立つた。逃げろ逃げろ、と頭の奥で本能が警鐘を鳴らしている。なのに、体が動かない。

対抗できない悔しさに、星華が歯軋りしたそのとき、

「そいつを放せ」

突如として髪を引っ張る力が緩んだ。

「退け。出来るのであれば事を穩便に済ませたい」

状況を把握するよりも早く聞こえた低い声。見上げれば、既に見

慣れた月色の髪が夜風に揺れている。

隣接する建物の屋上。そこに、月明かりを背負つた魁が佇んでいた。

「か、い……」

「はつ。こんな上玉を田の前にして誰が退くつていうんだよ！」

「首領様自らお出ましつてわけか。そんなに大事なら取り返してみろつての！」

星華を掴む男が懐からサバイバルナイフを取り出し、彼女の首筋にあてがう。その冷たい刃触りに、星華は息を呑んだ。

満月の逆光のせいで、魁の姿がはっきりしない。それでも不思議と彼が眉根一つ動かしていないことは見て取れた。

「……先に手を出したのはお前達だ。よく覚えておけ」

射すような言葉を一つその場に残し、魁は屋根より飛び降りた。

勝負は、一瞬だった。いや、あまりにも呆気なさ過ぎて勝負とも呼べない。勝敗は魁が最初の一歩踏み出した時点で既に決まつてしまつたのだから。

去つていく野郎共の背に荒んだ一瞥を投げ掛け、魁は足元に座り込む星華を見下ろす。

顔は見えない。俯いた影と夜の闇に隠れている。ただ彼女の体が震えているのは夜の寒さのせいではないだろう。

(所詮、こんなもんか)

「何のために、酒場にお前を残したと思つてるんだ」

問いただすような魁の聲音に、星華の肩が跳ね上がる。

「仕事にお前を連れて行くわけにはいかない。おっちゃんの所にいれば俺がいなくとも安全だと、少なくともそう判断したからだ」

星華は応えない。

「分かつたか？」こじは、お前みたいな温室育ちの奴がうろついていいような場所じゃないんだ。痛い目みたくないなら」

冷たい光を宿した目。それは、酒場で星華の背に向けて一人呴いたときの瞳とよく似ていた。

「とつとと自分のいるべき場所へ帰れ」

今度こそ、星華は身じろぎ一つもしなかった。

「……嫌だ」

震えた、しかし毅然として呴かれたその一言に、更に言葉を畳み掛けようとしていた魁は口を噤んだ。

星華が真っ直ぐに魁を見上げてくる。体は小刻みに震え、今でも立つことすらままならない。けれど、それでもその瞳の光が翳る事はなかった。

「嫌よ、絶対に。絶対に神殿には戻らない。あんな、あんなとこ」

「

その視線に射抜かれ、魁は言つべき筈の言葉を失つてしまつた。一つの視線が、真っ向からぶつかる。似た色の、けれど違う光を宿した互いの瞳。まるで奥で炎が燃えているような星華の瞳と、どこまでも冷ややかな氷のような魁の瞳。

どれぐらいそうしていただろうか。時間にして、おそらく十秒にも満たない沈黙の後、魁は無言のまま右手を差し出した。

出てくる言葉は何もない。右手が、魁にとつて言葉の代わりだった。

唐突なその魁の行動に、星華がきょとんとして魁を見返す。あまりにも突然すぎて、魁の行動が理解できていなかった。

「もう遅い。とつとと帰るぞ」

瞬間、星華の顔が華やいだ。その笑顔の前ではどんな花も星も魅力を失つてしまつ、それはまるで全天一の輝きを持つ天狼星のようだつた。

繫がつた華奢な手を引いて、魁は歩き出した。

第一章 影の星

時刻は深夜、既に日付が変わってから大分経っている。田蟹宮のほうでは毎度のごとくまだまだどんぢゃん騒ぎが続けられているだろうが、この宮は違った。

聖都ナヴィガトリア第一富白羊宮^{アリエス}。おひつじ座の星を宿星に持ち、神殿の下でこの街の外務を担う一族が統括する区は、その大半が商店で占められている。

ナヴィガトリアを十二分割する宮はその区を統括すると同時に、星枢軸に仕え、街の統治の補助を行う。白羊宮はその内、外務全般を担う。この町並みは、主に西にある王都レクスフォールからの外部者を招き入れる検問所としての役割ゆえだ。

その店も、今はどこも漏れるような灯り一つ付いていない。

そんな中に、ポツリと一つの柔らかい光が浮かび上がった。最初は小さく、それから徐々に大きくなってくる。

「炯、燐。問題はないか」

屋根の上にひつそりと身を隠して、魁は自身の後ろで待機している一人に尋ねる。

「全くもってない」

「いつでも行けるわよ」

黒髪瘦躯の青年と彼の姉である黒曜石の瞳をした女性から返ってくる、頼もしい言葉。それなりに頷き返し、魁は白羊宮のメインストリートに再び目を下ろす。

徐々に近づいてくるワントンの灯り。それを吊るした荷馬車。

「行くぞ」

魁の呴きを合図に、三人は飛び出した。

(やだなあ……)

前を歩く一頭の馬の手綱を握りながら、御者は内心独りごちた。

不気味なほど静まり返った街に、馬の蹄の音と馬車の車輪が回る音だけが木靈する。行く先は完全な闇に覆われていて見えない。こうして見ると、まるで地獄に続く道のようだ。

何故自分がこんな仕事をしなくてはならないのだろう。王都に近い平穏な町でしがない御者として妻と一人娘のためにと毎日働いてきたのに、どうしてこんな表に出せないような仕事を。

いや、これもきっと普段の仕事振りが評価されてのことなのだろう。けれど、今更になつて罪悪感が押し寄せてくる。

しかも雇い主は荷馬車の奥でぐっすりと就寝中。フォニカ神殿に仕えている貴族というのはどうにものんきなものだ。

でも、そんな仕事ももう直ぐ終わる。この馬車の中にいる人と積荷をフォニカ神殿に届ければ、大金とともに胸を張つて家族の下に帰れる。

そう手綱を握り直したその時。

ドンッと、腹に響くような衝撃が荷馬車を襲つた。突然のその衝撃に、馬達が嘶きを上げて足を止める。

間髪おかず、もう一度同じ衝撃が荷馬車を襲つ。荷馬車の上に何かが乗つたのだと、そう理解する前に御者は馬車から引き摺り下ろされていた。そのまま、誰かに地面上に叩きつけられる。

「ななな、な、何事だ！」

衝撃に目を覚ましたらしい雇い主 ナヴィガトリアでも有数の権力をを持つ貴族が上擦つた声を上げて、馬車の中から飛び出していく。そう思った次の瞬間には、彼の体は地に伏せられていた。

黒髪の青年が良く肥えた貴族を地面に押さえつけている。後ろに回らないのではないかと思つよつ短い腕を背で掴まれ、その上から体重を掛けられている。

同様にして、自分の上にはウェーブのかかった黒髪の女性。一瞬その妖艶な姿に状況を忘れてしまいそうになるが、じやりと砂を踏む音にハツと顔を上げる。

下弦の三日月の夜空には数多の星の光。その光を遮る人影の蒼い

瞳が、御者を見下ろす。

「影の星 の名を持つて、この富、民に返してもう」
鮮やかな金髪を夜風に靡かせ、ただ一言、そう告げた。

「首尾はどうだ。彩、斎」

ナヴィガトリアの治安を守る人馬富の人間の姿が見えないことを確認し、魁は馬車の積荷を確認しているはずの一人に声を掛けた。
貴族と御者は、炯と燐がしっかりと縄で拘束し、少し離れた所に放置してある。

魁の呼びかけに、すぐさま無邪気な表情をした斎が馬車の窓からひょこりと顔を覗かせる。

「すごい量ツスよ。それも高そうな金ぴかのやつばっかりツス。よくこんなに溜め込んだツスねー」

「……彩は？」

「魁さん、こっちです」

その声に応えて、姿の見えないもう一人 彩が馬車の後ろから現れる。濃い亜麻色の、髪と瞳が印象的な少女の手には少し黄ばんだ紙と安物のペンが握られている、

「どちら辺からのものだ？」

「物品の刻印からして、王都近くのだと思いますけど……知らない刻印の物もあるので、もしかしたらもつと遠くのものなのかも……」

「……星枢軸の手が意外と伸びてるな」

渡された紙に記された、おそらくは馬車の積荷の出所と思われる地名の数々を見て、魁は眉を顰めた。王都レクスフォールは勿論、その周辺の町や村、名前しか知らない遠い場所も列挙されている。
ナヴィガトリアは星枢軸によつて統治されている街。しかし、その統治は決して立派とはいえない。

聖都ナヴィガトリアは星奉りの中心地として、世界各地から熱心な星詠みの信者が集まつてくる。ナヴィガトリアに在住しているものの大半がそいつた人間だ。

彼らのその信仰心に付け込み、寄付金や何だといって無為に税金を高くしたりと圧政を繰り広げている。おかげで、ナヴィガトリアの人々の生活は困窮する一方だった。

影の星 はそうして星枢軸 主にフォニカ力神殿の元に集まつた金品を奪い、その内自分達に必要な分だけを頂き、余ったのを街の民間組織を通して人々に返している。

必要以上は要らない。それが魁の信条だ。多過ぎる金はトラブルの元になるし、なにより元は罪のない人々の物を奪い手に入れるだけであれば、星枢軸の奴らと何も変わらない。

その仕事も最近面変わりし始めた。こうすることをやり始めた頃はナヴィガトリア内で集められたものを盗み、それを再び街の者の元へ返していたのだが、近頃は違う。今夜のようにナヴィガトリアの外で集められたものが、神殿貴族の本拠地であるここへ集まつてくる。それは、星枢軸の要らぬ権力が拡大している証拠であった。

「にしても魁兄も星枢軸嫌いッスよねー」

報告を済ませ作業に戻る彩と入れ替わりに、斎が再び馬車から顔と覗かせる。その手にはゼロがいくつ付くか分からないようなほど高価だと思われる、色とりどりの宝石類。

「今月に入つてからまだ半月も経つてないのに、もう片手の数は神殿に喧嘩売つてるッスよ」

「あんだけあくどい事しといて、嫌いにならないほうがおかしいだろーが」

「ま、僕も嫌いッスけどね。……星枢軸なんか」

スマムに生きるものは大抵が人に話せないような過去を持つ。ナヴィガトリアでは多くが財を失つた者だ。その原因は神殿の圧政。まだ幼いが、斎も例外ではない。

しかし、斎はそう言つた後に、「でも星華さんは好きッスよ!」などと満面の笑顔で調子のいいことを言つてみせる。出てきたその名に思わず頭痛を覚えそうになつた、魁のことなど露知らず。

「無駄口叩いてないで、とつとと仕事しろ」

「無駄口じゃないツス！ こみにゅけーしょんツス！」

「……それを言つならコミュニケーション」

反論する斎の少し間違つた言葉を正して、魁は渋々仕事に戻る小さな背に苦笑する。

その背後を、暗い影が横切つた。

「どうかしたツスか？」

田を細め剣呑な顔をする魁に、斎がきょとんと田を丸くする。どうやら、斎は何も気付いていないようだが、おそらく見間違えではない。影の星以外の何物かが、夜の闇に潜んでいる。

感覚を研ぎ澄ます。

直後、斎を大きな影が覆つた。否、影ではない。夜の微かな光に浮かび上るのは屈強な体つきをした大柄な男だった。その手には、大振りの剣。

(この男つ、雇われの護衛か……！)

神殿内でも有数の実力を持つ貴族だから、護衛の一人や二人いるのは当たり前のはずだ。襲撃の時点で何の反応もなかつたからか、そのことが綺麗に頭から抜け落ちていた。

「斎、伏せろ！」

そう叫ぶと同時に、ナイフを抜いて一步踏み出す。反射的に斎が体を屈めその場から飛びのこうとするが、遅い。斎は盗賊団の中でも一、二を争う俊足の持ち主だが、相手との距離が近すぎる。

間に合うかそんな言葉が脳裏をよぎる。だが、

「はあつ！」

魁のナイフが男に届くよりも早く、裂帛の気合と共に小柄な人影が飛び込んできた。

舞のように、滑らかで軽やかな動き。背後からの攻撃は予想外だったのか、見事な回し蹴りが男の頭に直撃する。

大男が慌てて反撃しようと試みる。だが、自分を蹴ったその人物を見て、大男は一瞬だけ動きを止めた。

その一瞬の隙を、魁は見逃さない。相手の懐に入り込むと、筋肉質な腕を掴み男の足を一蹴。巨躯がバランスを崩した反動を利用して、勢いよく地に叩きつけた。

その隣で、長い星屑の髪を夜風に靡かせて、星華が華麗な着地を決める。

「油断大敵つてやつ……あだつ！」

すぐさま駆けつけた炯に傭兵の処理を任せ、魁は誇らしげにブイサインを向けてきた星華の額に、でこピンを一つ喰らわせた。

魁は軽くやつたつもりだったのだが結構な痛みなのか、星華が両手で額を押さえる。

「な、何するのよ！」

「俺は、出でくるなと言つた筈だが」

「べ、別にいいじゃない。そのおかげで無事に済んだんだから。ね？」

「そそそ、そうツスよ！ 星華さんは命の恩人ツス！」

「斎」

笑顔で同意を求められ、慌てたように何度も頷く斎を魁は鋭い一言で制した。その鋭い瞳に斎が小さな呻き声を上げてうろたえるが、彼は直ぐに星華に向き直り、機敏な動作で頭を下げた。折った腰の角度は、およそ直角。

「ありがとうございましたツス。それと、すみませんツス……」

「いえいえ。斎君が無事でなによ……」

「いえいえ、じゃない」

得意げに微笑んで見せた星華を、魁の視線が射抜く。

「星詠みの巫女様に何かあつてもらつたら困るつて言つているんだ。あの傭兵がお前の顔を知つていたから手を出さなかつたが、もしそうじやなかつたらタダじや済まない」

「じゃあ、隠れててそこでまたわづるーい男達に連れて行かれそうになつてもいいんだー」

頭痛に頭を押さえる魁を見て、面白そうに星華がクスクスと笑う。

無人のアジトに彼女を置いておくのも危険だと思い連れて来ているが、仕事に関わらせるわけにもいかない。相手は何よりも巫女様だし、事によつては今日のよつと乱闘沙汰になることも少なくない。

（今のお前だつたら、野郎共の方が尻尾を巻いて逃げてくれての）思わずそんな台詞^{ハコヅキ}が口を付いて出そうになるが、魁はその台詞を中心だけに留めて置いた。

我僕を言い出した星華に何を言つても無駄だという事は、ここ数日間で既に学んでいる。

もつとも、星華自身も身の危険といつもの自覚しているらしく、以前無頼漢^{ムロツヤク}どもに襲われかけたときのように独りで出歩くといったことはなくなつた。

「とにかく、人馬宮の奴らが出てくる前にとつとと引き上げるぞ」「了解」

と、

「ふ、ふふふ……」

口々にする仲間達の返事に混じつて、突然聞こえた不気味な忍び笑い。

何事かと聞こえてきた方に目を向けると、その視線を待つていたかのように貴族が口を開く。

「巫女を手中に收め、勝つたつもりか？」

「……何？」

唐突な貴族の嘲笑に、眉根を寄せて魁が不快感を表す。

「師弟とは似るものだな。師匠のみならず、弟子までも神殿に無駄な刃を向けるとは。一度と日の目を拝めなくなるのも時間の問題よの」

そう言い終わるとほぼ同時、貴族の頬を何かが掠めていった。直後そこから流れ落ちる一筋の赤い液体と、その背後の地面には、突き刺さる細い一本のナイフ。

目にも見えない、一瞬の投擲。ナイフは魁の手から放たれた物だ

つた。

「……それ以上言つてみる。一度と田の田が挾めなくなるのはどうちだか分からせてやる」

「魁！」

「お前、止めるー。」

普段とは違う、魁の不穏な気配を察知した燐と炯が、彼と貴族双方を止めようと動く。だが、遅かった。

貴族の口元が、これ以上ないという位に裂けたような笑みを作れる。

「揃いも揃つて馬鹿なことよー。在りもしない星など、見つけられるはずもな……」

ない、とその言葉が貴族の口から最後まで発せられることはなかつた。

「ゴツと、骨に何かが当たる嫌な音が聞こえる。」

魁がその貴族の横つ面を蹴り飛ばしたのだと、周りが理解する頃には、貴族の丸々とした体が既に数メートルも飛んでいた。

「つ魁！？」

星華と盜賊団の仲間が上擦つた声を上げる。

しかし、魁は彼女達の呼び声に反応することなく貴族に歩み寄つていいく。まるで声が聞こえていない。

咄嗟に星華が駆け寄つて彼の腕を掴み、止めようとする。

「か、魁！ 止めなつて」

「放せ」

凍ついた声。そう評するのが正しい声に、星華が肩を震わせた。殺氣溢れんばかりの殺気が抑えられずにその声を通して撒き散らされている。

けれど、腕を掴んでくる華奢な手は力を緩めなかつた。

「ちょっと魁！ 何もそんなことしなくてもいいじゃない！」

「つ！ 触るなー！」

明確な拒絶の一言。それと同時に、星華の手が力の限り振り払わ

れた。

反動で星華が数歩後退る。

つい数秒前までは貴族に向いていたはずの怒りの矛先が、今は何故だか星華に向いていた。

「か、い……？」

「そんなこと、だと？」

事態が呑み込めずには揺れる瞳で、見上げてくる星華に魁は冷たい一瞥を投げ掛ける。

「お前にとつてはそんなことだろうな。だが、ここつは言つてはならない」とを言つた

「魁が……神殿を嫌つてるのは分かる、けど、何もそんなこと……その人は何も手を出してない。計画通り馬車を襲えたんだから……それで十分じゃないの」

たゞたゞしくも言葉を紡ぐ星華に、魁は「ハツ」と呼氣だけの嘲笑をする。

「お前に何が分かる。星詠みの巫女様だもんな。詠人なら誰もが憧れる地位だ。日の下を歩いてきたお前に、何が分かるつていうんだ」「侮蔑とも取れる言い様に、星華が目を見開く。彼女の口から出てくる言葉は何もない。

「何も、知らないくせに」

「魁、止める！」

鋭い炯の一言とともに、魁の左腕がぐいっと強引に引かれた。強制的に星華と向かうことを止めさせられる。

「……止めな。これ以上余計な罪状を突き付けられたら、それこそ目的どころじやない」

違つたか、と念を押された燐の正論に、魁は押し黙る。それに、と燐は続けた。

「星華は無関係だ。そう判断したのはあんたじゃないのか？」

その言葉にハツとなり、魁は星華を見た。

星華は無言のまま、俯いている。細い双肩が小刻みに震えている

のは、気のせいなんかではない。

「せい、か……？」

名を呼んだ声は、何故だか少しだけ震えていた。ややあつて、星華がよつやく唇を動かす。出てきた声は、魁とは比べ物にならないくらいに大きく揺れていた。

「……あたしは、魁が何で神殿を嫌っているのかは、知らない。でも星極軸の奴らを嫌つてるっていうその気持ちは、少なくとも分かつてると思つてた。あたしは……」

そこで一度、星華の言葉が途切れた。その場にいる誰一人として何も言わず、ただ星華の言葉の続きを待つている。

「なりたくて星詠みの巫女なんかになつたわけじゃない」

空気が凍りついたかのように、場が静まり返つた。

「普通に育つて、普通に生きて……なのに突然巫女なんかに選ばれて。そりや、踊るのは好きだよ。けど、自由に踊れるわけでもなければ、神殿の外にもめつたに出してもられない」

星華が、ギュッと拳を握り締める。強い力にもともと白い彼女の手が、より一層白さを増した。

「うらやましいよ、自由を謳歌できる、あんた達が」

その言葉を発した星華の声は、まるで泣いているかのように震えていた。

「だから、この盗賊団においてもられるつて知つたとき……それが一時的なものでも、あたしは嬉しかった」

それを最後に、星華の口からは何も発せられなかつた。燐が、優しく星華の両肩に手を添える。

周囲を、沈黙が包み込んだ。誰も、何も言わなかつた。否、言えない。星華にも魁にも掛ける言葉が見つからないのだ。砂漠の乾いた風が吹き抜けていく音だけが聞こえる。

優に十数秒は経つた後、これ以上の沈黙に耐えられなくなり、魁はようやく口を開いた。

「燐、皆を連れて先に帰れ」

唐突に命令を下した魁に、燐が一瞬だけ怪訝そうな顔をするが、その命令に何が含まれているのか直ぐに悟つたのだろう。真っ直ぐに魁を見て、小さく頷く。

「魁兄……何かあつたんスか？」

「少し……野暮用」

魁から何か感じ取つたのか不安げに見上げてくる斎に、いつも通りの声色を作つて応える。いや、多分いつもより幾分か沈んで聞こえたかもしれない。

「炯」

いつもは自分の後ろを追つて歩く少年を炯に預ける。炯も、姉である燐と同じく一度だけ小さく頷いた。切れ長の瞳孔を宿した炯の双眸は、いつだって力強さを感じさせる。

「分かつてゐる。無茶すんなよ」

その言葉を背中で受け止め、魁は一人夜の街へと姿を消した。

* * *

「……馬鹿野郎」

貴族の馬車を襲つた通りから一つ違つた通りで、魁は自嘲気味な笑みを浮かべた。

半ば倒れこむように、近くにある店の壁に体を預ける。同時に軽く、頭をぶつける。走つた鈍い痛みは気にもならなかつた。ただ、壁の冷たさだけを感じた。石の壁の冷たさが頭を冷やしていくようだつた。

しつかりしろ、自分は誰だ？

自身への問いかけに対する答えは、考えるまでもなく出てきた。

仲間の命を預かる盗賊団 影の星 の首領。そして、碌牙・ミルザムの弟子だ。

そのことを改めて噛み締め、魁は深い溜息を吐き出した。それは最近良く零していた、星華に呆れてのものとは全く異なつていた。

(何も分かつてないのは、俺だよ)

簡単に気付けるはずの神殿貴族の挑発にあつさりと乗つて手を出し、拳句自分を止めようとしてくれた星華にハツ当たり 最低なことこの上ない。

あのまま炯と燐が止めてくれなかつたら、貴族の事も星華の事も大変なことになつていただろう。

星詠みの巫女誘拐に留まらず、貴族の命でも奪つよつなことがあつたら、それこそ神殿は黙つていらないだろ。星極軸はなんとしてもこの首を取らうと刺客を差し向けてくるだろ。

星極軸の狙いは、そこだ。自分達の手は一切汚さずに、俺を捕まえること。

今、星華を攫つておいて目立つた手を何も打つてはいけないが、燐の言つたとおりこれ以上重罪を犯せば魁を葬るのに十分な動機が成立する。

そして、星華。

何も知らない。その一言じや済まされないことを、魁は星華に言つた。星華がどんな思いで星詠みの巫女になり、どんな思いで神殿を抜け出してきたか魁は知らず、勝手な推測だけで怒りを叩きつけた。

星華だつて 影の星 のメンバーのように暖かい太陽の下を歩いてばかりいたわけじゃなかつた。むしろ、暗い夜道を歩いていたのかもしれない。

彼女の不運な境遇に同情しているわけではない。

(俺と同じ、か……)

だからこそ、退きたくなくなつた。

口元から笑みが消え失せる。

「出て来い」

その言葉を発すると同時に、街のどんぐりの物陰からわらわらと人間が姿を現してくる。その数は、ざつと見ても十は超えてい。彼らはやがて、ぐるりと魁を取り囲んだ。

魁は動かない。逃げても意味がなければ、逃げる理由もない。

射すような魁の視線に臆すことなく、一人の男が前に歩み出る。腰に提げられているのは、柄に獅子の装飾のあしらわれた剣。暗がりに映つたその姿を見て、魁は知らず笑みを浮かべていた。

嘲笑という名の、笑みを。

「まさか、獅子宮の首星様直々のお出ましとは、ね。星枢軸も大分切迫してると見えるな、レオ」

魁の嘲笑に対し、レオと呼ばれた男はにこりと微笑んで見せた。あからさまな、余裕の笑み。いけ好かない笑みだ。

「我らが星詠みの巫女様の一大事。巫女を守る我々が動かなくてどうしましょう」

フォニカ女神殿の正規兵を務め、主に星詠みの巫女を危険から守る役を授かつた者達　それが第五宮獅子宮の人間だ。

十一宮の家柄の者はそれぞれの星座の星を宿星に持ち、その内星座の首星を宿星に持つた者が宮の人間を取り纏める長となることが決められている。

そして長はその宮の役割を継ぐ者として、宮の名を名乗ることが許されていた。

今魁の目の前に佇んでいるのは、獅子宮を継ぐ者・レオ。

「先程の一件、見させていただきました」

「ふん、今までこそそこそと付け回していただろうが」

丁寧だがどことなく嫌味さを漂わせた口調に、魁が鼻を鳴らす。だが、レオは蚊ほどの反応も見せなかつた。星枢軸の威光を守るために、獅子の風格にそぐわない事にも平気で手を染めるか。

「見たところ、巫女様には随分と手をやいている様子。今巫女様を返せば今回の件は放免にすると、長老会も言つています」

長老会　それが星枢軸の実権を握る者たちの集まりだ。実力を持つた偉い詠人だとかいうが、真偽のほどは怪しい。事実そうなのだとしても、分かつてていることは一つ。腐敗した権力の海におぼれる老いぼれ達でしかないという事だ。

「貴方も自分の命は惜しいはず。素直に応じて下さい」

完璧なる、だが陳腐な脅し文句に魁は呆れて思わず溜息をつきやうになる。

夜空を見上げて、深呼吸一つ。

「断る」

夜の冷氣を切り裂いて響いた返答に、レオが不可解だといつよつに眉をしかめた。

星達から目を放さず、レオの理由を問うような視線に魁は続けた。「あんなクソ爺共の言葉なんて、今更信用できるわけがない。それに」

唐突に、魁が言葉半ばに口を開いた。

砂漠の夜空には塊となつて漂う雲はいくつも浮いているが、それでも星は良く見えてくる。ほんやりと輝く星の多い今日の空の中に

は獅子座の姿もある。

残念なことに、澄み渡つているはずの空でも一獅子の輝きは霞んでいる《・・・・・・》ようだが。

視線をレオに戻す。その表情は不敵な笑みと、そう例えるのが最も適切だろう。

「あいつを手放す気が、なくなつたんだな」

ざわり、と獅子宮の奴らがざわめき立つ。その反応が、どこか楽しさを感じられた。

多分、數十分前までの魁だつたらこの取引に応じていただろう。長老会の言葉が信用できなくとも、厄介者の星華を追い払える。それだけでも十分な意味を成していたのだ。

もともと魁は星華の気の済むまで街を堪能させ、街に飽きたか治安の悪さに弱音を上げたところで神殿の奴らに引き渡せればよかつた。盗賊団につまでも置いておくつもりはなかった。守られてきた巫女に盗賊など、務まるわけがない。

そう、置いておくつもりなどなかつた。だが、気が変わつた。

「俺と同じあいつの夢を、絶つわけにはいかないんでな」

同じ神殿に道を絶たれた者として、今の魁に星華を放つておくといふ選択肢は存在しなかった。

慎重に獅子宮の兵が魁との距離を縮める。

フツ、とレオがそれまで浮かべていた上流の笑みを崩す。代わりに浮かび上がってきたのは、スラムにうひつゝ奴らとそつ変わらない歪んだ笑みだった。

「ならば力ずくで連れて帰るだけだ！」

距離を詰めながら、レオが腰の上質な剣を抜き放つ。レオに続いて、獅子宮の神殿兵がそれぞれ剣や槍などの武器を手に一斉に魁に接近する。

相手の隙は十分。重い武器を扱う相手より、軽器を手にした自分のほうが早い。問題があるとしたら数の多さだけだ。

（上等だ……！）

大振りのナイフと投擲用のそれを両手に構え、魁は笑みを浮かべた。

「魁兄!? どうしたんスかその怪我!」

巨蟹宮の一角にかまえた 影の星 のアジトに戻つてくるなり、素つ頓狂な声を上げた斎が真っ先に魁を出迎えた。斎が驚くのも無理はない。今の魁の姿は、剥き出しにされていた肌にいくつもの切り傷がつき、頬からも血が滲み出ている。更にジャケットはあちこちに切り裂かれて破け、おそらくは返り血だろうがどす黒く染まっている。

「……なんでもない。ちょっと恨み買ってた奴に出くわしただけだ」深く追求されるのを避けようと、それだけ言つて魁は浴室に引き上げようとする。だが、

「馬鹿野郎」

その頭を、斎の声を聞いて奥から出てきた炯が思いつきり叩いた。静かな声に似合わず、それが怪我人に対する仕打ちかと思つくらいに、それは思いつきり。

ギロリと、背の高い炯を睨みつけていると、

「彩、救急箱取つてきな！」

「は、はいっ！」

燐の鋭い一喝に、後ろの方でおろおろしていた彩が慌てて奥の部屋に消えていく。その様子を田で追っていると、このアジトの中のものでも上質なソファに座つて両膝を抱えている星華が瞳に映った。思わず、動きが止まる。数刻前の自分の行動が、脳裏に次々と現れては消える。だが、それは唐突に中断された。

「何突つ立てるの」

と、燐は血と砂で汚れているのを全く気にすることなく、魁の腕を掴んで彼を無理矢理近くの椅子に座らせた。その勢いに安物の椅子がぎし、と軋む。

燐は魁よりも五つ年上である。盜賊団の中でも最年長者であり、元来持ち合わせたりーダシップからか、こうして首領の魁ですら彼女に逆らえないときがある。それは時に魁と意見の対立を招くこともあるが、彼にとつても頼れる存在だった。

普通の女なら血に怯えそうなものなのに、こうして少しも臆せずに触つてくる。可愛げがないともいえるが、魁としては助かる。ただし、少々乱暴なところはいただけない。

「ほりとつとと脱ぎな

『お前それセクハラ』

「馬鹿言つてんじやないよ」

見事に声が重なった青年一人に半眼を向け、魁のジャケットを引き剥がすように奪う燐。これを見ているとセクハラといわれても仕方がないような気もしてくる。ジャケットを脱がされた勢いそのままに、下に来ていたTシャツまで奪われる。

線は細いが程よく筋肉の付いた上半身にもいくつかの切り傷と、それ以上の打撲痕があつた。

戻ってきた彩と燐は手際よく消毒したり、包帯を巻いていつたりする。

「よくも私たちの首領を……！　あの、忌々しいレ……」

「燐」

レオ、とその名を上げそうになつた彼女の言葉を、魁は遮つた。見返してくる燐に、首を横に振つて応える。

何も言つた。その魁の意思を瞬時に読み取つて、燐は作業に戻る。

「怪我は、俺の責任だ」

あの人数を一人で、それも無傷でどうにかできるとは最初から思つていなかつた。だが、獅子宮の奴らを一人で相手すると決めたのは魁自身だ。

付けて来ているレオの存在に炯も燐も気配で気付いていた。斎と彩、それから星華。三人を無事に帰らせるには、あの姉弟が必要だつた。

斎はまだまだ一人前には程遠いし、彩はまだこの稼業をはじめて半年も経っていない新米だ。可能性としては低いが、獅子宮の奴らが一人を狙つたとしたら燐一人でも炯一人でも守りながらでは対処しきれない。その点、一人が揃つていれば安心だ。

「無茶するなつてオレは言わなかつたか？」

「……無茶しなきやならぬときも在るんだよ」

炯の追求に不承不承言い返し、ちらりと、部屋の端にいる星華の姿を覗き見る。

なによりも、あんなことがあつた直後に星華をございざいに巻き込みたくなかつた。

自分で酷いことを言つておいて、都合がいいとは思つていい。

これは、魁の問題だ。星華の一件があつとなからうと、魁と神殿の対立は今に始まつたことじゃない。

「はい、終わり。今度一人でこんなことになつて来るんだつたら、それこそミイラ男にして動けないようにするからね」

「……お気遣いどーもありがとうございます」

気抜けする声で冗談交じりのお礼を言い、魁は立ち上がる。

星華はまだ両膝に顔を埋めていた。寝ているかも知れないと思つ

ほど静かで、だがかすかな身じろぎに起きていたことが分かる。

「星華」

名を呼ぶと、びくつと肩を跳ね上がらせて星華が顔を上げた。驚きと恐怖の入り混じった瞳。魁が一步近づけば、それは直ぐに硬く閉ざされた。

その様子に、魁は息を吐いた。

俺はそこまで乱暴者か。先程の仕打ちを考えれば、うなずけてしまう。

仲間の視線が痛いほど魁に突き刺さる。

ゆっくりと、彼女に手を伸ばす。

そして、ただ一度だけ、柔らかく頭に手を置いた。

星華が驚いたように魁を見上げる。けれど、そのときには既に魁の手は星華を離れ、彼は奥の部屋へと向かおうとしていた。彼女に掛けられる言葉を、今の魁は持ち合わせていなかつた。

* * *

「魁……起きてる？」

まだ空は暗いが夜が浅くなってきた頃、星華はアジトの一番奥にある魁の部屋を訪ねた。

いつも高く括っているブロンドは、今は解かれ地に向かつて真っ直ぐに落ちている。星詠みの巫女になった頃から伸ばしていた髪は、今では床に着きそうなほど長くなっていた。

星華の声に、反応はない。しかし中からはかすかな物音が聞こえている。

「魁……？」

恐る恐る扉に手を掛けると、予想に反して鍵はかかっていなかつた。

今まで、部屋には絶対に来るなど魁に言われていた。その言葉が気になつて何度も、こつそりと部屋に入ろうとしたこともある。だ

が、部屋の扉にはしっかりと鍵が掛けられていて入ることは叶わなかつたのだ。

その鍵が今は開いている。

星華はゆっくりと音を立てないよう、扉を開けていく。
「わ、あ……」

驚きからか、思わず感嘆の声が零れた。

広めに作られた、円形の部屋。その壁一面に設置された本棚には、所狭しと本が詰められ、床にも乱雑に本が積み重なっている。盜賊の首領の部屋というよりは、学者の部屋といったほうが似合ひ。そんな部屋だった。

「すごい数……」

クシャリ、と一步踏み出した星華は足元に散らばっていた紙を踏んでしまい、慌てて飛びのく。だが、飛びのいた先にも紙があり結局踏んだまま足を進める。

紙が散らばっているのは、床だけではない。机は整頓されていない紙が一面を多いつくり、その上に羽ペンや蓋の開いたインクのビンがある。あまつさえは、寝るためのベッドまで書物や紙に占領されかけている。

汚れた、乱雑な部屋。だけど、その光景に不思議と不快感は覚えなかつた。それどころか、日の当たる書庫のよつな、そんな雰囲気さえ感じる。

しかし部屋のどこを見回しても、肝心の魁の姿が見えない。

「……上がつて来い」

突然、聞こえたハスキーな声に、心臓が大きく跳ね上がる。

声のしたほうを勢いよく振り返る。よく見れば部屋の奥、本棚の裏側に沿うように階段があり、魁がそこから顔だけ覗かせて星華を見ていた。

一瞬だけ、交錯する視線。

だが不意に目を逸らすと、魁は階段を上がつていってしまった。慌てて後を追う。階段は螺旋状になっていて、上へと伸びていた。

そこでこの建物が塔になつてゐることに気が付く。確かに巨蟹宮には古くなつて今は動いていない時計塔がある。アジトの入り口は奥まつたところにあるだけで一般的な建物と同じだったのだが、時計塔の一階　魁の部屋に続いていたようだ。

古くなつて若干不安定になつた足場に気をつけつつ駆け上がつた先は、魁の部屋と同じ広さ　だが天井が丸みを帯びた、小さなホールになつていた。

中央には、白色の巨大な装置。その一部である一本の筒が窓に向けて伸びている。

「これ……天体望遠鏡？」

「俺のだよ」

開けた東の天窓から、魁が顔を見せる。背景には星空　時計塔の屋根に、魁はいた。

「こつちだ」

指で手招きする魁に、星華は急いで屋根に上がつた。

しばらくは、沈黙ばかりが続いた。屋根に並んで座つた二人は互いに何もいう事なく、澄み切つた空の星の輝きに目を凝らしていた。

「……すまなかつた」

やがて咳かれた魁の唐突な謝罪に、星華が驚いたように魁を見た。金糸のような長い髪が、夜風に纏われて宙に舞う。地上では心地よい風も、この高さでは少々強いようだ。

魁は、見つめてくる星華の視線から目を逸らさなかつた。

「何も知らないのは、俺のほうだつた」

「いいよ、もう……魁がなんで神殿を嫌つてるか、あたし知らなかつたし。あたしだつて、『ごめんだよ』

星華が何故謝つているかわからず、今度は魁が星華を見る番だつた。

眼下のスラム街を見下ろす星華。夜明け時も近くなつた今は、遅くまでついている店の明かりも皆無といつていいほど消えていた。

田を凝らせば、酔い潰れた奴らがふらふらと歩いている。

「レオ、でしょ？」

簡潔な、一言。だが思いもよらなかつた名前に、魁は田を見開いた。

街を見下ろしたまま端正な横顔を向けている星華に、気付いていたのか、と視線だけで問う。

「こ」数日ずつとストーカーしてくるんだもん、気付かないわけないつて。……「ごめん……あたし、魁達を巻き込んだ」

そう言つて、部屋にいたときと同じように立てた両足に顔を埋める。

何か言おうとして、しかし咄嗟に何も言葉が出てこなくて、手持ち無沙汰になつた右手で頭をかく。

「あのなあ……前に話したと思つけど、俺等は前から星枢軸と敵対して……」

「知つてる。でも、『ごめん』

はあ、と魁は深々と溜息を吐くしかなかつた。星華に会つてから、溜息しか出てきていないような気がするのは気のせいではないだろう。

今更になつて氣付くが、この少女は予想していたよりも責任を感じ易いらしく。こうこうになりたくないから、事を言いかけていた燐を止めたというのに。

これでは自分が悪人のような氣がして、実際に悪いことはしたのだが、魁は星華の腕を引くと、無理に面を上げさせた。

「これだけは言わせて貰うが、あれはお前の責任じゃない。俺が勝手に怪我したんだ」

困惑する星華の鼻先に、立てた人差し指をびしりと突きつける。

「お前のことがなくても、その内俺は獅子宮……星枢軸と真っ向から勝負する羽目になつてたと思う」

言葉の最後は、自分でも情けないほど弱々しかつた。

不明瞭な意味の言葉を呴く魁に、星華が首を傾げる。だが、分か

らないなら分からなままでいい。

それから、再び沈黙が流れる。空からは、徐々に星が消えていった。夜の終わりが近づいていく。

「……星華は、なんで踊りが好きなんだ？」

「あー……やつきの話？」

自分の本音を晒したことが今更になつて恥ずかしくなつたのか、白い頬に朱が差す。

先程の星華の事を聞いてから、ずっと気になつていたことだつた。神殿に閉じ込められるから星詠みの巫女が嫌いということは理解できる。だが踊ることが好きなら、神殿にいた方が多くの人の前で踊れるのだから、それこそ踊り手にとつては目指す所であるはずだ。

ややあつて、星華は口を開いた。

「ちつちやい頃にサルーンに連れてつてもらつて……そこで、たまたまだけど踊り子さんの踊りを見たの」

昔を話すのが恥ずかしそうに、星華が苦笑する。

「そのサルーンは今にもつぶれそうにボロボロで汚くて、舞台だつて小さかった。お客様んだつてそんなにいなくて、すこく寂れてた」見つめる先の空でまた一つ、空氣に溶けるように星が消えていく。「でもね、その人は綺麗だった」

脳裏にその光景が浮かんだのか、星華の顔がふわりと綻んだ。

「顔がいいとかじやなくて、踊つてるその姿が星みたいに見えたの。何よりも楽しそうだつた。あの人がステップを踏むたびに、店中が湧くの。お客様から向けられる笑顔で、踊り子さんも笑顔で溢れて、その笑顔でまたお客様が楽しそうに笑うの」

幸せそうな顔で　　事実、その頃は幸せだったのだろう　　星華
が星を見上げる。

「旅の一座がなんかの人だつたみたいで、それ以来あたしは見てないんだけどね……いつかあたしもあんなふうに踊つてみたい。観客と一緒になつて楽しめるような場所で、疎踊りたい。そんなことずっと思つてる」

恋する乙女、とはよく「いつがまさにそんな感じの表情だった。どこか夢を見ているような、ほんやりとした笑み。だが、その笑みを魁は綺麗だと思った。だからだろうか。

「俺はな、探し物があるんだ」

気が付けば、そんな台詞が口をついていた。

「そのせいで、星枢軸に首を狙われている」

「あの……貴族が言つてたこと?」

「ああ、在りもしない星とかいうやつか」

魁を気に掛けて、その言葉を言わないようにしていたのだろう。だが今は不思議と、その言葉を口にすることに何の抵抗も憤りもなかつた。波風のない水面のように、心が落ち着いている。

「在るわ……あの星は、ちゃんと」

真っ直ぐに見据える東の空が、薄つすらと白み始めた。

「盗賊になつてから、ずっと探してるんだ」

すつと、物音一つ立てずに魁が立ち上がる。合わせるよつこ、星華も立ち上がつた。彼女の背から真っ直ぐに流れ落ちる髪は、金色の天の川のようだつた。

「一度でいいから、この目で見てみたいと、思つてる」

限られたほんの一時、どんな星よりも強く輝くその光を、見たい。

だから

明るくなり始めた空に、星が見えた。

ほんのり赤く染まつた東の空にあるほかの星はもう見えなくなつてゐるといつのに、その星だけが空に残つて輝いていた。否、残つたのではない。現れたのだ。

砂漠地帯の終わりを告げる、東のシエダルクバ山脈。その山並みの中で最も標高の高い、ツイーと呼ばれる山。ナヴィガトリアから見ると丁度塔のよつに細く見えるその山の頂付近の左側に、ポツリと小さな、だが夜明けの光にも負けずには光る星が一つだけ浮かんでいた。

夜明けの眩しさではなく、魁が目を細める。恥々しげに。

「夜明けの晨星 しんせい」 あの星は俺が必ず見つけ出す

その一言に、分かつてはいたが驚いて星華が魁に食いつく。

「ちょっと待つてよ！ 晨星を見つけるって、だつて晨星は、ちゃんとあそこに……」

「晨星ではない別の星だ」

慌てふためく星華に、一刀両断の言葉を下す。

「嘘……」

「嘘じやない。俺の他にもあの星を探している人がいた」
迷いを感じさせない魁の言葉に信じられない、といったように星華は眩いた。

北極星が世界を支える軸であると言われる星ならば、晨星は世界にとつての夜明けを導く星とされている。晨星がその姿を隠せば、人々の間に災厄が降り注ぎ、経済は悪化の一途を辿るようになるとされている。世界の太陽^光を導く事が出来ずに、長い夜^闇に閉ざされるといわれ、北極星と並んで信仰される、大切な星のひとつだ。星華が驚くのも無理はない。

「じゃあ、星枢軸は星を偽つて……民に嘘をついてること……？」

「そういう、ことだな」

「そんなん、そんな、大変なこと……！」

「だから、隠し通してるんだろ」

もし晨星の存在が偽りだと世間に知られれば、神殿の権威は瞬時に崩れ、星詠みに関する信仰も大きく揺らぐだろう。神殿の権力に縋っている長老共が、そんなこと許すわけがなかつた。

「別の星が存在するはずだ。太陽を導く、本当の夜明けの星が空のどこかに存在している」

偽りの晨星が姿を消していく。一時しか見られないのは、本物の晨星と同じ。だからこそ、あの星が偽りであると人々に気付かれないのかもしない。

「俺が星枢軸と敵対してゐる理由、分かつたろ？」

どこか自嘲めいた笑みで、魁は口角を吊り上げた。

新たな星の認可には、星に関する一切を管理している星枢軸に申請をし、査定を受ける必要がある。自力で新たな星を見つけたとしても、神殿の査定に合格しなければその星の存在が正式に認められないことはない。当然、そんな申し出を認めるはずがないのだ。

魁としては先にとつと晨星を見つけ、その存在を星枢軸の権力が及ばぬ王都レクスフォール内で、証明させればいいと思っている。晨星が偽りだという確たる証拠があれば、王も黙つてはいない。いかに長老会であろうと、王の力には敵うまい。

だが、星枢軸はそれすらも阻止しようと盜賊として生きる魁を狙つてくる上に、最近は星枢軸の勢力も広がりを見せている。もしかしたら、王都内も既に食われているかもしれない。

「……魁があの日、神殿に盗みに入ったのもその為だったの？」

「まあ、な」

曖昧な返事を返しつつ、魁は街の外を眼で示した。

「あの遺跡だ」

ナヴィイガトリアの東部六宮の一つである巨蟹宮からは、蜃氣樓地帯と呼ばれる東の砂漠がよく見える。その蜃氣樓地帯の真ん中に、崩れかけている蜃氣樓の遺跡が遠目に見える。

「星の旧跡と呼ばれるにしては、そこで何があつたか分からない。更に神殿の異様なほど厳重な警備、漏れてこない情報」

朝日を受けて蒼い光を放つ魁の瞳の中に、未だ手の届かない遺跡の光景が映りこむ。

「あの遺跡に、何かがある」

それだけは、妙な確信として魁の中にはつとあつた。

「だから、あの遺跡の情報でもいいから何かないかと思つて神殿に行つたんだ」

「神殿みたいに、また忍び込んだりはしないの？」

考えなくとも答えが出るであろう率直な疑問にやはり魁は溜息を吐きそうになり、止めた。溜息を吐くと幸せが逃げていくというが、

これ以上は本当に逃げていきそつだ。

「できるんだつたらとっくにやつてる。神殿の奴らの警備が厳しうぎて入れないし、入れたとしても中の構造が分からない。逃げ道も分からなければ、一網打尽にされる」

「……遺跡の構造が分かればいいわけ？」

「だから、そうだつて言つてるんだよ。畢に……あー、情報屋に調べてもらつてるけど、全く分かんねえし……」

「あたし、遺跡の造りだつたら分かるよ？」

さらり、と。あつさり過ぎるほどあつさりに言われたその言葉に、魁は咄嗟に反応を返すことができなかつた。数秒後、

「……は？」

ようやく、そんな間抜けた返事を零す。ぽかん、と口を開けて滑稽なほど呆気に取られた顔に、星華が吹き出しそうになる。

「だつて、遺跡行つたことあるもん。舞を奉納するとか何とかで」あは、と憎たらしいほど眩しい笑顔。その瞬間、魁の中で何かが大きな音を立てて切れた。

「そういう大切なことは、先に言ええええええええええええええ！」

一日の始まりを迎えた聖都ナヴィガトリアに、影の星 首領・

魁の怒声がどこまでも響き渡つた。

第三章 黄昏の地

月のない、澄み渡つた星月夜だつた。真つ黒なインクを広げたような闇空に、今にも落ちてきそうなほどたくさんの星の花が咲いている。

魁は枯れた椰子の木の根元に身を潜め、一心に星空を見上げていた。その背後には、炯と斎、それから星華の三人が控えている。月のない夜は、好きだ。月明かりのないおかげで、星がいつも以上によく見える。星の輝きがいかに眩いものであろうと、月の強さには敵わない。孤高に輝くのではなく、仲間と寄り添いあって輝きを増すのが星だ。

なおかつ、新月の夜は身を隠すのにもうつてつけ。遺跡に忍び込むのに、これほどいい日取りもない。

「現在地は、ここだな」

そう静めた声で言つて魁は、砂の上に広げた大雑把な地図の一箇所を指差した。

今魁達四人がいるのは蜃氣楼の遺跡、その西側にある、千上がつたゆ湧泉の畔だった。

星華の思わぬ発言で遺跡に忍び込めるチャンスを得た魁は、すぐさま畢からありつたけの情報を集めた。そして三日後の今日、昼の内に蜃氣楼地帯の近くを通るというキャラバンについて砂漠を渡り、夜を待つた。

「で、どこから侵入するか決めたのか」

「こゝだ 一番の近道で行く」

千上がつた泉の東側一体を覆つようにある、枯れた椰子の群生。その直ぐ向こう側に並ぶ遺跡群の一番中央に位置する巨大な建物を地図で示す。

それを見て、炯は目を細めた。

「正面突破、か。きついな」

「仕方ないだろ。星華が遺跡の地下構造全部把握しているわけじゃないんだから」

畢や星華から聞いたところ、この遺跡が最も嚴重に管理しているのが中央にある、ナヴィイガトリアにあるフォニカ神殿を連想させる神殿のようなものらしい。その地下に、舞を奉納する場所があり、また他にも星に関する壁画類が眠っている、とは星華の言。彼女自身はそれらを目にしたことはないが、星軸の最高位星学者や詠人たちが度々訪れているから間違いないという事だ。

狙うとしたらここしかない。

星華曰く、この遺跡は迷路のように張り巡らされた通路で繋がっているとのこと。つまり複数ある、地下に繋がる建物どこから入っても目的地には辿り着けはするのだ。

が、星華が肝心の地下の構造を全て記憶しているわけではなかつた。

彼女が以前ここに来たときは順当に正面から入った上に、話から察するに、地下の構造は大分複雑らしく、とてもではないが一度や二度来ただけで覚えきれるものではない事が分かる。

侵入したという事はどのルートから行つても直ぐにばれる。迷路のような地下でもしも迷い、相手に追い詰められることを考えたら正面突破で侵入して、とつとと引き上げてきたほうが安全だ。

遺跡の造りを教えてくれるだけでもありがたいのはありがたいのだが、その中途半端さには呆れるしかなかつた。

「ホント……なんでああいう大切なことを黙つとくかな」

はあ、と無意識の内に嘆息してしまう。

大切なことというのは、星華が蜃氣楼の遺跡に入ったことがあるという事だ。星華が盗賊団に身をおいてから既に二十日近く経とうとしている。もっと早くにそのことを知つていれば、と思うとその時間が無駄に思えて仕方なかつた。

魁の言つところに直ぐに思い当たつた星華が、彼のその言い草にむつとする。

「だつてあたしそんなの知らないもん。魁が星を探してるとか、蜃氣楼の遺跡に目つけてるとか。何も教えてくれなかつた魁がいけないんだからね」

そう言われては、魁は何も言い返せなかつた。

この半月、魁は星華に自身の事など全くと言つていいほど何一つ伝えていなかつた。一時的に盜賊団においておくだけなら、教える必要もない。そう思つていた。

それどころか、星華のことを全部において信用しようとしてもいなかつた。長老会のように人柄が悪いわけではないことは分かつていたのだが、それでも心のどこかで星詠みの巫女　星枢軸の人間だという事が引っかかっていた。

そのことに、今更ながら罪悪感を覚える。

「とりあえず、話を戻すぞ。炯、兵たちはどうだ？」

魁の問いかけに、炯は木立の向こうに目を向けた。炯は　影の星の誰よりも夜目も遠目も効くのだ。

「配置は畢の情報どおり。回り込むんだつたら、比較的兵が少ない北側からがいいと思うが……」

そこで炯は、にわかに言葉を少し濁した。何か気になる事があるのか自分の判断を確かめるように、遺跡群の闇に目を凝らす。

「そろそろ見張りの交代だからか、兵がちょっと落ち着かないな。あとは混じつてる獅子宮の奴ら。今までの獅子宮に比べて、纏まりがないようを感じる」

炯の言葉を確かめるように、魁も闇に目を向ける。それから、ふと思いつたつたように天を仰いだ。

「最近獅子宮で何があつたか知らないが、どうも輝きがよくないからな。それに、若干形が歪んでいるように見える」

星空の獅子を見上げそう呟く。星はレオと会つた夜と変わらず、どこかぼんやりとしていた。加え、直感で感じる程度ではあるが、星の位置も少しだけずれているように見える。蜃氣楼は昼にしか發生しない　星のずれはここが大規模な蜃氣楼が発生する砂漠の真

ん中であるからといふわけではないだろ。

星を瞬時に詠み説く魁に、何故だか星華が目を丸くした。

「魁、すごいねー。星詠みできるんだ」

と、星華は感嘆の声を漏らす。

そういえば星詠みするところを見せるのも初めてならば、星詠みができることも伝えてなかつたなと思い当たり 星華のその反応に違和感を覚える。

「……お前、できないのかよ？」

星を詠んで人々を導き、星を讃える星詠みの巫女なのに。どこかそんな言葉が含まれた視線を受けて、星華のそれが宙を彷徨う。行き場を無くした手は、胸の前で無意味に指を組んでいた。

「あ、えっと……まあアレだよね！ 人には得手不得手っていうものが……」

「んじゃ俺が今やつたみたいに何か詠んでみろよ」

「すみません。できません」

なんとか言い逃れようとした星華に、追い討ちを掛ける魁。逃げ道が塞がれ、星華は瞬時に、それは潔すぎるほど潔く白旗を揚げた。「……別にできないわけじゃないけど、苦手なんだつてば。魁みたいにパツと見て直ぐには分からないよ」

拗ねたように口を尖らせる星華。その瞳が僅かに影を帯びた。

「だつてあたしは前の星詠みの巫女に勝手に選ばれただけで、別にそこまで星に興味あつたわけじゃないもん。巫女だから必然覚えさせられるけど、そこまで詳しくもないし……まあ、最初から覚える気なんてなかつたけどね！」

それにいつか抜け出して巫女なんて辞めてやるつもりだったしね。と片目を瞑つて見せた星華に、魁は頭痛のしてきそうな頭を抱えた。その迷惑千万な後先考えない行動だけは止めて欲しい。今となつては、あながち迷惑だけではないが。

「でも魁が星詠みできるなんて意外だなあ」

「……星を見つけるのに、星詠みができなくてどうするんだよ」

「や、ほら天文学者とかかとも思つたし」

星に関する職は三つに分類される。星詠みを扱う『詠人』、星を科学的かつ理論的に扱い星の発見・観測・研究を行う『天文学者』。そしてそれの中間職、星を天文学的に見、それを星詠みと交えるのが『星学者』だ。

確かに、星を見つけると言われたらまず真っ先に思い当たるのは、星の観測を専門的に扱う天文学者だろう。

零れそうになつた溜息を魁はなんとか呑み込んだ。

「一応、星学者だからな」

少しだけ吐息にも似た声が、口から漏れる。押さえ込んだのは、星華のせいではないからだ。

（今はもう、その資格もないけど　）

星に携わる学者は、それぞれの分野に応じ星枢軸に登録しなければならない。星学者としての資格など、どうの昔に神殿に剥奪されていた。星に携わる者であるという登録証がなければ、星枢軸の査定も受けられるはずがない。

「魁、無駄話はそろそろ終わりだ。……兵が動く」

陰鬱になりそうな魁の思考を察してか、炯が遺跡のほうを見て咳く。鋭い声は、一瞬にして魁の思考を切り替えさせた。

「じゃ、俺と斎が囮になつて入り口の兵を引きつける」

「その隙に、魁兄と星華さんが神殿に侵入するんスよね」

「お前達が上手く侵入できた後は隠れていいんだな」

最後に大まかな手順を確認する炯と斎に、魁は頷いた。

「ああ、そう時間は掛けない。夜明けまでになるべく蜃氣楼地帯を進みたいからな」

「了解」

奴らと戦うことはないとと思うが、万が一に備え炯が軽器類をチエックする。それに習い斎も。そして意気揚々と一人は立ち上がった。

「んじゃ、斎。行くか

「はいッス！」

クシャリと斎の頭を撫でる炯。

歩き出したその背を、同じように立ち上がった魁が呼び止めた。

もう一度だけ星空を見上げ、確認する。

「風星のひとつが、変光を始める。風が変わって……突發的な砂嵐がくるかもしない」

気をつける、と背に投げ掛けられた首領の言葉に、炯が振り向いて戻ってくる。

「それはこっちの台詞だ」

ニツと快活な笑みを浮かべ、炯は斎にしたのと同じように魁の跳ねた金髪を搔き撫でた。

「風星が同る物は『風』。それは現象として現れる風だけに限らない。……そうだろ？」

晨星は『夜明け』を導くと同時に『世界にとつての夜明け』を導く意味を持つ。それと同様に風星は『大気の動き』を知らせる他に『世界の風向き』を人々に教えるとされている。

「気を付けるよ」

その言葉に魁が力強く頷き返したのを見、炯と斎は走り出した。

* * *

建物の中は、予想以上の暗さだった。

月明かりがないことも影響しているのだろうが、それでも外のあちこちに設置されている灯りすらもあまり入ってこない。それ以上に、炯達が起こした騒ぎとは正反対の、水を打つたような静けさがこの暗さに拍車を掛けている。不気味なほどの静けさが魁達にそう感じさせた。

闇は心に恐怖を呼ぶ。その恐怖が、更に周囲の闇をより見せる。

建物の一階部分に辿り着いた魁は、フリントの取り付けられた簡易式の発火具で携帯用のランタンに灯りをつけた。そのままもう一つのランタンにも灯りをつけ、星華に手渡す。

明かりが漏れて場所が知られることがないように、物陰に身を隠しながら、周囲を見回す。

「外観に比べて、中は思ったほど崩れてないんだな……」

近くにあつた柱に手を当てて魁は興味深げに呟いた。

夜のではなく石の黒に塗りつぶされた壁や柱は、千年以上経つているにもかかわらず形状を殆ど崩していなかつた。

昼に見た、真っ黒な石造りの遺跡群はさすがに千年という歳月に見合い、荒廃が酷く進んでいた。建物の中にはあちこちが剥がれ落ち、崩れ、既に原型を留めていない物もあつたのだ。

星華が魁の手元を眺めながら、奥へと足を進める。

「あたしも初めて来たときは、ちょっと驚いたよ。多分、中がしつかり造られてるとか、あと周りが砂漠のせいもあるんだろうけど」確かに、連日のように起こる砂漠の砂嵐は建造物に大きなダメージを与える。風に舞う砂の粒が石を削り、緑地のある場所よりも風化は早いかもしぬれない。

だが、

(これが本当に千年も経っている物なのか　?)

そう思わずにはいられなかつた。

魁の専門職は星に関することがあるが、考古学的知識が乏しいわけではない。むしろ、先人によって構築されてきた文化である、星にまつわる事象を調べる上でこういった考古学的調査は必要となることが多い。まだ星学者としての資格を持つていた魁も、数えるほどであるが遺跡を訪れたことがある。

その経験から言つても、内部のこの様子は崩れていなさ過ぎる。

「魁、こっちこっちー」

一足先に奥に向かつた星華の招き声に、魁はハツと我に返る。念願かなつて來ることのできた遺跡のためか、つい没頭してしまつたようだ。

注意深く周囲を見渡しながら星華の後を追う。

今夜、本当ならば星華を連れてくる必要はなかつたのだが、魁は

星華に遺跡の案内役を頼んでいた。

魁も彼女から教えてもらった内部構造を一通り把握してはいるが、それは星華のあやふやな記憶に頼つたものだ。魁に伝えよりあやふやになつてしまつてゐる地図に頼るならば、実際に連れてきて案内させたほうが手つ取り早い。

故に、今回のメンバーは運動神経に優れている炯と斎を含めた四人。アジトを何日も無人に晒すわけもいかないので、彩と燐を残してきてあつた。

「ここから地下に行けるの」

星華が灯りで照らし出した先　　そこが地下に続く階段だつた。黒い岩の積み上げられた階段は所々形を失つてはいるがやはりこれも見た目よりしつかりしているようで、魁が乱雑に足を踏み入れても足場はぐらつく素振りすら見せない。

星華を背後に回し、魁は一步を踏み出す。

「それにしても、本当に遺跡の内部には兵がないんだな」

周囲を訝しげに見回しながら、魁は階段をゆっくりと降りていく。遺跡の外は異様なほど警備が厳重だが、中には人の気配すらもなかつた。

「うん……あたしが入つたり、フォニカから星学者が来たりする時は何人か護衛の人に入るんだけど、それ以外の　普通の見張り兵とかは立ち入りが禁じられてるらしいの」

魁の背を星華が追いながら、最後の一級を降りる。その先にも階段は続いていたのだが、星華は分岐点を右に曲がつた。その先に続く、全てを覆い隠すような濃い闇が支配する回廊。

（兵すらも立ち入らせたくない……か）

フォニカ神殿に隠されていた宝物庫と、何もかも同じだ。大切なものであるが故に幾重にも守らせ、しかしその大切なものには何人たりとも近づけない。

その時、あつ、と星華が何かを見つけ、魁を抜かして小走りに駆けていく。

「これじゃない？」

回廊を抜けたその先に、まるで小さな展示場のような空間が広がっていた。その壁一面、ぐるりと部屋を囲むように、彫刻用であると思われる白い石の壁に隙間なく何かが描かれていた。

炎に浮かび上がったのは、壁に刻まれた獅子や乙女の姿など、黄道十二星座を模した絵とそれにまつわる御伽噺の風景。剥がれたり色褪せたりしているが、着色してあつた後もうかがえた。

十一星座は、星を奉るものとしては極一般的だ。

太陽の通り道にある十一星座は北極星と自らが取り囲む世界を守る。その意識は星詠み文化の中でも古くから人々の中に根付いている。

それは、第十一富宝瓶宮^{アクエリヤス}がナヴィガトリアの水を管理するように、ナヴィガトリアに住む十一の一族はそれに見合つた仕事を古来より任されていることからも分かることだ。

「どう？ なにか分かった？」

顔を覗き込んで来る星華の声に、応える声はない。つまりは、否定だった。

おそらくはこの壁画そのものは年代的に価値のあるものなのだろう。だが、あまりにありふれ過ぎていて、一見しては分かるようないことはない。

星座物語を順に手で辿つて読み解きながら、隣の部屋へ移動する。

「……っ！」

炎に浮かび上がった光景に、魁は反射的に半歩後退つた。

最初に感じたのは、異質さ。どこか、幾何学模様を思わせる大量の線が視界一面に 壁だけではない。天井や床にまで、刻み込まれていた。だが、それは単なる幾何学模様と違い規則性がない。落ち着いて見直してみると、その線の書き方に覚えがあつた。部屋をぐるりと見回す魁の目が、すっと細められる。

「これは 星図だな」

「星図？」

ポツリと零した独り言のよくな魁の言葉を、星華が反芻する。星華には、この部屋が星図に見えていないようだつた。

星図に見られなくても仕方がない。

「部屋 자체が天球を模した星図になつてゐる。昔のだから、今とは少し表記の方法が違うが、ここに点在して描かれているのを辿つてくと、星座が見える」

「へえ～」

魁はいくつか刻まれた大小さまざまな点を、星座の形が分かるよう指でなぞつていく。それに星華も星図が描かれていることが分かつたのか、感嘆の声を漏らした。

部屋 자체を天球に見立て、そこに星を描いたというところか。確かに、星を図に表すのであれば平面に描くよりも、観測者がいつも見ている天球の中心から見たほうが分かり易い。こういった類の物は、昔王都にいたときに見たことがある。そのときはドーム上の部屋の天上を北天に見立てた簡素なものだつたが。

ただ現在主に使われる星図と決定的に違うところは、そこに恒星で作られる星座だけではなく、惑星の動きや他の星の光を反射して光り輝く星の姿までが示されているところだ。

「なんか古くてあちこち欠けちゃってるね」

星華が欠けた石の断面を指でなぞる。

先に見た星図物語と同じように、あちこちが剥がれ落ちて一部読み解けないところがある。むしろこちらのほうが、劣化が激しいかもしれない。

(違う)

尖った断面を撫でながら、心の中で否定の言葉が浮かび上がる。心臓が妙に早鐘を打つ。

「欠けたんじゃない」

どこか震えた言葉に、星華が勢いよく振り返る。

魁は点在して欠けている箇所を辿つて、その周囲の星を見ていく。けれど　ない。

「誰かが、欠いたんだ」

「そうだ、あるはずだ。他の惑星と同じ光を持たない、星座を構成する星とは違う晨星が。なのに

「晨星がない」

その咳きだけは、異様に大きく空間に反響した。

言葉を失つた星華の瞳が、驚愕に大きく見開かれる。

「晨星は惑星の一つ……他の火夏星ひなっぽしや辰星たつぼしのようにそれぞれの時期に見える場所……動きが描かれているはずだ。なのに、どこにも見当たらない」

火夏星なども、その全てが残っているわけではない。やはりその周辺の欠けている影響である時期の火夏星の一部が欠けてしまつていたり、姿が消えている箇所もある。だが、それでも姿全てが見えない星は少ない。これが、偶然なのか 否。

「それに普通こんなふうに点在して細かくは剥がれ落ちない。第一、劣化したにしては、割れた断面が鋭すぎる。まるで石を割ったときのようだ」 強い力で鱗を入れたような断面だ

皿を見開いたまま、星華が唾を飲むのが分かつた。

「じゃあ、星図がこんなふうになつているのも……星枢軸の仕業つてこと?」

「まだ可能性でしかいえないが、おそらく。元から晨星が描かれていなかつたかもしれないし、本当に自然に剥げてしまったのかもしない。けど……偶然とは思えない」

そして、星華と共に遺跡に来られたことも、こうして星図を見られたことも。

まるで何かに導かれるように、少しずつ晨星に近づいていくようだつた。

一心不乱に星図を見続ける魁。その隣で、星華は部屋がさらに続いていることに気付いた。

「まだ、奥にも部屋があるみたい」

そう言って星華が足を踏み出す。

その瞬間、彼女の足元にある床が、まるで泥沼に踏み込んだときのように沈んだ。

「え……？」

がくんと、バランスを失った星華の体が崩れ落ちる。

「なつ……！ 星華！」

咄嗟にカンテラを放り投げて手を伸ばし、華奢な体を引き寄せる。だが、魁の重みも加わった床は崩壊速度を急速に増し、彼の足元も飲み込んでいく。

落下。その単語が頭に浮かび、身を反転させる。やう、ちゅうど星華が自分の上になる。星華をそのまま胸に抱きかかえ、

「きょあ！」

そんな声が至近距離で聞こえたのと同時に、衝撃が背を打った。

「つ……」

背に叩きの硬さと脈動するような痛みを覚え、魁は小さな呻き声を漏らした。

自分の体の上には広がる金の髪と柔らかな感触 星華だ。

「お前……『きょあ』って、一体どこからそんな悲鳴が出てくるんだよ。普通『きやあ』だろ」

星華が口を開くよりも早く、真っ先に出てきた言葉は奇怪な彼女の悲鳴に対する呆れた文句だった。

かすかに降つてくる石の欠片と砂を払いながら、少しだけ体を起こす。途端、鋭い痛みが駆け抜けた。

(受け身に失敗したかな)

だが、星華に怪我がないようならそれでいい。これで星詠みの巫女に残らぬ傷でも付けようものなら、後が怖い。

「……じゃあ次は『きやあ』って叫ぶ

「まず次がない様に気をつけろよ。とこつより早くどけ。重い」

「な……つ、重いって……ちょっと、魁！」

反論する星華を無理矢理引き剥がし、上体を起こした。お前は男

の上に乗ったまま恥じらいとか、いつものがないのか、と思わず言
いそぎになる。

立ち上がり自身を落ち着けるように息を吸えば、珍しく妙に湿
った空氣と、苔生した臭いが鼻を突いた。

「こには……」

「落ちた、みたいだな。この場所、知ってるか？」

頭上の落ちてきた穴を見上げる魁に、星華は首を横に降った。

落ちたのはそう大した高さではなさそうだ。受け身が上手く取れ
なかつたのは、乗っていた星華のせい。そういう事にしておこう。
「遺跡が崩れるなんて、今までなかつたんだけど……」「

一つになつたカンテラのかすかな光に照らされて浮かび上がる、
周囲の様子。それを見て、魁は息を呑んだ。

「灯りを貸せ」

落ち着いてはいるが、どこか星華がカンテラを差し出すよりも早
く、半ば奪い取るようにして周りを照らす。

部屋というよりは、どちらかといえば通路のような縦に細い空間。
その先に、鎮座する小さな岩 いや、石版だ。

ドクン、と何故だか心臓が大きく脈打つた。

もう一度足元が崩れ落ちるのではないかといつ心配すら忘れ、気
が付いたときには魁はその石版に駆け寄っていた。

遺跡を造る黒色とも、壁画を描くための白色とも違う砂漠の砂礫
のよがつな岩。その表面はまるで積み木が組み合わされてできたよう
に、酷くでこぼこしている。

その平らとはいえない石版の表面に細かな文字が刻まれていた。

「これは 旧語？」

「魁、読めるの？」

「少しほ

早口にさう言い返し、石版の表面に目を走らせる。時折、降り積
もつていた砂塵を払い、忙しく何度も視線を往復させ、やがてそ
の口が小さく言葉を紡ぎだした。

「キノ…………あ、り、捧ぐ…………役目、ち…………しん、軸とし…………」
の地
ナ、ヴィガ」

そこで、唐突に魁は読むのを止めた。

「魁？　どうしたの？」

怪訝そうに顔を除きこむ星華。しかし、魁は何も応えなかつた。
自分の口から出てきたその名を確かめるように、再び何度も石版
に刻まれた言葉を読み直す。

文字を書くには不適切な武骨な石版。文字が、単語が、割れ目や
繋ぎ目を跨いでいて読み上げたものがあつていいとは決していいえな
い。

だが見間違えではない。はつきりと刻まれた、『N a v i g a t
o r y a』の文字。

「おうと……央都ナヴィガトリア　？」

* * *

その日、フォニカ女神殿は夜明けを迎えると同時に騒がしくなつた。
いつもの莊厳な静寂はどこへ行つたのか、廊下を走る音さえも聞こ
えてくる。

「馬鹿な…………遺跡に忍び込んだだと？」

その神殿の一角、慌しい音と空氣を遮断するように窓も扉も閉め
た部屋で、暗黒色の茶髪の青年は机を挟んで田の前に立つ女性に訊
き返した。

洸樹・A・アリオス　星枢軸に登録し、神殿に仕える星学者の
内最高位の称号を持つ青年の柳眉が跳ね上がり、端正な顔が歪む。
信じられないといった洸樹の翡翠の視線を浴びながら、それも表
情を一つも変えることなく彼の補佐官は答える。

「はい。首領の魁が星華様と共に逃げていく姿を、丘が田撃したよ
うです。他にも『炯』と『斎』の姿を確認済みだそうです」

そう淡々と告げる補佐官の言葉に、思わず田眩を覚えそうになる。

明け方を待たずして神殿に飛び込んできた報せ。それは、影の星の首領を務めるあの魁が、蜃氣楼の遺跡に、忍び込んだというものだつた。それも、星詠みの巫女である星華を連れて。

警備の合間を潜り中に入った。それだけでも称賛に値するのに、更にそこから無事に抜け出した。

複雑な地下構造を使つて巣穴の虫を追い詰めるような兵たちの追及の手を逃れ、それも協力者である彼女がいたから成し得たことだ。

協力者は第五十六代目星詠みの巫女、先日その盗賊団、影の星と共に神殿から逃げ出した星華・セイリオス。

星詠みの巫女誘拐に、硬く立ち入りを禁じた蜃氣楼の遺跡への不法侵入。

魁がこれ以上罪を重ね、いや、これ以上本物の夜明けの晨星に近づこうものなら、長老会が黙つていはない。

ぐつ、と爪が皮膚を破りそうなほど強く拳を握り締める。まだ、大丈夫だ。まだ、まだ晨星に直接手が届くわけではない。あそこに残された旧跡は、すべて取り除いたのだ。あれだけの条件で見つけられるわけがない。

「光樹様、如何なされました？」

「いや、何でも……」

抑揚のない声色で、けれどどこか気遣うような響きで様子を伺つてきた補佐官に、何でもないと言いかけ、口淀む。

「長老たちは、今どうしている?」

「盗賊と、星華様の対処について話し合つておられます。巫女様の御付である光樹様にも早急に会合に参加して欲しいとの要請が来ています」

星枢軸最高位星学者。その役目は神殿に仕える星に携わる学者の統括だけではない。星詠みにおける巫女の補佐、それに巫女の付き人のような役割も時にはすることになる。

最高位として星詠みの巫女の傍で仕えることができるといふこと

は、世間一般に見ればとても名誉なことなのだろう。しかし、仕えるべき当の巫女があれでは、とても喜べなかつた。付き人即役回りも、星華の場合では監視も兼ねての事だ。

その上で、星華を逃がしてしまつた責任は大きい。

星華の事といい、長老会の事といい、自分にはとことん疫病神が憑いて回つているのだと、こういう時思い知らされる。

「今しばし、待つように伝えてほしい。三十分以内にはそちらへ行く」

「かしこまりました」

そう丁寧な一礼をして、補佐官が退室する。扉を閉じるほんの小さな音が、与えられた無駄に広い部屋に虚しく響き渡る。

朝日の差し込む窓の外に見える、白い光に照らされた聖都ナヴィガトリア。綺麗なところばかりではない、むしろ神殿の手によって汚れきつてしまつた街。そんな街の風景ですらも、今の洸樹は直視できなかつた。

あの街のどこかに、星華がいる。そして魁と名を隠した青年が。

もう、止める。晨星なんか探さないでくれ。頼むから

「これ以上は、足を踏み込まないでくれ。魁斗……」

その呴きは、朝日に溶けていくよに焼き消えた。

その部屋の惨状は、凄まじかった。まるで盗賊に荒らされたかのようにここがその盗賊の本拠地なのだからそれはまずないと思うけど 本棚に詰め込まれていた本はその殆どが床の上に散らばり、机の中の物という物がひっくり返され、とても人が生活する空間とは思えない。

そんな部屋の奥、良く確保できたと感心してしまつほど小さなスペースで部屋の主である魁が黙々と机に向かっていた。机の上に幾重にも重ねられた開きかけの本の上に紙を敷き、右手には羽ペン、左手には分厚い紙の束を持っているその状態は器用としか言ひようがない。

数時間前に見たときよりも酷くなっているその部屋の様子を見て、星華は思わず口をぽかんと開けて呆然とするしかなかつた。

「ねー、魁」

そう足元の物を蹴散らしながら一步進めば、ふわりと大量の埃が宙を舞う。元から散らかっていた部屋であつたためか、どこからか出てきた綿埃もサンダルで晒した素足の周辺をふよふよと漂つている。

蜃氣楼の遺跡から戻つて既に一日、ナヴィガトリアのアジトに戻つて以来魁はずつと部屋に籠り切つていた。集めた本や論文を片つ端から漁り出し、熱心に何かを調べ いや、探していく。それこそ食事も取らないほどだ。

その結果が、この部屋だ。

からうじて燐の用意してくれる軽食は取つてはいるようだが、砂漠を渡つた後というのにずっと寝ていよいようだし、このままでは倒れてしまうのではないかと心配になる。

「……ちょっとはさ、部屋の掃除とかしようよ」

部屋の汚れ具合に顔を顰めながら、ようやく魁の元まで辿り着く。

ちゅうとした本の密林を進んでいたよつた気がするのは氣のせいだらうつか。

「ねえつてばあ

しかし、魁からの反応は何一つない。

「かーいつてば！」

とうとう業を煮やし、星華は声を張り上げた。それも魁の耳元で。その至近距離での怒鳴り声に、よつやく魁が紙に何かを書き記していた手を止める。

が、何か言い返してくるのかと思ひきや、魁は突然立ち上がるが、星華に一步詰め寄った。

いつになく真剣な瞳。底の見えない瞳の蒼さに、思わず星華の心臓が高鳴った。

「ちょ……か、魁？」

顔を近づけてくる魁に星華は後退りつつあるが、足を移動させるスペースすらそこにはない。

怒られるのか。そう思つたが魁の瞳に怒氣はない。ただ静かで、吸い込まれるような澄んだ瞳が星華のそれとぶつかる。

視線を逸らすことも出来ず反射的に目を瞑り 瞬間、何故だか両足が地から離れた。

胴体に感じる他者の体温、瞼を上げれば部屋のドアに向かつて移動している視界。

自分が荷物のように魁に抱えられているのだと氣が付いたときは、星華は廊下に、文字通り放り投げられた。

無造作に放り出され、怒りと涙の混じつた目で魁を見上げる星華が口を開くよりも早く、追撃の一言。

「邪魔だ」

凍えた声が頭上に降つてくる。

「気が散る。静かに出来ないなら出てけ」

「な、何よその言い草！ 誰のおかげで遺跡に入れたと思ってるのよ！」

「星華様のおかげです。感謝します」

どこかで聞いたようなその考え方。言っている魁はとも楽しそうな悪戯じみた満面の笑みを浮かべている。

卷之二

神経を逆撫でしていくその笑みが憎たらしい。

しかし、そんな星華を気にも留めずに、魁は小さな麻袋を彼女に放り投げた。ジャラリと、キャッチした瞬間、硬質な音が鳴る。硬貨の音だ。

物にでも行つて来い」

言ひや否やハタンと、静かに閉じられる扇。ただ一人廊下に寂しく取り残された星華の拳が強く握られ、小刻みに震えだす。

そしてついに頂点に怒りが達した時、

「馬鹿魁いいいこ！ しーもん すこからかんにななまで金使し
込んでやるんだだからああああああ！」

その叫び声すらシャツトアウトするように、薄つすらと開きかけ
だつた扉がばたんと乱暴な音を立てて閉じられた。

スラム街の入り口には、流れの商人達が集まって作られた露店街がある。

「信じられないあの馬鹿！」これは心配してあげてるの……！

信じられないあの黒鹿！」これは心配してあけたのは……！
その灼熱の日差しが降り注ぐストリートのど真ん中でいきり立つ
星華を、彼女を挟んで歩く彩と斎がまあまあ、と宥める。一人の手
には抱えきれないほどの紙袋。星華が宣言じおり魁の　というよ
りは盜賊団の財産を使い込んでいる証拠だ。

魁さんが何日も部屋に籠るなんていつもの事ですし……」「

「そうジスよ。前なんか一週間何も食べない、飲まないで死にそうになつたところを危うく発見したんスから」

そのときのことを思い出してか、腕を組んで斎が憤慨する。

「冗談みたいな一言。しかし、今現在も部屋に籠っているだろ」魁を考えると、笑つて」まかすこともできない。集中するのも没頭するのも悪いことではないが、これが続くようだつたら部屋から引きずり出してやるつ。星華は内心そう決意する。

「けどレディを部屋から放り投げるなんて酷くない？」

同意を求めて星華の目が、同じレディである彩に向けられる。

そんな星華に彩は栗毛色の髪をふわりと揺らして、困ったような笑みを浮かべた。

彩は星華の一つ上。年齢が近いために星華が団に身を置き始めた当初から何かと一緒にいることが多い。神殿の中では星華は巫女として腫れ物に触るような扱いばかり受けたため、彩という存在は嬉しい。が、本人は癖だつたが、未だこうして敬語は抜けていないところが、星華の唯一納得行かないところだつた。

「確かに酷いですけど……今まで部屋について怒られなかつただけ凄いですよ」

「そうなの？」と目を丸くする星華に、彩は小さく頷く。

レオとの一件があつた後、魁は星華が部屋に入ることを禁じしなかつたし、気にも留めなかつた。遺跡に忍び込む算段を整えるときは、寧ろ呼びに行くのが面倒だ、と部屋に星華を呼び出す始末だ。「魁さん、絶対に部屋には誰も入れよつとしないんですよ」「誰もつて、燐さんも炯さんも？」

「は」

盗賊団の中でも、魁は燐と炯には特別な信頼を寄せている。そんな風に星華には見えたのだが、そんな二人にでも知られたくないことがある。そういう事なのだろうか。

しかし、ならば何故団の首領を務めているのだろう。

思い出すのはあの暁時、一緒に偽りの晨星を見たときの魁の瞳。瞬きもせず、その姿をまるで目に焼き付けよつと真つ直ぐに星を見つめる、炎のようなアイスブルーの双眸。

そして枯れたオアシスで、自分が星学者であると告げたときの寂

しげな表情。あの時、星華は何故だか深く聞く事が出来なかつた。あれ以上立ち入つてはならない。そんな気がしたのだ。

(あたしは、まだ知らない事がたくさんある)

そう思考に埋もれながら通りを歩いていると、「巫女様ーっ！」と元気な声が星華を呼んだ。ふと道の脇を見ると、数人の子供達が笑顔で手を振つていた。

頭からすっぽりと被つた砂色のマントの隙間から笑顔を覗かせて小さく手を振り返す。

注目を浴びることは嫌いではない。むしろ自分の存在で誰かが喜んでくれるなら、これ以上嬉しいことはない。けれど、

(顔、ばれちゃうかな……)

目立つのは極力避けたかつた。

魁がレオと対峙して以来、何故だかそれまで星華を付けていた獅子宮が姿を消した。だからこそこうして護衛には不向きな彩と斎だけに出かけていられるが、それでも街には治安維持兵である人馬宮がうろついている。獅子宮と違つて星枢軸の直属の兵ではないが、人馬宮も星枢軸の手先には変わりない。

星華は顔を覆うフードの裾を引っ張る。

銅貨数枚で買えそうな砂色のマント。魁が顔を隠すためと、強いて差しから肌を守るために渡してくれた物だった。神殿を抜け出すときには着ていた夜色のローブも持つているのだが、あの上質品をスマムなんかで着ていたら目立つと怒られたのだ。

「でも魁さんが自分から話すなんて珍しいですねえ」

と、彩が感嘆のような声を漏らしながら、廃材で組み立てたような店から身を乗り出して商品を勧めてくる店主をやんわりと押し戻す。

(慣れてるなあ……)

元々の性格が普段はおつとりしていて大人しいのだが、彩はこういうところでしつかりとしている。

言葉の意味が判らないで何も返せないでいる、

「星のこと、ですよ」

と、彩が付け足した。晨星のこと、とは言わない。ビルで誰が聞いているか分からぬ以上、下手に口にはできない。

「珍しい……ってなんで？」

「魁さん、自分のことは殆ど口で言つていいほど喋らないんですね」「素性不明、つてやつツスね！」

星華と彩の前を先導する斎が振り返つて元気よく言つ。

や、それはちょっと違う気が。確かに素性が分からぬ人ではあるけれど、そう言つと急に怪しく聞こえる。

同じ事を思つたらしく、彩がおかしそうに思わず吹き出す。だがその目は慈愛に満ちていてどこまでも優しい。

「星の事は星枢軸^彼と対立することになる私たち団の人間に関わるから、必ずは教えてくれるんですけど、それでも、なかなか教えてくれないんですよ。私もほんの一ヶ月前まで知りませんでした」

「えつ、嘘？」

以前聞いた話では、彩は盜賊団に入つて半年ぐらいだつたはず。それなのに教えてもらつたのがつい最近。星華自身が晨星のことを聞いたのが入つてから半月ほどのことだつたために、思わず声を上げずにはいられなかつた。

「嘘じやないです。それに、燐さん伝いに聞いたことですし」「斎君も？」

星華の問いに、斎は記憶を探るように空を見つめる。

「そうツスね、僕も入つて一年半ぐらいは経つツスけど、教えてもらつたのはしばらくしてからツス。僕は炳さんからだつたツスよ」「探し物のせいなのか、魁さん警戒心の塊みたいな人ですからね」「クスクスと笑う彩のその物言いに、星華も斎もつられて笑みを零しながら、ふと唐突に思い当たつた。

「燐さんと炳さんは？」

「聞いてませんか？あの二人は 影の星 結成当初からのメンバ一で、魁さんの事情は最初から知つてゐるみたいですよ。魁さんの

事はあの一人が良く知っています、「

そう言われて、魁がどうしてあの姉弟に特別な信頼を置いているのかなんとなく理解する。盗賊団 影の星 が現れたのは確か三年ほど前。星枢軸に喧嘩を売ったという事で、当時ナヴィガトリアで大々的に報じられていたから、星華もよく覚えている。

たつた三人の盗賊団。それで星枢軸と闘ってきたのだから、一緒に敵を出し抜いた喜びも分かち合つた苦難の味も一入だつたのだろう。

「だから、珍しいんです。その……」いつ言つたらあれかもしれませんが、魁さん、最初は星華のことあまり良く思つてなくて……」

「別に気を使わなくたつていいよ。事実だもん」

伏目がちに口を濁した彩に、星華は頭を振つた。

星華は、レオの事があるまで魁がどういう田で自分を見ていたのか知つていて。魁ははつきりと表に出すことはなかつたけれど、あの時はまだ星枢軸に所属する者であることに警戒心と嫌悪感を抱いていた。

あの夜、互いの目的を始めてはつきりと明かしてから魁は変わつた。

「多分ね、似てるからなんだと思つ」

脈絡のない言葉に、彩も斎も田を丸くして星華を見る。

「魁は星枢軸に追われながらも、星を探してゐる。あたしは神殿を抜け出して、自由に踊りたいと思ってる。星枢軸と敵対して狙われるつて所では同じなんだと思う」「

脳裏に浮かぶのは部屋で本に没頭していた、魁の横顔。

「だから魁には頑張つて、絶対見つけて欲しいな」

「星華さんもツスよ」

唐突に斎が立ち止まり、星華を振り返る。

「魁兄だけじゃなくて、星華さんもツス。星枢軸なんかに負けちゃダメツスよ。いつか舞台で綺麗に踊つて見せてくださいツス!」

「うん、そだね。ありが……」

純粹な応援を送つてへる斎に、そつお礼を言ひかけて 気が付いた。

星華の足が、自然と歩くのを止める。

「星華？」

心配そうに顔をぞ逃きこむでへる彩に、星華は我に返つたようこ慌てて首を振つた。

「な、なにか僕変な」と言つたツスか？』

「う、ううん。何でもない、よ。ほらつそれよりさ、今田は魁の有り金全部使つてやるつて決めたんだからパアツと行こりうか！」

「……星華、それ盜賊団のお金なんですけど」

星華の問題発言に、彩が眉尻を下げる。

「細かいこと気にしないの！ 斎君案内は任せましたよー。」

「任されたツス！」

「あ、斎君単独行動はダメですよ！ また後で魁さんに怒られますつてえ！」

ビシッと敬礼を一つ決めて、斎が勢いよく走り出す。その後を彩が血相をえて追つていき、置いていかれそうになつた星華も慌てて駆け出す。

その瞬間、どこからともなく伸びてきた手に腕を引かれた。

突然の力に反応することもできず、そのまま建物同士の隙間に引きずり込まれ壁に押さえつけられる。

脳内にフラツシユバツクするスラムに来た日の事。ただあの時と今は違う。今は、助けてくれた魁がいない。やう思つた瞬間、本能が全力で声帯を震わせた。

「ふんー つ！ はひふんほおなにすくな」

叫び声を上げようにも口を塞がれていて、くぐもつた声しか出でこない。

かくなる上は強硬手段。そつ手足を振り上げようとして

「星華、俺だ」

夜空の静けさを思わせる、低い声。

ハツとなり星華は動きを止める。

その人を判別するのには声だけで十分だった。

聞き間違えるはずがない。

毎日毎日聞いていた声。

「こう……き？」

フオニカ女神殿で仕える星枢軸最高位星学者、洸樹・A・アリオス

星華が最も慣れ親しんだ人物がそこにいた。

* * *

洸樹の名を呟いたまま、星華は突然の彼の登場に驚いて呆然としているようだつた。

それもそうだ。神殿の上層部に住む人間がスラムなんかに一人でいるとは思わない。

ようやく事態が呑み込めたのか、気まずそうに目が泳ぎだす。

「な、何か用？」

突然訊ねてきた友人に用件を聞く。場違いにもそんな風に平然と聞き返してくる星華に、

「『何か用？』じゃないだろこの馬鹿！」

洸樹は思わず声を張り上げずにはいられなかつた。
顔がくつつきそつとなほど至近距離で怒鳴られ、覚めたように目を白黒させる。

「いきなり怒ることないでしょうよ…」

「お前が馬鹿をやつてばかりいるから言つただけだ」

「何よ人のこと馬鹿馬鹿つて、馬鹿つて言つほうがば……」

「星華」

鋭く名を呼ばれ、星華が開きかけていた口を閉ざす。

「いい加減、戻れ」

たつた一言。だが星華のすべての望みを断ち切る言葉に、彼女の表情が凍りついた。

「それ、本気で言つてるの？」

「本気じゃないと思うか？」

問ひに對し問ひで返す。その返事は無言だつた。思はない。そ

の沈黙が如実に答えを表していた。

洸樹はフォニカ力神殿の学者達を束ねる立場にある。つまりそれは、神殿における星詠みを管理するという事。いつだつて机の上に書類の山がいくつもあつたことを。

そんな洸樹がわざわざこんなスラムにまで足を伸ばしてきて、嘘をつくはずがない。

「いつまで我が儘を言つていいつもりだ。このままでは、長老会も黙つていられない」

長老会。腐りかけた星枢軸の根幹を表すその言葉に、星華の肩が大きく跳ね上がつた。

「……今は俺の方からもつじばらくは様子を見てもうつとうに何か言い聞かせている。お前みたいなじやじや馬は無理強いをしたところで、梃子でも動かない」とは分かつてゐからな

「なあつ……！」

「だがな

不羨な物言いに怒氣を募らせた星華が反論を繰り出すのを、洸樹は遮つた。

「もう抑えていることもできない。長老会も傍観はしていない」

まるで時を止めてしまつたように、星華の表情が凍りついた。

「爺どもに対する俺の力も、そこまで強くない。一月後には星夜祭も控えている。いずれ長老会が動き出したら、その時はどんな手を使つか分からぬ」

最高位星学者といえど、星枢軸の駒である身分には変わりはない。長老会に進言できるのは、信仰者から見た『星詠みの巫女に仕える』という身分の高さから。しかし、星枢軸といつ組織においてそれは通用しない。

こぞ長老会が一声命令すれば、それが星華にとつて最悪の結果を

もたらすことであろうとも洸樹は動かなくてはいけない。

星華はただ歯を噛み締めていた。俯く事なく、洸樹の視線を真に向から受け止めている。

返事はない　だからこそ、洸樹は言わざるを得なかつた。

「お前は、いつまでもあの盗賊団にいられると思つてているのか」
氷のようだ、と洸樹自身も思つてしまつほどそれは冷たい一言だつた。声も、言葉も。

天の色をした星華の両瞳が、そのとき初めて揺れる。

「いいか。お前は星詠みの巫女だ。それはお前にとつて不本意なことかもしれない。だが、お前がいなくなれば、民が動搖する。事実、既に巫女不在に不安を感じ神殿に大勢の人が押し寄せてきた」

それでもか、と洸樹は静かに問いかけた。

俯く星華と洸樹の間に、沈黙が降りる。一秒、一秒、と時を重ね、数秒後。よつやく星華が震える唇で音を紡いだ。

「嫌よ」

それが、答えの全てだつた。

洸樹は静かに星華の手首を握つていた手を放し、それから、「また……会いに来る。その時は良い返事をくれると期待しているよ」

次が最後のチャンスだ。

そんな響きを含ませた言葉を残し、洸樹は少女に背を向けた。

路地から出て行く洸樹の後ろ姿が見えなくなる。

途端、力の張り詰めていた全身から力が抜け、星華は倒れるように壁に背を預けた。

『お前は、いつまでもあの盗賊団にいられると思つてているのか』
体の内側まで抉るような洸樹の声が、まるで呪いのように何度も頭の中に響いては消えない。

いつまでもいられない

そのことは星華も薄々は実感していた。

もう何年も、星詠みの巫女として多くの人々の前で星を詠み、踊つてきた。色んな人の、色々な思いが込められた視線を浴びてきた。この身に科せられた役目は、嫌というほど理解している。そして、人々の眼差しに込められた思いも。

信仰が集まるのは、組織である星枢軸ではない。導き手としての象徴である星詠みの巫女に入々の心が寄せられる。

そして気付いた。このまま星枢軸と対立していながら、踊り子となることの難しさに。誰が否定しようと、一度星詠みの巫女に選ばれた以上星華は一生その称号に縛られることとなる。

いつかは戻らなくてはいけない。

(星夜祭……もうすぐだもんね)

確か一ヶ月後位だつたか、ナヴィガトリアでは星に感謝と祈りを捧げるための祭りが催される。星華はその祭りで、舞を夜空に捧げなくてはいけない。例年だつたら、今頃は舞の調整に追われている頃だつた。

このまま星詠みの巫女が戻らない。そんなことになつては、星に祈りを捧ぐ事が出来ない。信仰の要を失つてしまつ。

だから、洗樹が長老会を抑えていられるのももう限界なのだ。

このままでは、長老会はなんとしてでも星華を連れ戻しに獅子宮や人馬宮を差し向けるだろう。きっと影の星の皆に迷惑を掛けてしまう。魁がレオと鬪つたときのように、誰かが傷つく。魁は自分がせいではないといったが、引き金となつたのは自分だ。

けれど、それでも

(それでも、あたしはここにいたい)

そう願うのは、いけないことなのか。

欲しくもなかつた称号と役目を押し付けられる日々に戻らなくてはいけないのか。

また、あの友達も仲間もいない神殿の部屋の中に戻らなくてはいけないのか。

思考を振り払つよう、ひゅっくりと頭を振る。

(行こう)

力の入らない足でふらりと立ち上がる。急に姿を消して彩も斎もきつと慌てている。

大丈夫。あたしはまだ闘える。魁だつてずっと星枢軸と闘つてきたんだ。

そう弱々しい一歩を踏み出した瞬間、星華の視界は闇に包まれた。まるで塔のようにうず高く積み上げられた本の山が、机の上から崩れ落ちる。

「それは……本当なのか？」

震えた小さな咳きが、部屋に寂しく響いた。

「間違いないよ」

彼の問いに、數十分前突然魁を訪ねてきた情報屋　畢は静かに首肯した。

蜃氣楼の遺跡の奥で見つけた『央都ナヴィガトリア』　この二日間、魁はずつとその言葉の意味を探し続けた。

アジトを構えてから二年。その間集めて集めた何十、何百という本を読み漁った。

深夜から明け方にかけて本物の晨星を探して天体望遠鏡を覗き込む日課の合間にも、何十冊と読み続けた。

けれど、どうしても見つからなかつたのだ。

央都　聖都でも王都でもない、その意味を。

そんな時、畢が突然魁を訪ねてきた。元来外をあまり出歩くような人間ではない彼が、切迫した声で『魁はいるか?』と、以前渡した古い歴史書を片手に。

そして、魁は聞かされた。

星枢軸が隠したものの一つ。星華とあつた夜に、星枢軸が隠された神殿の宝物庫で見つけた、旧語で書かれた歴史書の中身を。驚きか、それとも怒りからか、震える手を押さえつける。

「星枢軸は、どれだけの嘘を……！」

蜃氣楼の遺跡の真実を。夜明けの晨星の存在を。この歴史をあの砂漠で起こった、逃げようのない惨劇を。

星枢軸は 一体どれほどのものを隠し通せば気が済むのだろう。だが、納得できなかつた。

(何故、隠す必要がある ？)

八百年前に突然発生した大地震よつて、今は蜃氣楼の遺跡と呼ばれている都は滅んだ。地下の圧力によつて水の湧き出る、砂漠の命の源であるオアシスが枯渴したのだ。

だが当時の人々は、水が日に日に減つていく中、新たな湧泉を見つけた。それを求めて、多くの同胞を失いながらも人々は歴史上稀に見る砂漠の大横断を行い、移住した。そして新たな都 聖都ナヴィガトリアを築いた。

この歴史は、星枢軸に何の関わりも持たない。むしろ歴史の真実を隠し通すという事は、身の危険を膨らませるだけだ。

蜃氣楼の遺跡 否、星の旧跡。

星の軌跡を辿る道が、まだあの遺跡には残つているのか？ と、そう思つたときだつた。

「魁兄つ！」

床に散乱していた本や書類を蹴散らして、勢いよく開け放たれた部屋の扉。淀んだ空気を切り裂く声と共に、斎が駆け込んで來た。それに続いて、息を切らした彩が。

魁の視線が栗色の瞳とぶつかり、堪えきれなくなつたかのように、彩が胸に飛び込んでくる。

「星華さんが、星華さんが……つ！」

涙を滲ませて縋つてくる彩に、魁は目を細めた。

* * *

「……本当に一人で行くのか？」

アジトより離れたスラムの一角、砂埃が立つ路地の真ん中で、何

度目になるか分からぬ炯からの確認に、魁も何度目か分からぬ肯定の意を返した。時刻は既に深夜、草木も眠るほどの静寂が辺りを包んでいた。

「ザキ、ね……そいつが夜明けまでに来いって言つたんだろ?」

斎に視線を向ければ、小さな少年は自分の失態に沈んだまま小さく頷いた。

星華が攫われた。事を現すのはその一言で十分だった。
攫つたのは、ザキ。魁と同じく、巨蟹宮のスラムで盗賊団を束ねる男だった。

だが魁と同じ盗賊といえど、その働きぶりは最悪だ。星極軸が持つ民から奪われた財を奪い返す 影の星 が義賊のようなものならば、向こうは文字通りの悪党。強盗、強姦、力に任せて何でもやる。それが星華を酒場に連れて行つた日に、彼女を襲おうとした三人組のリーダー すなわち、魁が退けた者の一人だったのだ。

魁から見ればそんな男知りもしなかつたし、覚える価値もなかつた。それが、今になつて厄介ごとを運ぶ位だったらあの時に一ヶ月は動けなくなるような怪我を負わせとけばよかつた。

「あんな、何も処刑されに行くわけじゃないんだから……」

「星華を人質に取られてたら動けない。同じようなもんだ」

若干心配性の癖がある青年に呆れたように咳くと、厳しい目で返された。

彩と斎に聞いた、向こうが突きつけてきた要求はただ一つ。

『星華・セイリオスの命が惜しければ、夜明けまでに一人でアジトに来い』

そんな要求をしてくる以上、争い事になるにしてもただの殴り合いで終わるわけがない。炯の言つとおり、向こうは命を狙つてくるだろう。

畢に聞いた情報では勝手な縄張り意識を持ち前々から魁をよく思つていなかつたの事だが、今回の件は端的に言つてしまえば、逆恨みだつた。

あの時星華を手中に収める事ができず、魁に負けてしまった報復。そのために、星華を人質にとり、敵陣のど真ん中に一人で来るよう仕向けた。

自分の首にそんな価値があるとは思えないが、これでも一応は影の星の首領だ。ナヴィガトリアを騒がせる盗賊団の首領を打ち負かしたとなれば、その名は一気に広まりを見せるだろう。

名誉

そんなくだらないプライドの為に星華は攫われた。

「本当にごめんなさい……私たちがちょっと田を離したから…………」

「責めるわけじゃないが、謝つて解決する問題でもない」

頃垂れる彩に居た堪れなくなつて、魁は夜空に視線を逃がした。

「雨、か……」

「どうしたツスか？」

ポツリと言葉を零した魁に、斎が不安げに見上げてくる。

「いや、珍しく雨が降るなつて思つてな」

「雨……ツスか？ 空は晴れてるツスけど……」

斎の言つとおり、空はいつもの砂漠の空と同じく晴れ渡つている。星詠みを用いて天候や自然災害を予測する金牛宮からも、雨が降るという予報はない。

だが、この星空模様からすれば明け方近くには雨が降るだひつ。「いつもより見える星の数が少ないし、この時間は見えるはずのヒアデス星団が見えない。上空の大気が湿り気を増したんだと思うが」まるで魁の台詞に合わせたかのように、乾燥した土地柄には似合わない、少し肌に張り付くような一風が音を立てて通り過ぎる。嫌な風だ。

「……恵みの雨だといいんだけどな」

『また』 星華の脳裏に浮かんだのは、その一言だつた。

星詠みの巫女であるからあの夜、ザキたちに狙われた。

星詠みの巫女であるから、レオは星華を連れ戻そうと魁と刃を交えた。

そして『星詠みの巫女』であるから、また魁達を巻き込んだ。事が起きた度に、自分は星華・セイリオスではなく『星詠みの巫女』であるのだと思わされる。自分が争いの火種であるのだと、痛感させられる。

だから、来て欲しくなかつた そう、思つていたのに。

「よお、影の星 首領様、この間はどうも」

まるで十年来の友人に挨拶するかのように、星華を攫つた張本人

ザキが片手を上げる。その視線の先には月色の髪をした魁が、周囲の様子に臆することなく佇んでいた。

部屋の中央に立つ彼の正面にはザキ。入ってきた出入り口はザキの手下に塞がれ、部屋中を柄の悪い賊に囲まれている。

その部屋の一番奥に、星華はいた。両手は縄でしっかりと縛られた上に、腕は胴と一緒に括られた状態で首に鋭利なナイフをあてがわれている。唯一自由が利くのが足だが、それで何とかなるような状況ではなかつた。

魁は挨拶を返すこともなく、無表情のままに口を開く。

「そちらの要求どおり、一人で来た。星華を返してもらおう」

魁が人の合間から星華を見つめる。交錯する蒼い瞳は、どこまでも静かだつた。一瞬、心の中の不安を消してしまうほど。

魁のその言い方に、ザキが口元に裂けた笑みを浮かべた。そうまるで玩具を見つけたように。

「星華、ねえ……その前に、武器を外せ。持つている武器全部だ」ザキの更なる要求に、魁は何の抵抗も見せなかつた。一言も発すことなく腰に提げたベルトに手を掛け、まず接近戦用のナイフを手に取り床に投げ出す。それからシースに入つていた細い投擲用の細いナイフもまとめて投げ捨てられた。

「ブーツの中のもだ」

用心深いザキに、魁が右足のブーツの内側に手を入れ、一本のナイフを取り出す。左足も同様だつた。

「これで全部だ」

その言葉と共に、最後の一本が放り投げられる。

放り投げられたそのナイフが、床に着くか着かないか。

その瞬間、ガツ！ と、骨を殴る鈍く嫌な音がした。

目を逸らすこともできなかつた。魁の背後近くにいた手下の一人が、その身の影に隠し持つていた鉄パイプで魁の後頭部を力の限り殴つたのだつた。

「魁つ！」

床に倒れ伏す魁。その頭からは今の衝撃で頭部が切れたのか、血が流れ落ち金色の髪を赤く染めていた。

彼が起き上がるよりも早く、他の一人が彼の胴体に蹴りを入れた。体が少し宙に浮き、魁の口から小さな呻き声が漏れる。

その様子を見て、ザキが星華を振り向いた。

「連れてけ」

「へいっ！」

予想だにしなかつた首領^{ザキ}の命令に星華が驚くよりも早く、星華を捉えている男が威勢良く返事をし、星華を上の階へと連れて行こうと引っ張つた。

「放せ！」

何とか身の自由を得ようと試みるが、男の力に星華が敵ははずもなかつた。咄嗟に声を上げようとしても、口をふさがれる。

その無骨な手に、星華は思いつきり噛み付いた。一瞬だけ男の手の力が緩む。そして、星華は声を張り上げた。

「魁つ！」

呼んでどうなるわけではない。そう分かっていても叫ばずにはいられなかつた。

「なんでつ、なんで来たの！」

来て欲しくなかつたわけではない。むしろ、来てくれて本心は喜んでいる。けれど、

（また、巻き込んだ）

来れば自身の身が危くなる事など、魁だつて誰に聞くまでもなく

明白だつたはずだ。

星華の声に、魁がかすかに頭を持ち上げる。星華を見た左田は、流れた血で赤く染まつていた。田も背けたくないよつな痛々しい姿。それなのに、

「お前が……言つたんだろ。『あんな風に踊つてみたい』つてな……」

魁は笑つていた。こんな状況だといつのじ。口角を吊り上げる自嘲氣味な、けれど自身に満ち溢れた笑み。魁がよく見せる、いつもの笑みだつた。

「だから、こんなとこで終わらなによつに、来た。お前は、こんな所で諦めるのかよ！」

言い終わると同時に、その笑みが氣に入らなかつたのか手近にいる男が魁の顔を蹴る。

「つ、魁！」

もう一度彼の名を呼ぶのと同時、彼の姿は星華の視界から消え失せた。

「あーあ、本当に降り始めやがつた」

唐突に降り出した滝のような雨を見上げ、炯は不満の声を上げた。砂漠にとっては恵みの雨だ。だが、このコンディションは最悪だ。濡れれば服が重くなり動きづらくなる。このスコールでは、雨の音が強すぎて他の音も拾いにくくなる。

そう思いつつも、炯に雨宿りをしようとした気は皆無だった。どの道濡れるなら無駄だ。

(魁の星詠みはよく当たるなあ)

この間の遺跡に行つた時もそう。炯たちが遺跡での用を終え、砂漠を抜けたその次の日 つまり昨日蜃氣楼地帯では大規模な砂嵐が巻き起こつた。風向きが変わつたのだ。おそらく、そのときに風が変わつた影響もあつての今夜のスコールなのだろう。

「魁も厄介な仕事押し付けてくれるよ」

「あんただから押し付けるんでしょ」

雨音の中でもよく通る声に振り向けば、炯と同じくずぶ濡れになつた姉が腰に手を当てて彼を見据えていた。

「上着ぐらいい着ろよ。風邪引いても知らないからな」

「無駄口叩いてる暇があつたらひとつと行きなさい。魁が殺られる前にね。 しつかりやつてくるのよ」

昔から変わらない、上からものを言つ口調。姉だから仕方がないと思うが、炯はこれが嫌いではなかつた。言葉の裏に、どれだけ相手を思う気持ちが込められているか知つてゐるから。

不敵な笑みを一つ残し、炯は雨音の支配する街へ身を翻した。

痛みが、体中を駆け巡つていた。

鈍い痛み、鋭い痛み。腕から、足から、腹から。色々な痛みが色々な所から感じられて、もはや『痛い』という感覚すら曖昧になりそうだつた。

大の大人が束になつて数十分も無抵抗の相手をなぶり続ければ、誰だつてそうなるだろつ。ましてや魁の体は闘つために鍛えたものではないのだ。

動くこともできなくなり、仰向けに横たわつた魁をザキが見下ろしていた。

一度は負けた相手をこうして地に伏せさせ、見下ろす事が出来てさぞ嬉しいのだろう。口元に浮かぶ笑みは、どこまでも下劣だつた。「本当に単身で乗り込んでくるなんて、よっぽどあの女が大事なんだな。天下の影の星 首領ともあらうお方が、あんな小娘に惚れたのかあ？」

勝者の余裕からか、魁をからかう罵倒がザキから発せられる。

そんなザキに、魁の口から呼氣とも取れる嘲笑が漏れた。

「下衆が。やられた腹いせに、実力では敵わないからと人質を取るか。とことん腐った性」

性根、と言葉を全て発するよりも早く、ザキの砂にまみれた足が

魁の頬を蹴った。また口内が切れたのか、口の中に広がる血の味が一層濃くなる。

「まだ軽口叩く力は残ってるみてえだな。ま、今にそれもなくしてやるけどよ」

とどめようのステイレットを抜き放ち、ザキが獵奇的な笑みで刃を舌なめずりする。

「お前がいなくなれば、俺がこの街で一番の盗賊だ。たいした力もねえくせに正義の味方気取りやがつて、ここは力で支配するスラムなんだよつ」

「くだらない」

瞬間、ザキの高笑いが止んだ。笑みが勝利を喜ぶそれから、剣呑なものへと変わる。

「てめえ、なんつった」

「くだらない」と言つたんだ。復讐、報復、名譽、権力。そんな小さなプライド、何の役にも立たない。ましてや、お前のような貧民街でしか生きられない奴にはな

「……言いたい事はそれだけか」

魁は答えない。答える代わりに、魁は口元に物笑いを刻んだ。侮蔑するような嘲るような、格下の者に見せる勝者の笑み。

そしてステイレットが振り下ろされ

「があああああああつ！」

ザキの狂乱じみた悲鳴が、部屋を抜け、建物を抜け、雨音の響くスラムをつんざいた。

魁を穿つはずだったステイレット　それを持つザキの右手にどこからか飛んで来た一本の細いナイフが突き刺さっていた。そこから鮮血が滴り落ちている。

突然のことに、どよめく手下達。その隙を縫い、魁は反動をつけて起き上がった。その勢いを生かして間髪いれず手近にいた男の腹に拳を叩き込み、相手が突然の事態に困窮している合間に床に散らばっていた自分のダガーを取り返す。

そこでようやくザキの手下が何人か動き出すが、遅い。痛みに軋む体を無視し、それぞれ腹と後頭部、それから後ろ首に一撃ずつ叩き込み最後の一人に足払いを掛けた。

ギロリと睨みを一つきかせれば、輪を作っていた男達が半歩後退つた。

「つたぐ……挑発するのも、大概にしどけよ」

小さなはずの呆れた溜息が、部屋中に木靈する。それはここにいる誰の物でもなく、魁の良く知った最も信頼できる者の一人の声だつた。

ザキの一味が、揃つて声の方向を振り向く。

いつからいたのだらう。きっとこの場にいる全員が思つたことだらう。

ガラスも何もない吹きさらしの窓。そこに、いつの間に現れたのが水の滴る朽葉色のコートを纏つた青年が悠然と腰掛けている。

「……遅い」

「はいはい、文句は後で聞きますよ」

ふてくされたように小さく咳いた魁に、青年　　炯は苦笑を見せた。

「ななつ、何で、どうやってここに……！」

ようやく痛みに慣れたらしいザキが、正面に魁がいることも忘れて炯を振り返る。

「どうやつてつて普通に二階の窓から入らせてもらつたけど」

「馬鹿な！　三階にはオレの部下が……」

「あー星華の所にいた奴？　まあ、ちょっと気絶してもらつただけだよ」

そうである事が当然だとこりみつて答える炯に、ザキが言葉を失う。

信じられないのも無理はないだらう。アジト中に大勢いる手下達を配置しておきながらあつさりと三階に侵入し、その階にいた手下を全員気絶させた上で星華を救出した。しかもその一連の行動を、

直ぐ真下の階にいたザキ達に気付かることなく完遂したのだから。しかし、それが可能であるのが炯だ。影の星において、最も争いごとに長けている者。実力だけを見れば、遙かに魁を凌駕するだろう。

「ま、上手くいったのは雨が他の音を隠してくれたおかげもあるけどな。これぞ恵みの雨」

狼狽するザキに目もくれず、炯は人垣を挟んでダガーを構える魁に笑顔を向けた。

「安心していいぞ、魁。星華はちゃんと燐たちが回収する予定だから」

「助かる」

そう領き返して口の端に付いていた血を手で乱暴に拭う。

雨に濡れた炯を見、それから両の足でしっかりと立つ魁を見てザキが歯軋りをする。

「最初っからやられたフリだつたってことか」

「当然だ。なんの策も弄さず敵中に突っ込む愚か者はいない」

ジャグリングのように、手中でくるりとナイフを回す。

「人質に斬でも彩でもなく、星華を取るという選択は良かつたな。お前がそこまで考えていたとは思えないが、神殿から星華を連れ出した手前、星華の身に何かあれば確實にオレの首は飛ぶからな」

得物を回しながら、ただし、と魁は続けた。

「邪魔になるからと、星華をこの場から引き離した事が失敗だ。星華に付く人数が少なければその分炯が動き安い。星華の無事さえ確保できれば、あとはなんの障害もない」

空中で数回転させたダガーをキャッチし、真っ直ぐにザキに向ける。

「炯といつこちらの手札を知らなかつた時点で、お前の負けだ。」

「退け」

それは以前ザキたちと対峙したときと同じ台詞だった。

武器は全て回収しきっていないが、炯がこの場にいるのであれば

問題ない。完全な形勢逆転。先程の炯の実力を見せられて、ザキたちに勝機がないことなど一目瞭然だ。

だが、ザキの答えは撤退でも抵抗でもなかつた。哄笑が迸る。「詰めが甘いのはてめえの方だ！ やるんだつたら氣絶じやなくてきつちり殺しとくんだつたな！」

その言葉の意味を瞬時に理解し、魁は息を呑んだ。その瞬間を狙つて背後を取つていた一人が剣を振りかぶつてくるのを、反射的に身を捻つてかわす。

階上から騒ぎの音が聞こえたのは、その時だつた。

「ああ、もつつ。来るなつて言つてるでしちうが！」

来るなと言つて来ない者はいない。それは分かつてゐるが敵のあまりのしつこさに叫ばずにはいられなかつた。

ザキの手下に三階に連れ去られ、ばらされるか薬漬けにして売り飛ばされるか、いずれにしてももう終わりだと思つたその間際、雨に濡れた炯が突然部屋に飛び込んできた。炯はまず星華を捉えていた奴を氣絶させ、そのままその部屋にいた全員をあつたりと昏倒させてしまつた。それこそ物音一つも立てずに。

だが炯が魁を助けに姿を消して暫くの後、氣絶したとばかり思つていた男たち数人が急に起き出し、更にはどこに隠れていたのか増援が現れ星華に向かつてきたのだ。

周囲を囮まれないように、階段上へ逃げながら星華は追つて来る内の一人を睨みつける。

「だいたい何よあなたたち、炯さんにやられたんじゃなかつたのよ！」

「いやとうやられなれてるんだよ！ 敵の田を欺くなんて朝飯前だあつ！」

「血饅ができる」とじゅ ないでしょつ！」

そう言つ返しながら、階段下から上がつてくる手元を蹴り落とす。その時、

「星華！」

自分を呼ぶ、耳に馴染んだ声にハツと顔を上げる。その視線の先にいる魁を見て、星華の顔が自然と綻んだ。

「魁！」

「そのまま上に逃げるー。上は屋上だ。屋上なら燐たちが迎えに来るー。」

その言葉と共に、投げたナイフが星華を追つていた男の背に突き刺さる。

「いじは俺が何とかするから……早くー。」

横薙ぎに振るわれる相手のナイフを魁は飛び退つて避け、自分のダガーを振り上げる。硬質な音が響くと同時に相手のナイフが飛んでいき、その隙に懐にもぐりこんだ魁が相手の腕を掴んで床に叩きつけた。

その投げた衝撃がやはり傷に響くのか、魁が苦痛に顔を歪める。（そんな体でどうしようつて言つのよ……！）

ギュッと拳を握り締める。

「追つてくるなら追つてきなさい」ともー。」

そう挑発的な言葉を投げつける。『きょっと田を剥ぐ魁もそつちのけに、星華は階段を駆け上がった。

雨はいつの間にか止んでいた。

珍しく空氣中に充満している湿氣が夜の冷氣を浴びて、上着の一枚も着ていらない体には砂漠の寒さが一層強く感じられる。

姿の薄くなつた北の星を見れば、もう数十分で太陽が世界を照らし出す時刻まで迫つていた。星詠みの苦手な星華でもそれくらいは分かる。

「ありがたく思いなさいよ。星詠みの巫女直々に相手してあげるんだから」

そう、腰に手を当てて星華は田の前で対峙する男に自信たっぷりに言い放つた。

星華を追つて来たのはショートソードを持つ男一人。おそらく、星華の発言を耳にした魁がその場に何人か抑えたのだろう。ならば、それはそれで十分。星華は自分を追つてきたこの男を倒せば良いだけだ。

「調子に乗つてんじやねえよこの女あつ！」

そんな安っぽい台詞を吐きながら、男が真っ直ぐに星華に向かつて突っ込んでくる。

だが、星華は動かなかつた。

眼前まで迫つた男が剣を突きの形に構えるその一瞬、星華は地を強く蹴つた。

「つ つ！？」

突いたはずの標的がないことに男が驚愕の声を上げたその瞬間、星華は宙にいた。滑らかに体をそらし、舞を踊るような軽やかさを持つて宙に浮かび上がつていた。

直後、先程の場所から一步下がつた地に足が着くのと同時に星華は踏み込んだ。男の腹に深々と入る、重い一撃。男が短い呻き声を上げる。

間髪おかず、後ろに回りこんで相手の首筋に手刀を叩き込む。強烈だが、軽い一撃。それで十分だつた。

緩慢な速さで男が前のめりに倒れ、再び起き上がる様子はない。

「星詠みの巫女を舐めるんじゃないわよ」

倒れた男に向かつて吐き捨てる。

星華は星詠みの巫女として長大な舞を踊れるだけの訓練と、保身の術を学ばされたのだ。こんな武術の心得もないような男一人倒すぐらいの研鑽は積んでいる。そう、星詠みの巫女として。

『お前は諦めるのか』 魁が言つてくれたあの一言で、ようやく気付いた。

こんなところで諦めたくない。昔見たあの女のよう^{ひと}に、いつか舞台で踊つてみんなと樂しみたい。その思いがあるなら、迷うことなんてなかつた。

だから、そのために自分がしなくてはいけないことがある。星華・セイリオスとして、星詠みの巫女として。

ゆっくりと顔を上げる。白み始めた空に、太陽が頭を覗かそうとして

「え……？」

その空の光景に、星華の口から自然と声が零れ落ちていた。目の前の景色が信じられず、一、二度瞬く。次の瞬間には、その姿は、すうっと田の光に溶けて消えていつてしまっていた。けれど、見間違いではない。

あんなに強く輝く星など、星華は今まで数えるほどしか見たことない。

夜明けの一時、何よりも強く輝く星

夜明けの晨星は、ツィー山の右側に見えていた。

第五章 空の陰り、長き夜

「オニカ女神殿最上階層の廊下に、荒々しい足音が響いていた。

星枢軸の意向を定める、長老会の命令。そこに呼び出され、会議が終わるや否や飛び出すように出てきた洸樹の後を、補佐官が慌て追いかける。

「洸樹様、長老会は巫女様のことをなんと……？」

補佐官の問いかけに応えることなく、洸樹は歩きなれた神殿の中を通つて浴室前へと辿り着く。そのまま無言で扉に手を掛け、中へと入る。

「い、洸樹様？」

いつもとは違つた上官の様子に、補佐官が首を傾げた。平常心そう自分に言い聞かせる。

「なんでもない」

「顔色が優れませんが……医務官をお呼びいたしたほうが……」

「なんでもないと言つていい！」

突然張り上げた声に、洸樹の背後で彼女が肩を跳ね上がらせたのが手に取るようにな分かった。

「で、ですが……」

「下がれっ！」

殺氣にも似た怒りと共に発せられた命令にて、補佐官は一瞬戸惑つてから恭しく一礼をして退室する。

「ばたん、どこかが乱暴に扉を閉める。直後、

「なんでだ……なんで、俺が、こんな……っ！」

やり場の無い怒りと共に、ありつたけの力で拳を壁に叩きつける。何故自分がこんなことをしなくてはいけないのか。そんな理由、分かりきっていた。

星華が神殿を抜け出したとき、長老会は早急に巫女を捕らえ連れてすべきだと判断を下した。信仰の要がなくなる上、彼女がいる

のはこの街で最も治安の悪いスラムである。

しかし、洸樹はそれに異を唱えた。星華がどれだけ星枢軸を嫌い、自由を欲していたか知っていたから。

長老会とは、星華の影に獅子宮を潜ませることで合意。

だが、星華を連れ出した盗賊の首領は獅子宮を退け、更に彼女を手元に置くことを宣言。そしてそのまま星華を放置した結果、彼女は取り返しのつかなくなるような危険に身を晒すこととなつた。

その報せを受け、長老会の我慢も限界に達してしまつたのだ。

どうして、星華と出会つたのがよりによつて彼だつたのだろう。過去、誰もが羨んだ碌牙の助手にして弟子。資格を剥奪されし星学者。晨星を探し求める、魁と名乗る青年。

(碌牙さん……)

それは、幼い頃から憧れ続けてきた人の名だつた。数多くの星を発見し、そのぬきんでて優れた星詠みで人々を導いてきた星学者。彼が異端者として世界中から蔑視されても、洸樹の中の彼への憧れが曇ることは無かつた。洸樹は知つていたから　　彼に何の罪もないという事を。

許してくれだなんていえない。自分はこれから　　取り返しのつかないことをする。

「はつ……」

知らず知らず、嘲笑が漏れる。誰に対してもない、自分自身に對してのものだつた。

「俺の道行く先は常に災難だな」

いつだつてそうだ。アルカイド^{自分}が示す先には、常に災厄しか待つていない。

* * *

太陽も一番高い時刻を過ぎ、最も気温の高い時間帯に差し掛かつ

た頃。

第四富田蟹宮の一角にある貧民街の酒場の店主、夏埒は夜の開店に向けて準備に追われていた。

開業から早十数年。この酒場はスラムでも特に人が集まる。それに見合つただけの準備を、従業員を雇っていない夏埒は一人でしなくてはいけない。猫の手も借りたいくらいの忙しさだった。

何より、今日は思わぬトラブルのせいで仕事が進んでいないのだから、事の発端である張本人たちに手伝つてもらいたい。

そんなことを腹に抱えた夏埒が表で仕込みに追われるその酒場の奥で、

「ちょっと魁！ 待ちなさいって言つてるでしょ！」

高らかな燐の叫び声が、広い背を追いかけていた。その彼女の人とを弟の炯が困惑した様子で付いて来る。

しかし、燐の呼び声に留まることなく魁は奥の部屋に向かつて廊下を進んでいく。

揺れる金色の髪の下には真新しい包帯が巻かれ、顔やシャツから覗く体のあちこちに見るも痛々しい血の滲む痣がいくつもある。昨夜から今朝にかけてザキと対峙した結果だった。

今朝方ザキのアジトから無事に星華を奪還してきた魁は、影の

星 のアジトに戻るよりも近い夏埒の酒場に身を寄せていた。

ザキたちに負わされた魁の怪我の治療が最優先、という事らしくまだ夜も明けて間もない夏埒の元へ魁達は駆け込んだらしい。

というのも魁自身はどうやら星華を連れてザキのアジトを出た後、負傷による疲労からか意識を失つてしまつたらしくそのことは起きてから聞かされたのだ。

起きたのは今しがた、ほんの十数分前のことだった。そして炯と燐からその一言を告げられた魁は、いても立つてもいられず燐の制止を振り切つて星華の元へ向かつていた。

「今朝の今で、そんな体で無理しないの！ 怪我の治療だって十分に済んでないんだし、体だつて休息が必要なはずよ？ そんなに無

理して怪我の治りが遅くなつ

と、前触れもなく魁は足を止めた。あまりにも唐突なこと、反応が遅れて危うくその背中にぶつかりそうになる燐に、一言。

「……黙れ」

唐突な魁の命令口調に、燐が反論するよりも早く更に畳み掛ける。

「首領命令

その低い聲音に、燐は口を噤んだ。

普段こそこそあまり団内で階級は気にしていないが、一応は魁が盜賊団の首領なのだ。燐は分別もわきまえられないような愚かな人間ではない。

今度こそ静かになつたか、と身を翻そつとする。が、

「首領……命令ですつて？」

地の底から響くような声が聞こえたと同時に、魁の体は力任せに振り向かされていた。

胸元と首にかかる圧迫感と、肺付近の僅かな痛み。気が付いたときには燐が魁の襟を掴んでいた。

確かに裏専門の医者の見立てを燐から聞いたところ、肋骨が何本かやられているらしいかった。

「ざけてんじやないわよ！ こちとらあんたの事を思つてやつてるつていうのに、なにその反応は！？ こいつは素直に年長者のいう事聞きなさい！」

「だから怪我ぐらい何ともないって言つてるんだよー！」

「嘘つけ！ 今朝死体みたいに炯に運ばれてたのはどこのどいつだ！」

そこらへんにいる男よりも尚男らしく胸倉を掴み上げる燐に、つい怒鳴り返してしまつ。

まあまあ、炯が火花を飛ばす一人を宥める。

「姉貴、落ち着け。それに魁も。騒いで怪我に響いたらダメだろ？」だが炯の勇氣ある仲裁も、燐が幾分か声の音量を落としたぐらいで言い争いを止めるには至らなかつた。

「頭ぶん殴られたんだから一回ぐらこちゃんと見てもらいたいなさいよ。後で頭ん中大変なことになつてました、とか勘弁してよ？」

大体あんたは、とおそらく親心のよつなのものなのだろうがグチグチとぼやく燐。

(それが怪我人に対する扱いかよ)

内心燐を睨みつつも、彼女のその艶やかな口元の前に魁は手を当てて言葉を遮り、

「……燐、一ついいか？」

「な、なによ？」

ふう、と溜息一つ。

「怒ると皺、増えるぞ」

ピシィッ！

瞬間、空間に亀裂が入った。そう錯覚すら覚えさせるほどに、空気が凍りついた。

同時に、言葉の重大さに炯の顔から一気に血の気が引いていく。「魁の馬鹿野郎！ 何て一言を言つたんだよー。ただでさえ行き遅れになりかけて、殺氣立つて……」

「……炯？」

ハツと炯が慌てて口を噤むが、燐は聞き逃さなかつた。引きつる燐の頬と、額に浮かび上がる青筋。

「それどうこいつことよー。ええ？」

「うわああああーー。マジでじめんすみませんつ、他意はないんだつて！」

「つまりそれ本音つて事でしょ？が！」

そんなやり取りを背後に、魁は星華のいる部屋へと向かつた。

丁度一言を言つてくれた炯に、内心感謝の意を表す。

「魁！ だからちよつと待ちなさいって…… 星華もあんたと同じで今起きたとこ……」

魁に気付いた燐が慌てて魁を止めにかかるが、時既に遅し。魁は既にドアノブを回し終えていた。

ノックもなしに部屋を開け

その光景に、魁は固まつた。

奥の壁に沿うて、わらわらと、彼女の井戸端会議の

焦点を手前に合わせれば、地に向かって真っ直ぐ流れ落ちる金色の長い髪。

素肌が

ささささささささ

勢いで飛んできた花瓶が直撃した。

「变态、スケベ、痴漢」

一刻後、ようやく部屋に入る事が許された魁に飛んできたのは辛辣な言葉と星華の侮蔑の視線だった。ベッドの向かい側でスツールに腰掛ける魁が、何を考えているのか目を逸らす。

だから悪がいたって言つてゐたるだろ？」

そ、跡か悪そ、に咳く懶の額には薬の染み込ませた白い布が三つ
られている。その下には、幸か不幸か星華の着替えに直面してしま
った代価として、薄っすらと腫れた額がある。

(□//) = &|(\dagger)

「何よ、巫女様の裸を見といてそれだけ?」「どうか、悪かつたつて」

挑発的な星華の物言いに、魁は視線を落として謝るだけだった。それ以外に何も喋ることなく、口を閉ざす。

何か反論が来るのかと思っていた星華は、予想しなかつた魁の様子に思わず拍子抜けしてしまったが、しかし、その無言の意味を理解し、星華もおのずと口を閉ざした。

重い沈黙が部屋を支配していた。

星華は、彼が言い出すまでただ待つた。

「晨星を……見た、らしいな」

絞り出すような魁の声は、星華でも驚くほど震えていた。それほどに、普段の魁からは想像出来ないものだった。

星華が小さく、しかし確かに頷く。

「多分、あたしが見たので間違いないと思つ。東の空、ショダルクバ山脈ツイー山のすぐ右側に晨星はあったよ」

「右側……」

魁は、星華の言葉を口の中で小さく反芻する。口数がいつもよりも少ないので、おそらく思考を巡らせているからなのだろう。

口元に手を当てて思案を始める魁を見ながら、星華は続けた。

「といつても一瞬しか見てないんだけど……」

「一瞬？」

「うん。太陽が頭出すと同時に消えちゃつた。偽物みたいにね」

鸚鵡返しに尋ねる魁に、星華がそのときの光景を脳裏に浮かべる。魁は片膝を椅子の上に立てて、俯き気味に横目で星華を見た。

「どんな星だつたんだ？」

「偽物の晨星みただった。似てた……ような。でも、ちょっと違つた。なんかこう……上手くいえないんだけど、光つてたつていうか明るかつた。あと姿はつきりしてたと思う」

「……似てた、か」

「だから一瞬偽物にも見えたんだけど、明るさからあれが本当の晨星なんだって思ったの」

夜明け時に現れる、何よりも強く輝くとされる星。空を照らし始める太陽にも負けないようなその輝きがあつたからこそ、直感ではあつたが星華はあれが晨星だと思う事が出来た。

「他に何かあつたか？ その時の状況とか何でもいい、気付いた事があれば……」

「うーん……」

魁の問いに、星華はその時の詳細な様子を思い出そうと低く唸る。だがそれも数秒のこととて、ややあって、「あつ」と声を上げた。

「偽物の晨星がなかつた」

その言葉に、魁は一瞬だけ時が止まつたように動きを止めた。どこかぎこちない仕草で星華を見る。

「なかつた、だと……？」

「晨星が見れたのがほんの少しだからタイミングが悪かつたのかもしないけど、あたしが見たときには見えなかつたよ」

信じられないといつたばかりに訝しげな視線を向けてくる魁に、星華は少し戸惑いながら説明する。

見たこともない星の姿 晨星に日を奪われてしまつていたが、あの時東の空には晨星以外の星は一つもなかつた。それは間違いない。

それきり、魁はしばらく黙りこくつてしまつた。

星華がどうしていいものかと迷つていると、ポツリと魁が独り言のように呟いた。

「条件、か……？」

「どうかしたの？」

「少なくとも、俺は今までそんな星見た事がない。だからそのときだけ現れたとすれば、何か特別な観測条件があるのかと思って、な……」

魁の考える事ももつともだつた。星華も、あれだけの明るさをもつた星はシリウスのように夜空で何度か見たことはあるが、あの本物の晨星と思われる星は見た事がない。

時季、時間、場所。それ決められた条件が全て揃つた観測かでしか見られないというのは当然考えられる。

あの時の観測状況はおそらく普段魁が観測している時のものと大して違わないはずだ。時間帯は勿論、魁はここ一年ほど晨星を探してきたらしいので、ならば時季も変わらない。ナヴィガトリアという同じ街の中での場所の違いなど、星空を見るに当たつて大きな変

化にはならない。

強いて挙げれば、砂漠地帯であるにも関わらず珍しく滝のようないい雨が降ったという事。その雨もほんの一時間ほどで治まってしまつたが、常に水資源に乏しい環境を思えば恵みの雨といった。

「……聞いていいか？」

思索にふけっていた星華は、ふとした魁の声に少しだけ驚いて彼を見た。

どうかしたの、と視線で訊ね返すが、魁はどこか明後日の方向を向いている。

ややあって、目を合わせないまま口を含みながら魁は口を開いた。
「その……お前が見たって言つ農星……綺麗、だつたか？」
どこか恥ずかしさを含んだ響き。いつも魁らしくない魁に、自然と星華の顔には笑みが溢れていた。

「うんっ。綺麗だつたよ、すごく。夜の星とはまた違つてね」
何故星軸が隠しているのか分からぬが、魁が『一度でいいから見てみたい』と思うのも納得のいく星の煌きだった。星華もできることがなればもう一度この目で見てみたい。そう思う。

星華の笑顔の答えにそつたか、とだけ小さく返事をし、魁は再びだんまりを決め込む。

だが、やがて何を思ったのか突然手で顔を覆い、そのまま前髪を搔き揚げるようくシャリと頭をかいた。

「ああ、もうつなんでお前なんだかなあ。俺が見たほうが手がかりとしては確かなのになあ」

かと思えば元通り立てた膝と腕に口元を埋めて

「……見たかつたな」

なんで俺じやないんだ。そんな、まるで子供のよつなふてくれられた言い方に、星華は一瞬呆然とし、しかし笑みを零さずにはいられなかつた。

突然笑い出した星華に、魁は不審な者を見るような眼差しを向ける。

「見ればいいじゃない」

星華はそんな視線を気にしなかつた。少しだけ腰を屈め、挑戦的な瞳で魁を見上げる。

「見ればいいじゃない。魁が本当の晨星を見つければ、見られるんだから。存在するんだつたら、見られないわけじゃないでしょ？」

挑戦的な、瞳。

「そうだな、見つければいい話だ」

そう、ふつと口元を緩め、魁は再び星華に向き直った。自信に満ちた口元の笑みと、真っ直ぐに星華を見つめてくるアイスブルーの瞳に、意志とは別に心臓が跳ね上がる。

「纏めると、偽者の消失と晨星の出現は同時。晨星はツイード山の南側に現れ、観測可能な時間は偽物とおおよそ同じ、という事でいいんだな」

深く頷き返す星華を見て、魁が長い睫を伏せる。

やがて瞼を上げた魁は、分かつた、と言呟いて静かに立ち上がつた。

「アジトに戻るぞ」

「……は？」

唐突過ぎる魁の一瞬頭がついていかず、そんな間抜けな声が漏れた。

「ちよつ、魁。今なんて……」

「帰る。調べたい事がある」

そう言つて勝手に部屋を出て行く魁の背を、星華は慌てて追う。魁は命に別状はないものの、少なくとも重傷といえる怪我を負つたはずだ。魁のことだ。一度調べ事を始めれば、また昨日までのように戸惑はずの徹夜生活になるに決まっている。そんな状態で、『調べ事』をさせるわけにはいかなかつた。

暑さ避けにあまり日の差し込まない廊下をしばらく行った所で、燐が角から顔を覗かせる。

「あれ、話は終わり？ 案外早かつたわね。あんな事があつた後だ

から魁が変な気起こすんじやないかと心配だつたけど、よかつたわ
「燐さん、そういう事じやなくて……！」

燐の意味するところに星華の頬に朱が指す。首を傾げている燐の横を平然と魁が通り過ぎていく。と、その時、

「どこか行くのか？ 魁」

廊下に反響する、低い声。いつの間にか現れた炯が、魁の道を塞ぐようにそこに佇んでいた。

魁は田の前に現れた炯すらも無視して、通り過ぎようとする。だが、炯はそれを許さなかつた。魁の腕を掴んで引き止める。「放せ！」

獸のような魁の鋭い瞳。しかし、炯は全く動じなかつた。

「お前、今戻つたらまた休みなしに研究にのめり込むからな。なんでわざわざ酒場に連れてきたと思つてるんだ」

魁は動かない。抵抗も見せないが、かといって炯の言い分に従う気配もない。

その様子に炯はやがて呆れたように溜息を吐き、首だけで背後を振り返つた。

「おっちゃんも何か言つてやつてくれよ」

不特定多数を指す愛称。その言葉に、魁がぴくりと反応を見せる。同時に、炯の背後に大柄な人影が姿を現した。田に焼けた逞しい体と、顎を覆う無精髭。この酒場の店主・夏埒だつた。

魁がゆっくりと顔を上げる。

「おっちゃん……」

「魁、頑張るのは良い事だ。が、やりすぎは良くないのは分かるだろ。体を壊したら、できることもできなくなる」

薄灰色の双眸で夏埒は魁を見据える。

しかし、首を縦に振る素振りすらも見せない魁を見、「それに」と夏埒は静かに続けた。

「お前にもしもの事があれば、アイツも悲しむ」

瞬間、魁の肩がびくつと跳ね上がつた。

「……なら、無理はしない。だから、戻させてくれ」
諦めの悪い魁に、その場にいる全員が嘆息する。
その時だった。

「……なんだ？」

まだ開店前の店の方が、にわかに騒がしくなつた。

夏埒が不審そうに、店の方を覗きに行こうとするその時だった。

『星極軸が 影の星 を襲つた！』

誰かのそんな叫び声が耳に飛び込んできた。

* * *

世界が緋く染まつていた。

黄昏の赤に照らされて、沈む太陽の赤に照らされて。
空に浮かぶ白い雲も、廃れかけている町並みも、全てが夕焼け色
に染まつっていた。

ふと天上を仰げば、東の空にいくに従つて赤から橙、紫を経て濃
紺へと色の深くなつていいく夕焼けのグラデーション。
瞬きすることを忘れてしまいそうなその彩りを遮り、空が、赫く
染まつっていた。

夕焼けの赤よりも、尚鮮烈に空を焼き。
太陽の赤よりも、尚鮮烈に空を焦がし。

世界の黄昏のような炎を天に上らせで、影の星 のアジトが燃
え上がつていた。

それを田の前にし、駆けつけた 影の星 の誰もが言葉を失う。
「なん、で……」

時計塔まで全てを呑み込む炎を見上げ、星華が呆然と呟く。
離れていても容赦なく、襲つてくる炎の熱波に星華の頬から汗が
一つ滴り落ちる。

その下に、見慣れた茶髪の姿。背後に獅子宮と人馬宮の兵を引き連れ、星枢軸で唯一着ることの許される最高位の神官服に身を包んだ彼が佇んでいた。

「洸樹！」

呼び声に、洸樹は星華にゆっくりと視線を移した。遠田にも分かるほど、静かな瞳。

「あんたが……やつたの？」

「そうだ」

平然と、それがなんでもないようこ心える洸樹に、星華は血の沸き立つような感覚を覚えた。全身の血液が逆流している。そう錯覚してしまいそうだった。

「あんた……っ、あんたが言つてた手段を選ばないつてこいつだとだつたのー？」

「あんた……っ、あんたが言つてた手段を選ばないつてこいつと一緒に付いたときには、感情のままに叫んでいた。

洸樹は何も應えない。

代わりに、静かな声で告げた。

「 影の星 首領 魁。度重なる星枢軸への暴挙、蜃氣楼の遺跡への不法侵入。更には第五十六代田星詠みの巫女をかどわかし、農星が偽りであるなどの虚言で民を惑わそうとした。その罪、裁かれるに値する」

洸樹が荒れ狂う熱と共に、深く息を吸い込む。

「よつて、直ちに 影の星 首領 魁斗・D・メグレズを処する！」

彼の口から発せられたその音に、ざわり、と周囲が波立つた。

時が止まつたかのようだつた。いや、いつそ時が止まつてくれたらどれだけいいだろ？

「…………え？」

星華の口から、微かな困惑の声が零れ落ちる。その声に、斎と彩のそれも重なる。

三人 否、周囲の全ての視線が魁に突き刺さる。

燐と炯だけは、真っ直ぐに洸樹・A・アリオスを見据えたままだつた。

その星華たちの「反応」が意外だったのか、洸樹が驚いたように目を細める。

「聞いてなかつたのか？」

言つた、止める。そう言いたくても、声が出なかつた。炎で焼き付いてしまつたように、喉を震わす事が出来ない。

今すぐ駆け出して、洸樹の喉笛を引き裂いてやればいい。邪魔者が消えるじゃないか。そう思うのに、体は心が切り離されてしまつたかのように動かなかつた。

「師である碌牙・ミルザムと同じように異端の研究に手を染めた。

所詮は、『光の当たらぬ星』という事だな」

嘲笑うような言葉。だがナヴィガトリアの民の手前か、その表情は冷静さを保つたままだつた。

あの魁斗

離反者碌牙の弟子

そんな囁きが、口々に聞こえる。

（な、んで……）

これじゃあまるで、三年前と同じではないか。ガクシと膝から力が抜け、体が崩れ落ちる。だが、両膝が地に付くことはなかつた。

「立て」

頭上に降つてくる静かな声。炯が魁の上腕を掴んで無理矢理に立たせていた。

炯を見上げようとして、けれどそんなことすらもできなかつた。「何やつてんだよ馬鹿野郎！ 立て！ お前はあんな奴らに屈するのか！？」

嫌だ。星極軸なんかに、屈したくない。

「魁、立つんだよ！ こんなところで捕まつて 死んでいいのか

よー。」

捕まりたくない。死にたくない。
立つ。起つ 立て。立ち上がり。
なのに自身を奮い立たせようとしても、指の一本すらも反応を見
せてくれなかつた。

魁斗……

脳裏に、懐かしい声が木靈する。

(師……匠……)

脳裏に浮かび上がる全てを無に還そつと、炎を吹き上げて燃え上
がる研究所。

周囲を炎に包まれ、呼吸すらもままならない中で師匠は必死に魁
斗を助け出そうとしてくれた。

いいかい、魁斗。忘れるんだよ、晨星のことなんか……

そう あの夜も、こんな炎だつた。

「魁斗を捕らえ、巫女を連れ戻せ」

洸樹その命令に一糸乱れぬ返事が聞こえると同時に大きくなつて
いく、鎧の音。

チツという炯の小さな舌打ち。

焦点の合わなくなつた霞む視界の中で、音だけが妙に鮮明に聞こ
えていた。

「燐、魁を連れてけ！ 僕がこいつらを食い止める。斎と彩は星華
を守れ！」

「了解」

炯に代わつて今度は燐が魁の体を支え、半ば引きずるようにして
後方に下がらせる。

直後、空氣を裂いて耳に届く金属音。絶え間なく響くそれが、どんどん遠ざかっていく。歩いている。そんな感覚すらもなかつた。全てが、どこか遠い世界のことのようだつた。（なあ、師匠……俺が何をしたつていうんだ）

ただ星を見たかった。それだけだったのに

第六章 星の旧跡

酒場の一階へと続く階段から姿を現した炯を見るや否や、星華は音を立てて椅子から立ち上がり彼に駆け寄った。

星華と影の星がいるのは、夏埒の店だった。だが、夜も深まつたというのに星華たち以外に人影はない。あんな騒動があつた後で、スラム全体が出歩くような雰囲気ではなくなり、スラム中の店が閉められてまるでゴーストタウンのようになってしまった。

「魁は……？」

不安げに見つめる星華に、炯は静かに首を横に振った。

「部屋にいる。まるで魂が抜けたみたいだ。なのにこっちが何か言うと、妙にヒステリックになつて騒ぎ出す。あんな魁、始めて見た」酒場のあちこちに座る人々を一通り見、炯は疲れた様子でカウンターへと着いた。腕や顔のあちこちに巻かれた、白い包帯。いくら炯の技量を持つとしてでも、一人で獅子宮と人馬宮を相手にするのは荷が重すぎたのだ。

再び満ちる静寂に、その場に立ち戻っていた星華はカウンターの一席へと戻った。あの日、魁と斎の二人と一緒に来たときに座つた席だ。

夏埒が目の前にカクテルを造つて置いてくれる。しかし、手を付ける気にはなれなかつた。

「……燐さんと炯さんは、知つてたんだね」

誰にともなく、星華の独り言のような咳き。

「まあ、それを承知の上で盗賊団組んだんだからね」

黙つてすまなかつた。まるでそう苦笑するような燐の口調に、星華は静かに瞼を伏せた。

魁斗・D・メグレズ 有名すぎる名前だった。

王都レクスフォールにあるといつ世界隨一の王立天文学校を主席で卒業し、以後星学者として碌牙・ミルザムの助手を務めた少年。

だが、その後碌牙が星に関する不穏な研究をしていくとの話が浮上し、星枢軸が動いた。

彼に告げられた罪状は『晨星が偽りであるとの虚言を振り撒いた』と、それだけ。当時、既に星詠みの巫女であった星華はそう聞いていた。

王都にある碌牙の研究所は全焼し、彼自身は炎に焼かれ死亡。残った助手達は星枢軸に捕らえられ厳重な処罰を受けたと聞く。

だが、彼の弟子である魁斗ただ一人だけがその後行方不明だつた。星枢軸に捕らえられる事もなく、しかし研究所跡から遺体が発見されることもなく生死すらも分からぬままであった。故に、魁斗は表向きには現在も指名手配中である。

碌牙・ミルザムという星学者が星の発見、星詠みを用い世界に大きく貢献していただけに、その一報は大々的に世界中に報じられた。また、その弟子で行方知れずとなつた魁斗のことも。

星に大した興味もない星華ですらも知っていたのは、そのためだ。まさか、魁があの魁斗だとは思わなかつたが。

星華も頬くらゐは写真で見た事があつた。魁に初めて会つたとき気が付かなかつたのは、魁斗は茶髪であつたのに、魁は月の様に明るい金色の髪をしていたせいだけではない。

星華が見た『魁斗』は大人しい顔をしていた。純粹無垢 そんな言葉が当てはまりそうな、真つ直ぐにカメラを見つめる視線は今 の斎のようだつた。

それが、三年前のこと

「三年前の事は、知つてゐるな」

斎と彩、それに星華の顔を順々に見、硬い声で、夏坪はそう切り出した。三人は揃つて小さく頷く。

「既に察しはついていると思うが、星枢軸の差し金だ。碌牙は秘密裏に晨星を見つけ出そうとして、でもそれが漏洩したんだ」

声が酒場に浸透していくと共に、徐々に空気が張り詰めていく。

「研究所には火が放たれ、それまでに碌牙が調べ上げたことは全て灰になつた。星枢軸は晨星に関する一切を消そうとしてたからな」

（全てを……消す）

同じように、全てを消すために魁のいる 影の星 のアジトにも火を放つた。夏埒の言葉に、ようやく星華は洗樹 星枢軸の行動に納得がいった。

「碌牙は汚名を着せられ、行方不明になつた魁も星学者としての資格を剥奪された」

剥奪された。それを聴いた瞬間、魁の言葉が脳裏に思い出された。一応は、星学者だ。

あの時、蜃氣楼の遺跡で魁が戸惑いがちに言つたのは、今は星学者としての資格がないからだつたのだと、ようやく星華は気付く。自然と俯いた星華を気がかりに伺いながら、燐が夏埒の後を引き継ぐ。

「あたしと炯が魁と出逢つたのはその数カ月後。あたしらは元から盜賊紛いのことをしてて、魁が碌牙さんの昔馴染みであるおっちゃんを頼つてナヴィガトリアに來ていたところをこのスラムで会つたんだ」

「なんでおっちゃんなんスか？」

斎が首を傾げて夏埒を見る。わざわざスラムで酒場を嘗む夏埒ではなく、他にも頼る人はいたのではないか。それは星華も一瞬浮かんだ、純粹な疑問だった。

夏埒は目を伏せてから、ややあつて答えた。

「碌牙はな、魁に星と星詠みを教えた師匠でもあり、魁の育ての親でもあるんだ」

「育ての親？」

「魁は孤児だ」

鸚鵡返しに訊ねた星華に、夏埒は間髪入れず返した。

星華は思わず息を呑む。

「碌牙との付き合いであつちやい頃から魁とは何度も会つてたから

な。孤児である魁斗が頼れるところなんて、そつそつなかつたんだろ？』

一層沈んでいく空気を気にかけながら、燐が再び口を開いた。

「あたし達もちょっとわけありで星枢軸に恨みはあったからね。聞いたんだ『復讐でもするのか』って」

「そしたらあいつ、言つたんだよ。『星を見つける』って

それを言つたのは燐ではなく、炯だった。

「師匠を殺した星枢軸に復讐したいわけでもない。星を見つけて名譽が欲しい訳でもない。ただ、師匠が見つけようとした星を一度でいいから見てみたいってな」

それは、あの夜明けの時に魁が星華に言つた言葉そのものだった。「だから俺たちは魁の後ろ盾になれるように、影の星を作った。俺たちも元から星枢軸と対立してゐるし、戦うんだったら一人より大勢の方がいいだろ？」

軽薄そうに炯が笑つて見せる。笑いきれない笑顔は、少しでも場の雰囲気を軽くしようとしての、彼なりの努力なのだろう。

「万事、上手くいってると思つたんだけどね……」

燐が重く深い溜息を吐き出して、麦酒を煽る。

同時に、溶けて形の崩れた氷が、星華のグラスの中でカラリ、と乾いた音を鳴らした。

「ねえ星華。なんでこの盗賊団が、影の星つていうか、魁から聞いた？」

そう唐突に話しかけてきた燐に、星華は無言のまま首を横に振つた。

そんな星華に、燐は静かに話し始める。

「影の星つていうのは、光を浴びない星つていう事じやないんだよ

その言葉に、星華はびっくりして目を丸くした。今までその意味を深く考えたことなどなかつたが、そのニュアンスと光樹の『光知らぬ星』という言葉から今燐が言つたような意味を連想していた。

「自ら光を発することなく、普段は太陽の光が強すぎて、光が当た

らない影の部分みたいに私たちに見えないから、『影の星』って言つらしょ

「それって……」

まるで晨星のことではないか。

音にせすとも星華の言おうとしたことを理解して、燐がにこりと微笑む。

「アイツの師匠が残した、唯一の手がかりらしいよ。盗賊団の名前を決めるつて時にね、教えてくれたんだ。あいつは研究のことは他に何も喋らうとはしない。晨星のことにつき足を踏み込んだ奴がどうなるかなんて、アイツが一番良く知ってるからね」

「公にはそれでいいが、畢から聞いた話、碌牙の助手たちは晨星のことは一切知らなかつたらしい。本物の晨星があるという事すらな。だが、それでも星枢軸に捕らえられた後、今も厳重な監視下に置かれて働いている」

「星枢軸もそう簡単に人命を奪つわけにはいかないからね」
ストン、と。その瞬間、まるで胸のつゝかえがなくなつたかのように何かが胸に落ちた。

「……」からともなく、鼻をする音が聞こえる。発生源は斎だつた。
「……僕、前に魁兄になんて蜃氣楼の遺跡のこと調べてるんスかつて聞こうとしたツス。でもそしたら、怒られて……」

斎の声が詰まり、小さな嗚咽だけが酒場に響いた。斎の隣に寄つた炯が目線を合わせるつうにその場にしゃがみ込んで、少年の頭にぽんつと軽く手を置く。

なんとなく、分かった。魁が仲間にすらも情報を教えようとしないのは決して相手が信用できないからなんじゃない。

巻き込みたくない　彼なりの、ぶつかり合はうな優しさなんだ。

途端、田の奥が一気に熱くなる。

「ねえ星華」

優しい声音が降つてくると同時に、いつの間にか隣の席に座つていた燐が星華の頭を抱き寄せた。

「確かに星華が 影の星 に入つたのは成り行き上だつたかもしれない。けどね、あたしは星華がここに来てくれてよかつた。初めてだつたんだよ。魁が誰かを部屋に入れたのも、自分から晨星のこと話をしたのも、偶然かもしぬなかつたけど研究を手伝わされたのもなにより、あんなに嬉しそうに星を探す魁、初めて見た」

燐が赤子をあやすように、星華の頭を柔らかに叩いたり撫でたりする。

「おっちゃんでも炯でも、あたしでもない。星華 あんたが一番、今魁に近いところにいるんだ」

溢れそうになるものを抑えるのに必死で、星華は何も言ひ事が出来なかつた。

* * *

暗い階段に、二階へと登る小さな足音が響いていた。

炯から魁が一人にして欲しいという事は聞いたが、それでも星華は自然と魁の元へ向かつている足を止められなかつた。

彼がいるはずの部屋の中には誰もいなかつた。代わりに部屋の中に、月明かりの影が伸びてゐる。その影を辿つた先にはベランダ。外と中を仕切るところどころ割れたガラス戸の向こうに、金髪を夜風に揺らした魁がいた。

上着も着ずに冷たい石の床の上に座つて背を丸め、手のひらで顔を覆つて俯いている。その姿が、どこか泣いてゐるようにも見えた。テーブル席の間を抜け、ベランダのガラス戸を開ける。同時に室内に舞い込んできた夜風が、星華のポニー テールを攫つていつた。

その音に気付いてか、魁が緩慢な動作で顔を持ち上げた。かすかに首を動かし、星華を一瞥する。

「なんだ、まだいたのか」

砂漠の夜よりも凍てついたような声に、星華は凍りついたように動きを止めた。

「早くどっかに行け。俺が星枢軸につかまるのも時間の問題だ。そうすればお前もタダじゃすまない」

「……やだ」

紡ぎだした声は、魁の聲音に氣圧されたようにかすかに震えていた。

魁の瞳に剣呑な光が宿る。

「その言葉の意味を、分かつてるのか？」

「分かつてるよ。でも嫌だ」

はつきりと言つ。今度は震えても掠れてもいなかつた。

「おっちゃんたちから聞いたよ、碌牙さんのこと。それに助手の人たちのことも」

「なら分かるだろう？ 晨星に関わった者がどうなるか……幸い、お前以外はまだ詳しいことを知らない。白を切れば、隠し通せるはずだ。けど、お前は違う。知りすぎた。伝えたのは俺の責任だ。けど、晨星の手がかりを知っているとばれたら、それこそお前は一生神殿で暮らすようになる」

早口に少し苛立つた口調。対し、星華はどこまでも静かだった。声も、心も。

「分かつてるよ」

「じゃあ何で？」

「嫌なものは嫌なの」

「つ！ 僕は、もう失いたくないんだ！」

俯いたまま突然張り上げられた声に、星華の肩が反射的にびくりと跳ね上がった。

驚きと困惑の入り混じった瞳で、魁を見る。そして、ようやく気付く。

「このことで、もう誰も失いたくないんだ！ 師匠みたいに……っ

魁が震えていた。

「たった一人の、家族だった。なのに、いなくなつた……炎に焼かれてつ。あの時、偶然こつちにいたから良かつた、けど……もしさジトにいたら、いなくなつていたんだ。炯も燐も、斎も彩も 星華も」

絞り出したような掠れた声は、泣きそうに揺れて
「怖いんだ……もう、仲間が消えていくのが……」

肩を小刻みに揺らして、魁が震えていた。

一ヶ月で魁の事が全部わかるとは思っていない。けれど、それでも星華が今まで見たことのない、悲しくなるほど弱々しい魁が目の前にいた。

「こくり、とつばを呑み込む。

「……だから、諦めるの？」

また怒鳴るのかと思つたが、魁は静かなままだつた。

返事はない。そのまま風切りの音だけが聞こえ、数十秒後。

「夢……だつたんだ」

ポツリと、呟いた。そこに氣力の欠片すらも感じられない。炯が、屍のようだと言つた理由がなんとなく理解する。

「晨星を自分で見つけて、自分の目で見る事が」

「けど、アジトは焼かれた。資料も望遠鏡も……もう、星を見つける術もない。もう直ぐ、きっと俺の人生も終わりになる。 だから……いいんだ」

諦めの言葉が、魁の口から紡ぎだされる。 聞きたくない。

「もう……いいんだ」

繰り返された、諦めの言葉。

瞬間、星華の中で何かが音を立てて切れた。

「ふ……ふふ。ふふふふ……なんか分かつたわ。今唐突に、とてつもなく分かつたわ。あんたが何年かけても見つけられない理由がね」何故だか無性におかしくなつて、いつの間にか星華の口からは不気味な笑い声が漏れていた。

なんとか笑い声を抑えて、深呼吸をする。そして、

「甘ったれんじやないわよ…」

力の限り、叫んだ。

「！」の優柔不斷！　一回やるつて決めたんだから最後まで遣り通しなさいよ！　見つけられるはずないじゃない。そんな、そんな中途半端な気持ちで！」

魁がまるで叱られて萎縮する子供のように身を強張らせる。

「望遠鏡がなくなつた？　星を見つける術がない？　ふざけんじやないわよ！　あんたには目があるでしょ、星を見るこことできる目が！　その目で晨星を見るんじゃないの！？」

肺に吸い込んだ空気を全部出さん勢いで、一息に言い切る。その瞬間、すとんと肩の力が抜けると同時に、何かが胸の中から抜け落ちて行つた。

一瞬前まで星華の中で渦巻いていた怒りは、どこにもなかつた。

代わりに、泉のように澄んだ心があつた。

「前に聞いたの。星枢軸に敵対する盗賊がいるつて。それを聞いた時、すごいと思つた」

星華は静かに、語り始める。分からなくてもいい。伝わらなくてもいい。ただ、聞いておいて欲しかつた。

「あたしはずつと神殿から抜け出したかった。『無理だ』って最初から諦めてて　　その盗賊がうらやましかつた。星枢軸に真っ向から喧嘩売れて」

初めてその盗賊が現れたその時のこと、星華は今でもよく覚えている。ナヴィガトリアの街はその話で持ちきりになり、フォニカ神殿中が慌てていた。

「そう思つ内に、時間は過ぎてつた。その間にも盗賊は神殿貴族を襲い、神殿に忍び込んで、何度も危ない目に会つた。でもね……」

一度、息を吸いなおす。

「その盗賊は退かなかつた。立ち向かつていつた。だからあたしも頑張つてみようつて　　抜け出してみよつて、そう思えるよつこなつた」

魁が、ハツとしたように顔を上げて星華を見る。星華は、少しだけ微笑み返した。

(気付くのが、遅いよ)

「それで魁と会って、星のことを聞いて、ただ一つの事のためにずっと頑張つて星枢軸と闘つてる魁を知つた」

魁から視線を逸らし、満天の星空を見上げる。

「あたし、魁に憧れてた」

いつか魁みたいになりたい。逃げてばかりではなく、強くなつて星枢軸と闘えるようになりたい。夜明けの光に照らされた魁の横顔を見た瞬間から、あの強い眼差しが脳裏に焼きついて離れなかつた。「決して折れることなく、真っ直ぐに星枢軸に向かつていける魁がいたから、あたしは頑張つてみようつて思つた。星詠みの巫女であつても、その役目から逃れられなくとも、できる限りは抗つてみようつて」

何故だか彼の目を見る事が出来ずに、星華はそのまま星空を見つめ続けた。

星が流れ、静寂が幕を下ろす。

寂しげな風の音は、いつの間にか優しい歌のようなメロディーを奏でていた。

頬が少しだけ熱い。冷たい夜風でも、その熱を冷ましてくれそうにはなかつた。

心臓が、五月蠅いぐらいに激しく脈打つ。

「……あたしや、神殿に戻るうと思つてる」

魁が、驚愕に目を見開いて星華を見つめる。諦めるのか、とそう問うてくる瞳に首を横に振つた。

「諦めるんじゃない……魁はあたしに言つたよね。『お前は、こんなところで諦めるのか』つて」

ザキに攫われて、もう諦めるしかないとそう思つた時、魁はいつも笑顔で言つてくれた。

「こんなところで、あんな奴らに負けたくない。そう思つたからか

ら、決めたんだよ」

あの言葉で、星華は気が付いた。

「『』のままじやあたしは神殿に連れ戻される。いつか踊り子になりたくても、『星詠みの巫女』っていう称号が邪魔する。けど、星詠みの巫女はあたししかいない」

胸元で、両手を握り合わせる。まるで、祈るようだ。

「だから、あたしは戻るの。星詠みの巫女と向き合つために戻るの（抜け出して、良かつた）

あの日抜け出して本当に良かつたと思う。魁と 影の星 の皆と会えた。神殿の外を知る事が出来た。楽しい時間を過ごせた。勇気を貰った。大切なことに気付いた。

魁は硬い表情のまま呆然と、星華を見上げていた。

砂色のマントを外し、魁の肩にそっとかける。

星華の夜明け色の瞳と、魁の黎明色のそれが交差し ふわり、

と まるで朝を迎えた薔が開くように、星華の顔が綻んだ。

「戻つて、なんともならないかもしね。それでも、自分の力で洸樹も長老達も納得させて、役目を止めることはできなくても、せめて外で自由に踊れるぐらいにはしたい」

すっと立ち上がり、星華は魁に背を向けて。

「まだ道が絶たれたわけじゃない。だから、あたしは絶対に諦めない」

それが、魁と出会つてから星華が導き出した答え。踵を返した星華は、一度も魁を振り返らなかつた。

冷えすぎた体には寒い風が、小さな溜息を攫つた。

「憧れてたなんて、言うなよ……」

（憧れてたのは、俺の方だ）

最初はすごく憎かつた。星詠みの巫女なんて誰からも憧れ、慕われる存在が、正直言えば嫉ましかつた。

でも、一緒にいる内に星華は自分と同じで星極軸と闘つていたと

知り、その姿に憧れた。星枢軸と闘つことのできる星華がうらやましかった。

自分はあんなふうに、笑うことなんてできない。三年前のあの日、炎に全てが包まれた夜のことだけは忘れようと思つても忘れられないのに、それまで覚えていた笑い方という記憶だけをそこに置いて来てしまつたかのようだつた。

当たりすぎた夜風に身を震わす。と、その時、

「クソガ」

そんな短い罵倒が魁の頭上に落ちてきた。気配を消して近づいてきたその人物を、はつと見上げる。

「女一人泣かしといて、何悲劇の主人公ぶつてるんだよ」

炯から告げられたそのことに、魁は驚きを隠す事が出来ずに目を見開いた。あの星華が泣いていた？

魁は何も応えない。それを見て、炯がポツリと口を動かす。

「諦めるのか」

まっすぐに見下ろしてくる視線。哀れむわけでも、蔑むわけでもない。けれど、何故だかその視線を真っ向から受け止める事が出来ず、魁は顔を伏せた。

「頭ん中から……離れないんだ。あの時、炎の中に消えてつた師匠の声が……師匠を焼いた、炎が目を閉じても消えないんだ」

「だから、諦めるのか」

間髪いれず炯が聞き返してくる。だがそれは魁を責めるものではなつた。

「お前、この団の首領をやるつて決めたんじやなかつたのか」「どこまでも静かな炯の声。鋭くもなく、威圧しそうともしない細波のような響き。

「誰も失いたくないのなら、巻き込まないよう一人で星を探せばいい。お前が団の首領となることを了承した時、斎と彩を仲間にした時お前は、魁は仲間を持つことを決めたんじやないのか」「だからこそ、その言葉はゆっくりと魁の内側へと浸透してきた。

決して仲間を増やしたいわけではなかつた。けれども魁は斎も彩も、星華も放つて置けなかつた。だから、炯と燐、斎と彩 そして星華。仲間を持つと決めたとき、あの時の自分は失わない覚悟を持った。首領として、皆を守り抜けばいいだけだと。

手放す気はない レオにそう静かに吼えて、魁は闘つた。

星華を失いたくないから、獅子宮と、そして星枢軸に新たな喧嘩を売つたのだ。

(まだ道が絶たれたわけじゃない)

魁の表情に、それまでとは違つ何かを感じ取つた炯が口元を綻ばす。

「……諦めない。俺は」

小さく、だが確かな意志を持つて呟いたその瞬間。

微かな歌声が、鼓膜を震わせた。

* * *

熱かつた。

体も頭も目も、目の端に溜まつたものも熱く、星華にはそれしか感じられなかつた。

一度は姿を潜めたそれが田の端から流れ落ち、耳の後ろを伝つて屋上に小さな染みを作つた時、星華はようやく自分が泣いているのだと実感した。

何故泣いているのかすらも分からぬのに

「綺麗、だな……」

酒場の屋上で仰向けに寝そべつたまま、星華は吐息を吐き出した。不思議な気分だつた。心は風一つない水面のように妙に静かなのに、頭の中は正反対だつた。色々な言葉が現れては消え、忙しく飛び交つてゐる。

それらが静まり涙が退いた時、星華の中には一つだけ残つていた。

「踊り……たいな」

何かあつたとき、星華は常に踊ることを選んだ。怒つたときも悲しいときも、踊つていれば全ての気持ちが治まるべき所へ還つていつた。それが踊りと呼べないものでも。

何を踊ろう、とそんなことを考える暇もなかつた。

気が付いたときには星華は立ち上がり、足が一步を踏み出していた。

天地の狭間　星の民

微かな歌声が、風に乗つて広がつていく。
歌は得意ではなかつた。

それでも、星が人々の道標であるのなら
(どうか、魁の道行きを示して下さい)
その為に、自分は祈る。ここで、星たちに舞を捧げよう。

黄昏時に照らされて　浮かぶ夕星導く闇

夜空に歌声が溶けていった

* * *

吹き込んでくる、冷たい砂雜じりの夜風が頬を撫でた。その乗つて聞き慣れた鈴のような声が魁の耳に届く。

一段、また一段と魁は屋上へ続く階段を上つていった。ゆっくりとどこかおぼつかない足取りで、不思議な歌声に誘われるようになつた。

雄雄しき金牛　猛り大地を踏みしめる

天は微睡み嘆けども　双児の瞳は目醒め知る

聞いたことがある詩だつた。集約詩　星夜祭で星詠みの巫女が踊る星の舞に合わせて巫女が歌う、星を讃える詩の各節の頭を取り簡略化された詩だ。公式の場で謡われる総詩に対し、集約詩と呼ばれ、人目に付く事はめつたにない。

最後の一戻を上り終えた瞬間、髪を揺らす風が一層強さを増した。視界を掠めた金色の髪に、顔を上げる。

一瞬、心臓が鼓動を止めた。

月明かりが降り注ぐ今にも落ちて来そうな星空の下で、星華が踊る。

華麗に、流麗に、荒々しく、静かに。星屑の髪を靡かせ、宝石のような瞳を夜空に向け、

天地の北辰今一度 夜明けの陽を待つ ただ独り

瞬きすらも忘れて、魁はその神々しい姿に魅入つていた。

この世でもっとも有名な舞　星夜祭で踊られる星の舞。その足取りは星の位置を指し示し、動きは星の輝きを表し、歌声は星へ捧げられる祈りだと言われている。けれど、

(違つ……)

どこかが違う。魁の記憶にある何かと、目の前で踊られているそれが噛み合わない。記憶の奥底が、違和感を訴えている。舞が終焉へと向かつていく。

暁時に染まる空 現る晨星導く朝

魁はじつとその舞を見続け

「きやつ……」

気が付いたときには走り出し、高みで踊る彼女の腕を掴んでいた。バランスを崩した星華が倒れこんでくるのを、魁はしっかりと受け止める。

「ちよつ、何すんのよ！ 危ないでしょ！？」

「お前……その舞は何だ」

「何つて、星の舞に決まってるでしょ？」

少しだけ頬の紅潮した困惑顔で見上げてくる、腕の中の星華を見つめ返す。

「お前のその舞……公式に記録されているものと違つ

「えつ……？」

「星図と一致しないんだ」

「ま、まさかそんなはずないでしょ？ だってこれは歴代の巫女が一寸たりとも間違えないように、受け継いできたのよ？ あたしだって間違えたりしないわよ」

「そういうことじやない」

魁の声に含まれる、焦りと高揚。

「その舞の歌が、踊りが指示する方向が偽物の晨星を指していない上に、お前が見た晨星の方向と一致している」

「ちょっと待つてよ……それって……」

「……なんで気が付かなかつたんだ」

心臓が五月蠅いぐらいに早く脈打つ。

「星華の舞は、本物の晨星を指している」

* * *

夜明けの日差しが、店内に射し込んでいた。

「先に、皆に言つておく」

酒場の一階に集められた面々を見回し、魁は緊張した面持ちで呟いた。

そこには星華を含んだ影の星 の全員と夏埒、そして魁に呼び出された畢が大きな円を描くように佇んでいた。

「これから話すことは、晨星に繋がる核心だ。これを見たら後戻りできなくなる。星枢軸に捕まつたら、首が飛ぶのは必至だ」

一息吸つてそれから吐き出し、覚悟を決める。

「今まで黙つてつて、すまなかつた。けど巻き込んだからこそ、勝手かもしれないが皆には知つておいてもらいたい。これ以上巻き込まれるのは」「めんだ、と。そう思うのであれば、退室してくれ。影の星 も抜けて、これから先自由に暮らしてくれて構わない」魁はもう十分、ここにいる皆を大変なことに巻き込んだ。これ以上巻き込む道理はない。

そんな魁の前に、斎が一人進み出でくる。

「誰がなんと言おうと僕らの首領は魁兄ツス」

そうギュッと手を握つて一心に見上げてくる。顔を上げて燐、炯、彩を順に見れば皆そろつて頷いてくれた。夏埒と、そして畢も。「ここまで関わつておいて今更だ。碌牙の探し物でもあるしな」「面白そつじやない。是非とも聞かせて欲しいものだね」

そして、星華。

「覚悟なんて、とつぐの昔にできてるよ。神殿に閉じ込められる気も、死んでやる気もないけどね」

そう言つて、にかつと笑う星華。

(怖がる必要なんて、どこにもなかつた)

魁が誰かを失わせるつもりもなければ、皆も失われてやるつもりもないのだ。

「 ありがとう」

笑顔は伝染する 昔聞いたそんな言葉の通り、そう、魁は微笑んだ。

「 まずは、これを見てほしい」

そう言つて魁は一番大きなテーブルにナヴィガトリア周辺の地図を広げた。

全てが灰になつてしまつた今、頼んで畢の物を持ってきてもらつたのだ。それと羽ペンとインク、定規やその他諸々。

それらを使い、魁は遠慮なしに地図に書き込んでいった。まず偽

物の晨星を現す丸印をツイー山の左側に、それから星華の舞によつて分かつた晨星の位置を書き記す。

「舞に示された星が、星華が見たという本物の晨星と一致する。星の舞は本物の晨星を指し示していると見てまず間違いないだろ?」

そう説明を加えながらも、魁は作業を続ける。偽者と本物、それからツイー山の中央をそれぞれ聖都ナヴィガトリアと線で結んだ。

「あつ、これつて左右対称つて奴じやないッスか?」

「それをいうなら線対称。まだお前には難しかつたか」

「む、難しくないッス!」

ツイー山と聖都ナヴィガトリアを結んだ線から二つの晨星の位置を見て、声を上げた斎。見栄を張つて言い返す斎に、魁は思わず苦笑した。

「だが、良いとこに気付いたな。この位置取り、加え、星華が晨星を見た時は珍しく、砂漠に雨が降つた後だつた。そこで気付いたんだ」

魁は更にその周辺に書き込みを加えていった。今度は矢印と文字を。

それは蜃氣楼地帯周の大まかな気流や海流と気温の様子だつた。ツイー山の北側は寒流が流れ込み、山を隔てた海の上には冷たい空気が充满している。

ナヴィガトリア周辺の砂漠化の原因の一つだ。

一方、南からは一本の矢印が描かれている。二つとも、南からの暖気を運ぶ風を示している。

片方は南西から蜃氣楼地帯の方に向かつて伸びている。南から吹き込む暖気だ。これが蜃氣楼地帯を覆つような形のシェダルクバ山脈にぶつかり、蜃氣楼の遺跡周辺の気温がナヴィガトリア周辺に比べて高くなる。蜃氣楼が発生する原因とも言われている風の流れだ。もう一本は南東からツイー山へ向かつてのものだつた。これがツイー山にぶつかり上空へ上がる。

ツイー山を挟んでちょうど北に冷たい空気が、南に暖かい空気が

「ツイー山は面白い形をしているな。山にしては稀有な、極端に言えば板を立てたような形だ。この山を挟んでここに記した条件を満たしたとき、一つだけ発生する現象がある。それが、鏡映蜃氣楼」

『鏡映蜃氣楼?』

聞きなれない単語に斎、彩、星華の三人の声が綺麗に重なり、魁は一瞬怖気づく。そんな魁に代わって炯が口を開いた。

「確かに蜃氣楼の一種で、元となる物体の側面に虚像が現れる。上方、下方に比べて極めて発生しにくい……とかいうやつだっけ?」

確認の視線を向けてくる炯に、魁は力強く頷いた。

「そうだ。俺は今までずっと、別の星が星枢軸の手によって勝手に晨星と定められていたんだと思っていた。だが、違う。別の星が存在するんじやなくて、本物の晨星が鏡映しのようになっていただけなんだ。星華が本物の晨星が偽物に似ていたといった理由がこれだな。本物そのものが映っているなら、そつくりなのは当然だか、鏡映蜃氣楼は鏡に映ったように見えるわけではない。その姿は揺らぐし、光の強さも劣る」

確証はないが、と付け加えながらも確信を滲ませる魁の説明に、それまで静かに話を聴いていた夏埒が低く唸つた。

「なるほど、蜃氣楼は温度差によつて発生する。だからこの一帯に雨が降り、ツイー山の頂上付近の温度差が緩和されたときだけに蜃氣楼は消え、本物が見えるようになる、か

「すごい……こんなことがあるなんて」

夏埒に続き、彩も感嘆の声を漏らす。反応はそれぞれ違つたが皆一様に驚いているようだった。当然といえる反応。このからくらに気付いた魁自身も、まさかと思ったほどだ。

しかし、唯一反応の違う人間が一人だけ存在した。

「でも、なんで晨星が蜃氣楼で違う場所に見えるかつて分かつても、それじゃあ根本的な解決にはならないじゃない。星枢軸をどうにかして今見えてる晨星が偽物であることを発表するなりにしたって、

存在する格好となつた。

現物がこのまま見られないなんて、大問題じゃない」「文句を言つてくる星華を、魁は半眼で睨みつける。

「急かすなよ……集約詩の舞に晨星の位置が隠されていた。この詩にはもう一つ重要な要素が隠されてるんだ。今度は歌のほうでないが　謡つていた集約詩を書き綴つていく。その作業片手間に、魁はもう一つの話を切り出した。

「蜃氣楼の遺跡で見つけた『央都ナヴィガトリア』　この言葉の意味が判つた。この歴史書のおかげでな」

「歴史書？」

訝しげに見てくる夏埒に、魁は畢に渡していた一冊の古い本を目の前に上げて見せた。

「神殿からくすねてきたものだ。酷い状態な上旧語で書かれていたんだが、畢が半月以上をかけて解読してくれたおかげで分かつた。解説はまあ、畢に任せる」

「はいはい……」

事前の打ち合わせもなく突然仕事を押し付けた魁に、畢がはあとあからさまな溜息を吐いてみせる。たが、やはり言葉とは裏腹に畢の顔に陰鬱な表情はなかつた。解説した本人からの方が、魁を通して言伝に聞くよりよいだろうといつ魁の考えを素早く読み取つてくれたのだろう。

「斎君、蜃氣楼の遺跡のこととは、なんて知つてる?」

「千年以上前に滅んだ大昔の遺跡……」

「それが大嘘。蜃氣楼の遺跡は八百年前に滅びた央都ナヴィガトリアの成れの果て」

おどけたようにちらりと言つ畢。突然の答えに、この場にいる全員の表情が、驚きに目を見開いたまま強張つた。

（いきなりそれを言うかよ……）

皆が衝撃を受けるのは分かりきつているのだから、ワンクッシュョンは置いて話すぐらいの気遣いはして欲しい。

「八百年前つていうと、ちょうどティコ大地震があつたころよね……」

「待てよつ、その地震つて確かツィー山を崩落させた……」

口元に手を当てて考え込む燐の言葉に、炯が焦燥を含んだ声を挿んだ。

ティコ大地震。歴史上稀に見る大地震の名だ。

シェダルクバ山脈から東に突き出るような形で存在するツィー山。その南側は内海に面しており、地質上崩れ易かつたらしく、大地震が起つた際に崩落した。比較的地質がしつかりしていた北側だけが残り、今の変わった形を形成するようになつたのだ。

畢が大仰に頷く。

「その通り。まさしくその大地震によつて、ツィー山の一部が崩落し蜃氣楼を生み出す山が誕生。更に、央都ナヴィガトリアのオアシスが枯れたんだ」

八百年前に突然発生した大地震よつて、今は蜃氣楼の遺跡と呼ばれている都は滅んだ。地下の構造が変わり、地下の圧力によつて水の湧き出る、砂漠の命の源であるオアシスが枯渇したためだつた。

だが当時の人々は、水が日に日に減つていく中、新たな湧泉を見つけた。それを求めて、多くの同胞を失いながらも人々は歴史上稀に見る砂漠の大横断を行い、移住した。そして新たな都 聖都ナヴィガトリアを築いた。

と、あの一昨日魁に伝えたものと全く同じ解説をその場にいる全員にする。それが終わると、魁が集約詩の最後を書き終えたのはほぼ同時だつた。

「で、それが集約詩とどう関係あるのよ？」

自ら考えようともせぬ先に尋ねてくる星華に、魁は大きな溜息を吐き出す。星華に溜息を吐くのも、すぐ久しぶりな気がした。

「……気付かないか？ 集約詩の流れとこの歴史。いや、集約詩の違和感に」

魁が言つや否や、星華たちはテーブルを上から覗き込むようにし

て、それぞれ詩を目で追つていいく。紙面と睨めっこをすること数秒後、彩の目つきが変わった。

「同じ……？」

「ポツリ、と零れた一言に、魁の口元には自然と笑みが浮ぶ。

「同じつて何が？」

「ええと……」

「今、畢が喋つた歴史とだ」

確証がないことが不安なのか星華の追究にしどろもどろになつてこちらを見てくる彩に代わり、魁は答えた。途端、星華を始めとし炯、燐が怪訝な顔をする。

「彩はどこが同じだと思う？」

「えと……私が見た感じでは詩の一部なんですけど、第一宮の白羊宮のから……」

そう言つて彩は、魁の書き綴つた詩を指でなぞり始める。

『安寧深き夢の底 漂う白羊星詠い

雄雄しき金牛 猛り大地を踏みしめる

天は微睡み嘆けども 双児の瞳は目醒め知る

巨蟹は刃を振り下ろし 夢への惑いを断ち切らん

道行き護る獅子の牙 惑う民の盾と成り

その手に実る乙女の愛 徘徊う民の安らぎに』

それと、詩の折り返し地点に入る北極星に纏わる部分を飛ばした、『運命を図る天秤は 砂の幻へと沈み

天より降りる蠍の針 砂礫に道筋描き出す

聖なる地への門拓く 貴き賢者、人馬の知

磨堀大地に足をつけ 静寂忘れ声高らかに』

その二箇所を声に出して読み上げた彩に、魁は「正解」と呟いた。彩の顔が笑顔で満ちる。

「平和な都、大地震の発生、天の蜃氣楼、枯れしていく泉への不安と絶望、決死の砂漠横断、砂漠の蜃氣楼、砂漠の旅人の道標となる星、聖都の開拓、栄える都 彩が挙げた詩は、それぞれの出来事を想

像させるものになつてゐる。央都から聖都への人々の歩みをな
星華と燐が喉を上下させる。燐に至つては、もう言葉すらも失つ
てゐるようだつた。

魁は続けた。

「集約詩に含まれる歴史。だが、この中には歴史を現していない詩
もある。そこがポイントだ」

ペン先にたつぶりとインクをつけ、魁は先ほど彩が読み上げた詩
を斜線で消した。残つたのは黄昏と夜明け、十一宮の一部と北極星
の詩だつた。

「天地の北辰今一度 夜明けの陽を待つ」

突拍子のない事を言い出した魁に、全員が勢いよく魁を振り返つ
た。

それは、詩の中間 北極星を現す二行詩の一部だつた。

「何故『天地』なんだ？」

どこか驚きながらも分からないと訴えてくる視線を受けながら、
魁は口角を上げて問いかけた。

「一般的には、『まだ夜明けは遠く、星たち天地の北辰は夜の闇の中で太
陽を待つていて』とそう訳される。では、何故『地』が入つている
?」

「それは地の星 夜闇に迷う人々が世界の夜明けを待つてゐるか
ら……」

「()に謡われてゐるのは、北辰と呼ばれる星なのに?」

魁に威圧されてか、戸惑いがちに答えた星華に間髪おかずに切り
返すと、星華はぐつと押し黙つた。

「北辰とは、北極星の呼び方。他にも色々な呼び方があるな。キノ
スラ、フォエニス、ナヴィガトリア」

そこまで言い進めた所で、星華があつと声を上げた。気付いたら
しい。

「世界各所の地名は、世界を天球に例えつけられる事が多い。シェ
ダルクバやツイーがいい例だ」

「天の北辰は北極星そのもの。だつたら地の北辰はナヴィガトリア！」

「それも央都のほうな。央　回る天球の中心軸にある星には相応しい字だな」

嬉しそうに満面の笑顔を向けてくる星華に、魁は静かに微笑み返す。

残つたのは一つ。そしてこれが、詩の謎を解く最後の鍵。

「それじゃあもうひとつ。夜明けの陽　つまりこの詩で言つと『光知らぬ民照らす　輝く晨暉』。それで問題だ。光知らぬ民とは？」

蒼い光を宿した魁の瞳が、どこか楽しそうに細められる。

「宿星が人の命運を表す。人が星そのものに例えられるこの世界。つまり、光知らぬ星」

「影の星　つまり晨星ツスね！」

斎が潑刺とした表情で、魁の台詞を引き継いだ。

それが、碌牙が残してくれたたつた一つの手がかり。詩を説くための重要なキー・ワード。

「合わせて訳すと、央都ナヴィガトリアは晨星を待つ」

それが、詩に隠された最大のメッセージ。

これで、全て整つた。

酒場に集まつた全員の顔を、魁は一人ずつ順々に見ていく。返つてくる、力強い眼差し。

「晨星への道を紐解く最後のファクト　それは蜃氣楼の遺跡にある」

* * *

フォニカ女神殿上層部に設けられた会議室には、重苦しい空氣と寂が籠つていた。

その中央に洗樹は、立ち尽くしていた。追及されるわけでもなく、

糾弾されるわけでもなく。その沈黙が目の前の広い円卓に座る、彼ら長老会の言葉だった。

「……それは、真でござりますか？」

震える声で、洸樹は訊ね返した。

長老会 星枢軸の実権を握る七人の老人達から下された決定を前に、声の震えを抑えることなどできなかつた。

「巫女は神殿の窮屈な暮らしに飽き、抜け出した。そのほどぼりが冷めればやがては帰つてくるだろう。それまでは巫女のために、しばらくは様子を見て欲しいと言つたのはそなた自身であろう」

「間違ひありません。私が申し上げたことです」

一人の老人のに、俯いたまま、しかしさつきりと答える。

「我々は貴公のその望みを聞き入れたその結果、魁斗に晨星の手がかりを与えることとなつた。そして奴はつい数刻前に遺跡へと向かつた。巫女と共に」

「晨星が偽りであるなどと、民に知られるわけにはいかぬのだ」

一番左端に座つていた長老の言葉に、唇を痛いほど噛み締める。何故こんな長老どもの利権のために嘘を吐き続けなければならない

そんな歯痒さが脳内を駆け巡つた瞬間、洸樹の唇は知らず動き出していた。

「もう……いいではないですか」

「何？」

長老会を構成する七人全員が、揃つて眉を顰め目を細める。

「もう長きに渡り星枢軸は晨星という星一つを隠して参りました。いつかは眞実の姿を民に現すと、貴殿らは仰います。では、その時はいつくるのですか？ 貴方がたは、いつまで民を騙し続ければ！」

…

「洸樹よ」

自身の名を呼ぶ声に遮られ、洸樹は半ば口を開いたまま言葉を失つた。

「これは長老会の意志である。いくらお前が優れた星学者であり、

星詠みの巫女に仕えるものだとしても、進言する「」ことはできぬはずだ。この決定は覆せぬ

できることなら耳を塞ぎたかった。

「魁斗・D・メグレズをその手で討て。そして巫女を連れ戻せ。それがお前の責務だ」

下された命令。その決定を覆す手立ては、最高位星学者の光樹は欠片も持ち合わせていなかつた。

第七章 明ける空、最後の夜

暗澹とした階段が、長く続いていた。階段の終着点に向かつて濃度を増す、一寸先すらも見えぬほどの中。

しかし、その階段を下りる魁と星華の足取りは、それを見る者に微塵の不安も迷いも感じさせないほどにしつかりしていた。

「また落ちるなよ」

「またつて何よ！ そう簡単に落ちな……つきや！」

そう言っている傍から足を滑らせる星華に半ば呆れつつ、魁は左手を差し出した。

星華は一瞬戸惑い、それからギュッとその手を掴んでくる。

詩に隠された最大のメッセージ　それを頼りに蜃氣楼の遺跡に来た魁は、星華と共に遺跡の最奥へと向かっていた。そこに　影の星　のほかの四人の姿はない。他の四人は魁の侵入を手助けし、外で兵たちを抑えることを選んでくれたのだ。　つまりは囮となることを。

「で、どこに向かつてるの？」

「枯れた泉の真下に当たる地下だ。集約詩にそれが示されている」「真っ直ぐに階段下を見据えながら答える。

星華が手に持ったランタンで先を照らそうとしてくれるが、それだけではどこか頼りなかつた。魁自身も灯りは持つているが、腰のベルトに提升了まだ。

一応右手は空いている。しかし、いつでもダガーを引き抜けるよう魁はランタンを持とうとはしなかつた。

晨星への秘密を解き、再度蜃氣楼の遺跡に来た以上、遺跡の内部まで兵が邪魔しに来てもおかしくなかつた。一度は完全に魁の命を狙つて来た星枢軸だ。おそらく既に魁の動きには気付いているはず。そのことを考慮すれば、いつでも戦える状態でいたかつた。

少しだけ早足に、それでも星華が遅れることのないように着実に

階段を下りていいく。

『流れ導く宝瓶は 枯れにし泉を潤わせ

揺蕩う双魚地の底へ 零音一つ響きたる』

集約詩における十一宮の最後、宝瓶宮と双魚宮の詩を魁は口ずさんだ。

「この二行だけが、十一宮の中で歴史を現していない」

「単に必要なかつたとか?」

「いや、下手な含みを持たせないのであればいつそ十一宮全てを使つたほうが分かり易くなるはずだ。だとしたら、これも歴史であると考えるべきだと思つ」

「過去の人が歩いてきた歴史と同じように、これは人が通るこれから歴史つていうこと?」

魁の考えを察した星華に、深く頷く。

「集約詩は晨星を見つけられるように作られている。だとしたら、それが遺跡を指すだけではなく、どこへ行けばいいのかが記されていふと考えたほうが順当だ。ならば『枯れにし泉』は聖都の泉の事だと考えられる。』」丁寧に、『地の底へ』なんて書かれてるしな』

「……やっぱり、集約詩は誰かが意図的に作ったんだ」

星華の声のトーンが、数段落ちる。姿は見えなくとも、その表情が曇つたことはなんとなく分かつた。

「全てが隠されていたことだからな。舞に晨星の位置が示されたことを考えれば、昔の星詠みの巫女あたりが作つたと考へたほうが多いだらう」

「でもそう考へると、よく今まで舞が改定されなかつたね」

舞に晨星が繋がる手がかりが隠されていると知られれば、星軸の手によつて変えられてしまう。

星の位置は不变ではない。一夜、一年の中で動くという意味ではなく、何百何千という長い年月をかけて、天球そのものが少しづつだがずつしていくのだ。事実、北極星とされる星は現在ポラリスであるが、その昔はコカブであった。

故に古くから続く星詠みの歴史の中で、星の舞を始めとする星の位置取りを示す舞は何度か改定された。星の位置が変わったという理由さえあれば、星枢軸は怪しまれることなく舞を改定する事が出来るのだ。

「集約詩の舞は、その晨星の部分一箇所だけが違う。なおかつ、ツイー山を挟んだ本物と偽物の位置の違いは、現在のナヴィガトリアから見ればほんの数度しかない。気付ける奴なんてそういうないからな」

「それ自慢?」

「……事実だ」

背中に突き刺さるような視線を感じ、魁の返答が一拍遅れる。

「集約詩に込められた意味もそうだ。集約詩は殆ど謡われることも踊られることもない。見聞きする機会が少なければ、発覚する機会も極端に減る。なおかつ、星枢軸によって隠された真実の歴史を知る事が出来なければ、詩の意味は解けないからな」

話を終えると同時に、階段の踊り場に辿り着く。右方には回廊が伸びており、ここを曲がれば以前訪れた壁画の間に辿り着く。

しかし、そこ魁は曲がることなく更に階段を下へと進んでいった。ここから続く更に奥は、星華が舞を奉納したという場所に繋がっている。魁の予測では、そこがちょうど遺跡群を抜けオアシスの真下に当たつているはずだった。

「でも、なんで星枢軸はその……晨星を隠したんだろう。今じゃなくて、昔の」

沈黙に耐え切れなくなつたのか、唐突に星華が魁にそんなことを聞いてきた。

魁はしばらく何も発さなかつた。星華の質問に対する問いは、星枢軸しか知り得る事の出来ないことだ。

星枢軸が晨星を隠したその理由。察しあついている。

「これは推測でしかないが、多分当時の人々は晨星が蜃氣楼の影響を受けたって事に気付かなかつたんだと思う。央都ナヴィガトリア

も、地震の被害にあつてたらしいしな。それである日、気付いたんだと思う。その日まで見ていた晨星が蜃氣楼でできた虚像だったってことに」「

「ふんふん」

星華が適当な相槌を打つているうちに、階段が終わる。その先には、長い長い回廊が続いていた。はがれ落ちた壁や天井の破片が、床に散らばっている。さすがにここまで潜ると湿気が多くなり、壁や破片のいたるところに苔生している。

この先に答えがある そう思つと、自然と胸が高鳴つた。

魁に何かを感じ取つたのか、星華が手を握り返してくるのが伝わつた。

「だからといって、星枢軸は人々にそれが虚像であると教えるわけにはいかなかつた」

「……なんで？」

「当時を考えれば分かる。オアシスが枯れていく中で、今まで信じていた晨星が嘘でしたなんて発表できるわけがないだろ。だから

「

「星枢軸は晨星を隠し通した」

魁の台詞を引き継いだその声は、星華のものではなかつた。回廊に反響する忘れもない声と、コツコツと歩み寄つてくる靴の音。星華が灯りを持ち上げる。同時に、さながら亡靈の如くその姿が浮かび上がる。

「なかなかいい推理じゃないか、魁斗」

場違いにも賞賛の拍手を送つてくる星枢軸最高位星学者。

「洗樹！」

星華が彼 だが、彼のその手に握られている鈍い銀色の光を放つそれを見て、彼女の表情が凍りつく。

銀細工の施された、細身のショートソード。

「……お前が直々に殺しに来るとはな」

「これは俺の責任だからな。星華を自由にし、結果お前に晨星の秘密を解かせてしまった事へのな。安心していい。地上に控えている獅子宮は暫く入つてこない」

「ちょっと、ちょっと待つてよー。」

互いに殺しあつことを既に了承している二人の間に、星華が割つて入つた。

「なんで一人が……どうして魁が殺されなきやいけないのよー。」

その問いかけに、洸樹は答えることは無かつた。眉尻を下げて、「悪いな、これも命令なんだ」

ただその一言と共に、苦笑する。

音も無く両手でショートソードを構える洸樹に、星華が絶句する。魁は無言で星華を下がらせ、一本のナイフを抜き放つた。右手に大振りのダガーを逆手に、左手にカルドを構える。

「魁斗　　できることならばお前とは違う形で出会いたかった」

洸樹のどこか悲しげな咳きが響いた、その瞬間。
どちらともなく、駆け出した。

鋭い金属音と共に、暗闇に火花が爆ぜる。

振り下ろされた洸樹の一撃の重みに耐えられなくなり、一足飛びに後退。直後、洸樹が体勢を立て直す前に再び接近し、ダガーを横に薙ぐ。その一撃はあっさりと避けられるが、それも予測済みだ。洸樹が回避した瞬間を狙つて、カルドを突き出す。だが、

「つ　　！」

息を呑んだのは、洸樹ではなく魁だった。魁のナイフよりも早く繰り出された洸樹の剣。

がら空きになつた魁の胴体　　心臓を一突きにせんとしてくるそれを、紙一重のところで宙に飛び上がって回避。そのまま洸樹の背後に着地する。

「神殿に籠つてる割にはなかなか動けるようだな」

魁が身の軽さと手数の多さで攻めるのに対し、洸樹のそれは手数

さえ少ないがその一撃一撃が的確に急所を狙つてくる。相手の隙をついた正確無比な剣さばきは、星学者としてはとても思えないほどに練達していた。

「身を守る術ぐらいは持つていいからな。あとは嗜む程度だ」
ふつと洗樹は口元を緩める。

(どこが嗜む程度だ……！)

くるりと、左手のダガーを順手に持ち替え、跳躍。

「文武両道とは、さすが史上最年少で最高位星学者の名を冠したエリート様だな！」

飛び上がったまま、洗樹に向けて真っ向からダガーを振り下ろす。全体重をかけたそれを、洗樹は刃に手を添えた剣で受け止めた。上と下から、力と刃が拮抗する。

「それを言うならば、お前もだろ？。さすがは碌牙の弟子、よくぞ限られた手がかりを見つけ出し、ここまで辿り着いたといつべきか

「 つ！？」

彼の口から出てくるはずの無い言葉に驚愕する魁。その一瞬、ナイフを押す力が緩み、押し返された魁は着地の姿勢を保つたまま数メートル、地の上を飛ばされた。

剣呑な光を宿した魁の視線と洗樹の視線がぶつかり、二人は静止した。距離は、互いの間合いの一歩手前。

「お前、何故そのことを知っている」

集約詩と舞に隠された晨星への手がかり。その事を星枢軸の者が知っているはずがなかつた。知つていれば、当然集約詩も舞も改定されるのは必至だ。

そんな魁の意図を読み取つたのか、洗樹は首を振つてそれを否定した。

「馬鹿な長老どもは気付いていないが、知ることさえあればあんなもの簡単に気付ける」

「だが」

「晨星に辿り着ける者はいない、とそう判断したからだ。それこそ、

星詠みの巫女の協力でも得る事が出来なければな

ちらり、と洗樹が魁の背後で不安そうな顔をしている星華を見遣

る。

「……ずっと、知っていたのか」

「……ああ。最高位になつた時に、全て語り継がれた。 知りた
くも無かつた」

その瞬間、魁の中でそれまで堪えていたものが音を立てて切れた。 沸き上がってきた怒りに呼応して、血が煮え滾るような感覚を覚える。

「知つていたなら、何故お前は動かなかつた！」

再び右手を逆手に直すと、ベルトの後方につけた小さなダガーを引き抜き、洗樹に向けて一気に放つ。三本の投げたダガーは簡単に見切られる。

「お前は全てを知つていながら、許せたのかそれを 星枢軸が何百年にも渡り」

「許せるわけがないだろ？」「

まるで感情の読めない声。

間髪おかず、洗樹の間合いに踏み込む。

「だつたら何故動かなかつた！ 日の当たる場所で、誰もが羨む地位で、成そうと思えば成せた事をどうしてしなかつた！ お前ならば、長老会に反しても晨星を現す事ができたうに！」

「お前に 何が分かる！」

それは先程までの彼とは全く違う、肺の空気を全部絞り出すような声に、洗樹の懷に飛び出そうとしていた魁は思わず足を止めてしまっていた。隙ができてしまい、身構える。

だが、洗樹はピクリとも動かなかつた。無防備なほどにただその場に立ちぬくしている。

「洗樹……？」

星華が不安げに彼を見る。その視線の先、俯いた洗樹の拳は震えていた。

「四年前、魁斗・D・メグレズが王立天文学校を主席卒し、あの碌牙の研究室に入つたと聞いたとき、それがどれほど羨ましかったか

！ 誰もが願つた日の下を歩いているのはどっちだ！」

そこにいたのは、最高位星学者の青年ではなかつた。 洩樹 た
だの星学者としての青年がそこにはいた。

強く握られすぎた洗樹の拳から、血が一滴、滴り落ちる。

「星を見る事が好きだつた。 民の為に星詠みをする碌牙に憧れてこの道を選んだ。 なのに星枢軸の実態は腐つた爺どもの懷を肥やしているだけ。 おまけにいざ最高位の地位を貰つてみれば、民を欺いていました、だと？」

自嘲するような笑みを浮かべると同時に、洗樹が一足飛びに魁の目前まで飛び込んでくる。

(速い つ！)

そう思つたのも束の間、気が付いたときには洗樹の剣が魁のわき腹を浅く裂いていた。 宙に舞う血と傷口を走る鋭い痛み。

それを見て、魁の背後で星華が悲鳴にも似た声を上げる。

「全てのしがらみから放たれ、盜賊として自由の中にしてお前に分かるものか！ この地位を取り、晨星のことを知り、けれども明かせば民を不用意に不安に晒すことになる！ 民を導くべき地位にいることの責務が、お前に」

間髪おかず振り下ろされたショートソードをかろいじて受け止める。 だが、攻撃を流すことはできずに、そのまま剣を押し合つ硬直状態に入つてしまつ。

せめぎ合つ劍と短剣。 どちらが不利かななど、目に見えて分かる。 けれど、退くわけにはいかなかつた。

至近距離でぶつかり合つ、一対の蒼翠の瞳。

「……だからお前も晨星を隠すことを決めた、か」

魁の声はどこまでも澄んでいた。 数瞬前まであつた、身を焦がすような怒りも驚きも、今は何処かへと消えてしまつていた。

「誰もがお前のようにいられるわけじゃない。 諦めずに真つ直ぐに

前を向くことが、どれだけ難しいか……！」

「じゃあどうしてお前は捨てなかつた」

その瞬間、怒気に染まつっていた洗樹の新緑色の瞳リーフグリーンが、揺れた。

それが大きく見開かれていくと共に、剣を押してくる力が緩む。それを逃さず、魁は両腕にありつたけの力を込める。

「地位が邪魔なら捨ててしまえばよかつた。民を不安にさせるのであれば、惑うことのないようにお前が導いてやればよかつた。それだけの実力がお前にはあるだから、最高位の名を持つているんじゃないのか？」

渾身の力で押し返した一瞬、弾かれるように洗樹は後方へと退いた。

「お前は足搔くことすらできなかつたんじやない。自ら足搔くことを諦めたんだ」

上がつてしまつた息に肩を大きく上下させながらも、魁は動きを止めなかつた。静かに口火を切る。

「俺は……後ろばかり向いていた。師匠を失つた過去ばかり見ていた」

横薙ぎに一閃。洗樹の右腕を浅く裂く。破れた服の箇所には血が滲み出していた。

星華が制止の声を掛けるが、魁はそれを無理矢理意識の外に追い出し洗樹がバツクステップで後ろに下がるよりも早く、その頭上を飛び越えて背後を取つた。

「諦めようと思った。師匠を失つたみたいに、もう誰も失いたくない。もう、殺されて楽になるうかとも思つたさ」

諦めようと思つた その言葉が放たれると共に、洗樹の体の中央よりやや左にそれたところにカルドを投げる。

洗樹がそれを避けようと横に飛ぶ。 それでいい。

「けど、星華が教えてくれた。道が途切れているわけじゃない。たた、道の上にいくつもの障害物があるだけだと」

洗樹の背中が、壁についた。洗樹は不意を突かれて一瞬だけ驚き、

魁の接近に気付き剣を振り上げるが、遅い。魁のダガーの方が数段早かつた。

「だから、諦めない。邪魔なもんなんか、脇道にどかしてやる。それがどんなに難しくても」

魁のダガーは洗樹の喉元　刃の切つ先が皮膚に触る一歩手前で止められていた。

チェックメイト　ゲームオーバーだつた。

息を深く吸つて吐くのに合わせて、魁の肩が大きく動く。洗樹も両肩と胸を大きく上下させていた。彼のその瞳に、既に戦意は残つていなかつた。

「今更だけど、俺は思う。晨星が隠れてしまったのは、偶然だつたのかもしない」

けれど、と魁は続ける。

「お前が　　お前達がそうやって抜け出せない闇に入つたのは、自ら晨星を隠すと押すことを決めたから。　自分の中から晨星を見えなくし、自らの夜明けを遠ざけた」

そうやって星枢軸は、今も抜け出せない闇の中にいる。刃を突き付けたままの魁と洗樹の元に、星華が慌てて駆け寄つてくる。

そして放心したままの洗樹を見、柔らかな声音で呟く。

「ねえ洗樹。……諦める必要なんて、どこにもないんだよ？」

喉元に刃があることも忘れたかのように、洗樹が暗い天井を仰ぐ。その顔には、怒りも悲しみも羨望も絶望もなかつた。

ただ一つだけ　　哀しみだけが色濃く浮かんでいた。

* * *

「央都ナヴィガトリアが滅んだのは、星枢軸の失態なんだ」真つ直ぐに回廊を進みながら、洗樹はそう切り出した。それは、魁がどうしても分からずについた、星枢軸が歴史を隠さなくてはいけ

なかつた理由だつた。

「お前達は央都ナヴィガトリアのオアシスとなる地下水脈が地震で崩壊したと思つてゐるらしいが、厳密には違つ」

洸樹を先頭に星華と魁は再び最奥を目指す。更に深くに潜るのが、緩やかな斜面になつてゐる回廊をひたすらに歩いていた。

「ティコ大地震があつた際、ツイー山の崩落によつて晨星の姿に異常がある事は直ぐに分かつたらしい。晨星の虚像が現出していることに。そのことに気が付いた星極軸の学者達は、晨星の姿を出現させようとしたんだ」

「どうやって?」

星華がきょとんとしながら、首を傾げる。その動作に合わせて揺れる金髪は、暗闇の中でも輝きを失わなかつた。

数秒の沈黙。

「ツイー山を再び崩落させるんだ」

意を決したような洸樹の応えに、魁も星華も息を呑む。山を一つ崩落させるなど、容易いことではない。だが、魁はただ黙つて洸樹の続きを待つた。

「な、そんな大規模な事が人為的に……」

「できるんだよ。この、央都ナヴィガトリアを使えば」「迷いのない洸樹の話し方に、星華も自然と口を噤んだ。

「央都の下にある、泉の命脈　地下水脈は、ツイー山の地下水が流れでできたものだ。水脈は、途中大小の鍾乳洞を挟みつつツイー山の麓まで繋がつてゐる。ナヴィガトリアの水脈を崩壊させれば、連鎖的に全ての地下水脈が崩れる、と。それが当時の学者達の見解だつた」

周囲の様相が、徐々に変わつていく。瓦礫ばかりが散乱していた通路から、

「だが、幸いにも央都の地下水脈は崩落しかけただけで、完全に命脈が絶たれたわけではなかつた。危ういバランスを保つて、辛うじて生きていたんだ。そのままではまた崩落する可能性を孕みつつもな

ランタンの炎に浮かび上がる洗樹の横顔に、影が落ちる。

「当時の星枢軸は、二つに一つを選ぶしかなかつた。水脈の崩落を防いで民の命を護るか、それとも晨星を出現させるか」

「それで、星枢軸は晨星を隠し民の命を護る事を選んだ」

「ああ」

晨星を隠さなくてはならなかつた理由。魁の声に洗樹が深く頷く。

「けど、泉は枯れたんだね」

そして、話の続きを促す星華にも。

「その後数十年して泉は枯れた。水脈の補強工事に無理でもあつたのか、それとも元から水脈を守るなんて無理だつたのか。いずれにせよ、その数十年の間に運良く新しい泉が見つかつたために、民は移住。聖都ナヴィガトリアが築かれた」

「じゃあなんでそのときに水脈を崩落させなかつたの？ 枯れた地下水脈なんていらないじゃない」

「聞くより先に考えろよ馬鹿」

考えることを放棄して洗樹に尋ねる星華に、魁は痛烈な一言を突つ込む。星華がむつとする。

その理由は、今の星枢軸を見れば魁にも容易に察しがついた。

「今更嘘です、何て言えなかつたんだ」

洗樹は悲痛な面持ちで、小さく頷いた。

「そのころにはもう、星枢軸は民のためとはいえ吐き通してきた嘘がばれる事を恐れるようになつていて。それどころか、自分達の判断ミスで晨星の姿が隠れ、更にオアシスまで枯らしてしまつた。…民に追及されるのを恐れたんだ」

結果として都が滅んだのだから、民を守るためだつたとの言い訳は通じない。そのことを明かさないにしても、晨星がただの虚像だつたと知られれば星枢軸への信頼は一気に崩れ去る。

だから今の長老会のように、その椅子から追い出されることを恐れた。その言葉の裏に秘められた意味は、そういうことだった。

「だから、失敗の塊である央都の存在を隠し、歴史を隠した」

そう洸樹が締めくくる。それとほぼ同時に、目の前が開けた。

決して人目につく事のない、暗き舞殿。

洸樹が手馴れた様子で壁に掛かっている燭台の油に火を移していく。

炎の赤さに浮かび上がる清廉な白に覆われたその空間は、まさしくフオニカ女神殿の一部を思わせるような造りだった。

星華が長かつた道程を思い出してか、大きく伸びをする。「じゃあ、その地下水脈をぶつ壊しちゃえば農星はちゃんと見られるようになるんだね」

「その方法があればな」

それが予想外の返事だったのか、星華の表情が固まる。そしてたつぱりと数秒後、

「え？」

間抜けな声が星華の口から漏れた。

「俺はその方法とやらを知らないからな」

「ええええっ！？」

驚愕に素つ頓狂な声を上げて、洸樹に詰め寄る星華。

「なんで知らないのよ！　ここまで来たのに無駄足になっちゃうじゃない！」

「知らないものは知らないんだ！　俺は一言も知っているなんて言つていない！」

燐の影響か胸倉を掴んで揺さぶる星華に、洸樹が思わず声を大きくする。その一人のいい争いが始まるよりも早く、魁は素早く口を挟んだ。

「星華、落ち着け。集約詩にこの場所を指す言葉があるんだから、ここにその手がかりがあるのは間違いないんだ」

「……なんであたしだけに言うのよ」

背に突き刺さつてくるような文句を無視し、魁は舞殿の中を歩き回る。

「……なあ洸樹。なんで、こんなところで舞の奉納が行われるんだ

？」

「さあ？」

「さあつて……」

「昔から続いている事だからな。この場所で舞を捧げるってことは、随分前から決められているらしい」

お手上げ、と言った様子の光樹に適当な相槌を打ち、魁は星華に視線を移す。

「もう一つ聞くが、踊るのは星の舞じゃないよな？」

星華がくるり、とその場で一回転すると共に頷いてみせる。

「つまんない舞だよ。ゆーっくり踊るだけなんだもん。それだったまだ星の舞の方が動けるから好きだなー」

どこか不服そうな表情で、言葉を裏づけするかのように、星華が華麗なバク転を決め、更に数度身を捻るように動かしながら舞殿を歩いていく。直後、その足が唐突に止まった。

突然動きを止めて足元を見つめる星華に、魁は怪訝そうな顔をする。

「星華、どうした？」

「……踏んだときの感触が違う」

その言葉を聴いた瞬間、魁と光樹の顔色が変わった。

「なんて言うのかな……音が少し違う感じがするの。あと、足に返ってくる反発も。沈むような感じ。ここと、あつちと」

そう言って、幾つかの床を指差す星華。魁と同じことに思い当たつたのか、視線を向けてくる光樹を見返す。

「魁斗、まさか……」

「可能性としてはあり、だな」

互いににやり、と口角を吊り上げ、

『星華、違う床を全部探せ』

どちらからともなく、そう言った。

* * *

舞殿の中央に立ち、星華が顔を伏せる。

魁も洗樹も、ただ静かにその姿を見つめていた。

そして数秒後　　星華が星の舞の一歩を踏み出した

あの夜と同じく、しかし今は炎の灯りに照らされて舞う星華を見て、魁はポソリと呟いた。

「本当は、星華が解くべきだったんだろうな」

「……だろうな。ここを崩落させる方法だけは星華　巫女であるものにしか解けない」

地下水脈の崩落方法　　それは、星詠みの巫女に代々受け継がれる舞の一つである、集約詩の舞を踊ることだった。

星華の言った感触の違う床は、集約詩を用いて踊られる星の舞の足取りにほぼ一致。魁と洗樹がその場所を調べた結果、おそらくこの場所の更に下に空洞があり、その天上部分に当たる床の何箇所かが脆くなっているようだ。星の舞には、何度か高く飛ぶ場面がある。その着地の衝撃をある順に床に伝えることで、地下水脈を崩落させる事が出来る。

過去に遺跡巡りをした経験がまさかこんなところで役に立つとは思わなかつた。

「舞も、巫女ただ一人しか知らないものだからな」

「けど、当の星華が星詠みは苦手だ巫女になりたくないと言つせんだから、ここにまで辿りつけるはずもなかつたんだけどな」

星華を見て洗樹は困ったように嘆息する。

着地時の星華の微細な振動が、床を通じて足の裏に伝わってきた。

「……洗樹、星華は神殿に戻るらしい」

唐突に話題を切り替えた魁の言葉に、洗樹が訝しげな視線を向けてくる。

魁は星華から田を離さずに続けた。

「夢を諦めたんじゃなくて、夢を叶える為にらしい。今ままじゃ、

『星詠みの巫女』が邪魔だから、せめてもの自由が取れるぐらいに

は長老会と戦うらしい」

洸樹が一瞬驚いたような顔をする。だがそれは直ぐに微笑へと変わり、彼はそうか、とだけ小さく呟いた。

星華が最後の一歩を踏み終える。宙に舞うポニー・テールがふわりと重力に従つて、真っ直ぐに地に落ちる。

同時に蜃気楼の遺跡が、その地下からゆきりと崩落を始める。

そしてその夜、シェダルクバ山脈ツィー山が崩壊。

翌朝、世界はまだ一時強く輝く星と共に夜明けを迎えた。

終章 暁色 朝焼けに染まる世界で

その日、聖都ナヴィガトリアは一年で最も人の多くなる日を迎えていた。街中いたるところに人が溢れ返り、宿はどこも満員、飲食店に至っては客が途絶える事がない状況だ。

そんな中でも取り分け人の集まる白羊宮の、小さな酒場にて。

「なあ兄さんはどう思うよ？」

カウンター席に座る中年の女性と談笑していた店主が、唐突に女性の隣に座る青年に尋ねた。頭からすっぽりとマントのフードを被る青年は、一瞬だけグラスを傾ける手を止めた。

「どうつて、何がだ？」

酒場の喧騒で隣の話が聞こえてなかつたのか、訊ね返してくる青年のぶつきらぼうな声に店主がにわかに慌てる。

「いやいや大した事じゃないんだけどさ、明日の朝、巫女様が夜明けの舞を踊られるか踊られないかって話だよ」

「踊らない？」

怪訝そうに返してくる青年。

「兄さん知らないのか？ ほら、一年前に本物の晨星が見つかって、去年だつたか星枢軸ではそれまでの舞を一新しだろう？」

「けど、『夜明けの星』の舞だけは踊られなかつたんだよ。星枢軸の方が何度も申し立てをして、それだけは踊らないのさ。皆がその舞を待つていてるつていうのにねえ……」

「ずいと青年に耳打ちするように、女性が身を近づける。

「ここだけの話、巫女様は恋人の帰りを待つているらしいよ」

「おい、それは单なる噂だろ？」

「噂じやないさ。巫女様が光樹様に言つたらしきよ。『この舞は魁に一番最初に見せるんだ』って。魁っていうのはあれだろ、碌牙様の弟子で盗賊団 影の星 首領の魁斗様！ 聞いた話金髪碧眼の美男子らしいねえ」

「ふーん……恋人、ねえ」

噂話に咲かせる一人に、青年はただ適当な相槌を打つと、一気にグラスの中身を飲み干して立ち上がった。カウンターの上に数枚の硬貨を置いて、青年は出口へと向かっていく。

「ご馳走様」

「あ、ああ毎度……」

そうだ、と思い出したように青年は眩いで立ち止まった。

「さつきの答えだけど、今年は踊る、のほうに一票かな」

「ほう、それまたなんでだ？」

興味深げに唸る店主に、青年は考える素振りを見せた。

その数秒後、

「恋人が帰つてきました、とだけ言つておこつか」

にやり、と口元に笑みを浮かべると共に、青年がフードを少しだけ持ち上げる。その下に覗く、太陽のような金髪と濃い碧空の瞳。

『ええええええええええええつ！？』

店主と女性の叫びが店内に轟いたのは、青年 この街で魁と名乗っていた青年が街の喧騒の中に姿を消した後だった。

* * *

夜明けが近づいていた。まだ空は真っ暗なままだが、あと十分もすれば空が明るくなり始めるだろう。

そんな星の残る空を見上げながら、フォニカ神殿の東端にある星夜祭の舞台裏に控える少女の背に夜空を思わせる声が掛けられた。

「星華」

その低く落ち着いた声に星華が振り返る。彼女も同じく、落ち着き払つた声色で訊ね返した。

「どうかしたの、洸樹」

「どうかしたじやなくてな……分かつてるよな」

それは、晨星を讃える舞を踊らないことへの注意だった。昨年は

舞台にまでは上がったのだが、そこで立つたまま踊ることなく終わってしまったのだ。

それを言つた途端、それまでの落ち着いた『星詠みの巫女』としての顔はどこへか、星華は拗ねたように頬を膨らませた。

「あれは帰つて来ない魁が悪いんだからね？ 何よ、王様に呼ばれたからつて王都に行つたつきり何の音沙汰もないんだもん」

「そう言つなよ。そのおかげで俺だつてこうしていられるんだし、星華だつて……まあ護衛つきだが外にも出られるようになつたんだ」魁の働きにより、星枢軸が晨星を隠蔽していたと発覚し長老会を構成していた七人の長老達は全員が失脚。それまでに行つてきたナヴィガトリアや他の町への圧政も取り糺されての事だった。

洸樹自身も隠していたという事で星学者の資格剥奪ぐらいの処罰は覚悟していたのだが、魁が王都の機関の方へ取り繕つてくれたらしく、最高位の称号を失うだけで済んだ。

今までそれが重みだつた洸樹にとつては、ありがたいことだつた。更にはそれを機に長老会という閉鎖的制度は廃止され、星詠みの巫女に対する扱いも変わつた。

「炯さんも燐さんもみんな魁が帰つてくるの待つてゐることさ」

「いつかは帰つてくるさ」

ぶつくさと文句を言つ星華に苦笑する。それと同時に神官の一人が星華を呼んだ。 時間だ。

星華が洸樹に背を向け、舞台に続く階段に足を掛ける。

「魁、星夜祭ぐらゝは來てくれると思つたんだけどな……今年も、か」

「逢いたいなら逢いに行けばいいだろ？」

「……逢いたいわけじゃないもの。一番最初に見て欲しいだけ」

蜃氣楼を模した薄いショールを身に纏い、星華は舞台へと上つた。

舞台の中央に、一人立つ。瞼を伏せて俯いたまでも、観客席から期待の視線が痛いほどに突き刺さつてくるのが肌で感じられた。

できる」とならば踊りたくなかった。

晨星は、彼の力があつたからこそ見つける事が出来た。そしてそのおかげで、星華は神殿から出ることもでき、この舞も作る事が出来た。

(魁)

彼の名を胸中で呴き、瞼を開ける。

一面に広がるブルーアワーの青に染めた夜明け前の空。そこに「かい……」

ボロボロになつた砂色のマントを靡かせ、朝焼けに染まり行く東の空を背負い、巨蟹宮の焼けてしまつた時計塔　その頂点に立ち、魁が悠然と星華を見つめていた。

シャン、と　星のきらめきを思わせる、朝の澄んだ空氣よりも尚清廉な鈴の音が響き渡る。

黎明の空にポツリと、一つ浮かび上がる小さな、けれど強い輝きを持つた星。

晨星　夜明けの舞が、始まる。

そう考えるよりも早く、気が付いたときには星華の体は動き出していた。

ただ、無心に踊る。何も考えることはない。

そして夜明けの舞の最後にして、星の舞の終詩に差し掛かる。

蜃氣楼を払う　その意味を込めて、星華はショールを宙に投げた。視界が、霞が掛かつたかのように覆われる。

吹き抜ける一陣の風。それと共に視界が晴れたとき

星華の目の前に現れる夜明けの太陽のような金髪と、ブルーアワーの空をした瞳。紛れもない、魁　魁斗・D・メグレズその人が星華の目の前に佇んでいた。

突然の魁の登場に、観客席にどよめきが走る。「魁斗だ」「魁だ」「盗賊だ」「影の星だ」　色々な呼び名で彼を呼ぶ声が飛び交う。

しかし、そんな声の一つも、星華の耳には入つてこなかつた。心

臓が早鐘を打つ音が、五月蠅いくらいに耳に聞こえる。何を言おう、どうしよう そんな考えが頭の中を駆け巡る。

「久しぶりだな」

一番初めに何を言つかと思えば、至つて普通の挨拶に星華は拍子抜けする。同時に、張り詰めていた緊張が一気に何処かへ吹つ飛んで行ってしまった。

「『久しぶりだな』じゃないでしょ！ ずっと手紙一つ寄越さないで、あんたは……！」

「仕方ないだろ。向こうに行つたら行つたで学会とか引っ張りだこだつたんだから」

「仕方ないって……！」

すつと、唇に押し当てられた魁の人差し指に、星華は口を噤んだ。そして、

「綺麗だった。晨星に負けないぐらい、すごくな」

そう言って、魁が微笑む。そこにあつた瞳は、魁のものであつて魁のではない 彼が魁斗と呼ばれた頃と同じ光が、その目には宿つていた。

「当たり前でしょ」

「それでこそ星華だ。 それじゃ、行くか

「え？」

言葉の意味が呑み込めずに星華が声を零す。それと同時に、

「盗賊は盗賊らしく、欲しいものは奪つて手に入れるべきだろ？」

「うひやあ！」

そう言つと、魁は両腕で星華の体を軽々と抱え上げた。発せられた悲鳴に、魁が可笑しそうに体を揺らして笑う。と、

「魁斗、星華っ！」

明らかに切迫した声が、舞台下から響いてくる。

「うつわヤバ。 洗樹だ……」

星華と同じく久しく見ていなかつたその姿を懐かしく思つてか、魁の顔が自然と笑顔を作る。

「久しぶりだな、洸樹」

「あ、ああ久し……」

「そういうわけで、星華はいただいていきますんで」

突然の事態に動搖しつつも洸樹が返そうとした挨拶を遮るや否や、魁は舞台から飛び降りた。

魁がにやり、と口角を持ち上げて腕の中の星華を見る。

「今度は星華の番だろ？」

自分の目標は達成できた。だから、次は星華の番　　その意味を理解した瞬間、星華の表情が一瞬にして華やいだ。

「待てっ！」と洸樹や神殿兵たちの慌てた声を無視して、魁は眼下の街に向かっていく。

出会った夜と同じように、けれども今度は夜の中ではなく、夜明けの中で。

その手をしっかりと握り、一人は仲間の待つナヴィガトリアの街へと身を翻した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1097y/>

夜明けの晨星

2011年12月31日16時54分発行